國家と武装

日本再武装の理論的基礎

佐野學著

酣燈社

319.8
Sa615k
00234075
×
複写

國家と武裝

日本再武裝の理論的基礎

佐野學著

酣燈社

國家と武裝

日本再武裝の理論的基礎

佐野學著

酣燈社

319.8Sa615k

序

アメリカの社会学者ソローキンの計算によるとヨーロッパでは一四八〇年から一九四〇年に至る四百六十年間におもなる戦争が二千六百回あつたといふ。内乱は紀元前六〇〇年から一九二五年までの間に約千六百二十三件あつたといふ。更にふしぎなことは民主々義が発達し経済的に繁栄し科学や教育の盛んになつた時代ほど好戦的空気がみなぎり戦争のヨリ多くおこつたことが統計的に立証されてゐる。東洋諸国の記録をひろつてもほぼ同じ法則的現象があるだらう。我々は戦争を忌み平和を欲求する。実際上、人類の社会生活の本質は平和のはうにある。しかし歴史の事実は単なる観念論的平和論で戦争の絶滅できぬことを教へる。

現代ほど大衆の平和欲求感情の高まつてゐる時代はないが、同時に二十世紀ほどの大戦争時代は史上にいまだなかつた。現在諸強国の軍拡競争は狂乱的だ。米ソ間には今や外交はなく戦略的対抗のみがある。この険はしい国際的環境のなかで我国では幻想的な平和論や勇気喪失的な再軍備反対論が行はれてゐる。そんな議論はなんら現実政治の対症薬となりうるものでなく、ヤブ医者以上に危険な、ただちに国家生活の解体をみちびき出すことのできる有毒なものである。

国立国会
26.5.21
図書館

234075

私も平和をなによりも欲求するが、それにはまづ戰爭の本質を分析する必要をみとめる。それには觀念論的でなく、現実主義的に、すなはち国際政治を力関係として觀察する態度をとる。国家は今日なほ人類の最も能率的な組織体で、その根本前提は独立であり、独立は一定の自衛武装力を必要とする。国家の武装力は正しく行使されるかぎり却つて平和の保障物である。現下の日本の精神的混乱は武装解除による無力感にもとづく。国家の独立を回復し且つ日本の精神生活の健康さをとりもどすためにも一定の自衛的再軍備の必要がある。新軍隊は旧軍隊の如き帝国主義的性格をもつてはならず、又他国の傭兵的軍隊であるべきでなく、祖国の自由と独立と名誉を守るものでなければならぬ。講和問題も大切だが再武装問題は日本の国家生活の正常化のために講和問題に劣らぬ重要性がある。以上のやうな見地から本書を書き、これを日本を愛する同胞諸君にささげた。

一九五一年四月五日

日本政治経済研究所にて

佐野學

目次

序 …… 一五

第一章　國家の基本權としての自衛 …… 一五

一、国家あれば武装あり …… 一五

1、歴史上の国家と軍隊の型 …… 一五

2、国家独立の保障者としての自衛武装力 …… 一七

3、ユートピヤ的平和主義の害 …… 一九

4、国家の性格が軍隊の性格を決定する …… 二一

二、国家と戦争――歴史的觀察 …… 二三

1、戦争の主体としての国家 …… 二三

2、近代国家と戦争 …… 二五

第二章　戰爭と平和 …… 三〇

一、歴史の輪廻の輪としての戦争と平和……三〇
二、戦争の一般的な根源……三三
1、不等価的な欲望満足方法として——経済的搾取……三四
2、政治的支配の衝動——国家と戦争……三六
3、戦争の階級的根源……三六
4、戦争と人性……三七
5、人類の競争形式としての戦争……三九
三、近代資本主義と戦争……四〇
四、歴史上における戦争の種類……四五
1、反動戦争と進歩戦争……四五
2、攻撃戦争と防禦戦争……四六
3、帝国主義戦争と民族解放戦争……四八
五、平和の方が根本的……四九

六、平和とは何か……五一
1、平和の哲学……五一
2、世界平和への三つの現実条件……五三
3、平和論者の忘れもの……五八
第三章　二十世紀と世界戦争……六五
一、大戦争時代としての現世紀……六五
二、第二次大戦の性格分析……七〇
三、戦後資本主義と新戦争との関係……七六
1、米ソ両経済圏の分裂……七七
2、世界経済のアンバランス……七八
3、経済的ナショナリズムの強化……七九
4、永続的な戦争経済体制……八二
5、国有化と計画経済。官僚的集産主義……八五

四、アメリカの第三次大戦々略構想と日本……八七
五、スターリン帝国主義の興起……九六
1、帝国主義の意味……九六
2、スターリン帝国主義の諸形象……一〇〇
イ、レーニンよりの退却。旧ロシア的な領土拡張欲……一〇〇
ロ、ここでも官僚的集産主義……一〇四
ハ、一大軍営的な強権国家……一〇七
ニ、社会的階層別の成長……一一〇
六、ソ連の第三次大戦々略と日本……一一四
第四章　日本周邊の國際情勢……一一九
一、国際情勢とは何か……一一九
二、現在の国際情勢における主要モーメント……一二三
1、米ソの対立(二つの帝国主義)……一二三

2、第三次世界戦争の危機……一二八
3、国際共産主義の軍事的な動き……一二九
4、西欧諸国の弱体化……一三〇
5、革命を欲するアジア……一三一
6、社会主義への世界史的動き……一三四
7、日独の講和問題……一三五
三、日本をとりまく諸情勢……一三六
1、ソ連と日本……一三六
2、中共と日本……一四二
3、アメリカと日本……一四八
第五章　日本人の中心的價値觀念の崩壞とその再建……一五四
一、日本人の精神までの武裝解除……一五四
二、戦前までの日本人の生活精神……一六三

三、新しい中心的価値観念の再建のために……一六四
1、わが民族の精神的伝統を再検討し継承発展すること……一六五
2、新しい民族主義……一七〇
3、東洋的な社会主義……一七三
四、敗戦民主々義の再整理……一七七
第六章　社會主義と軍備問題……一八四
一、軍備についての社会党と共産党……一八四
二、中立を否定する共産党……一八六
三、戦争に関する共産党の見解および戦術……一八八
四、社会主義諸流派の軍備問題観……一九二
1、伝統理論としての民兵主義……一九二
2、ジャン・ジョーレスの新軍隊論……一九四

3、レーニンの軍備論……一九八
4、民兵主義に返れ……二〇一
第七章　日本再武裝論……二〇三
一、国連集団保障の不安定性……二〇三
二、海外よりの聲……二〇六
三、再武裝に関する日本人の考へ方の分類……二一二
1、再武裝反対論……二一二
2、再武裝不可能論……二一七
3、再武裝よりも社会革命の方が先であるといふ論……二一九
4、再武裝賛成論……二二〇
5、世論調査に現れた圧倒的な再武裝論……二二七
四、再武裝の諸前提……二二九
1、心理的調整……二三〇

2、憲法改正……三三一
3、産業構造の変革……三三三
4、国連の集団保障の確約……三三三
5、アメリカ極東政策の確立……三三四
6、強力なる国民的政党の成立……三三五
五、新軍隊の性格……三三五
1、国家と軍隊……三三五
2、旧日本の国家と軍隊についての反省……三三七
3、将来の日本国家……三三九
4、社会化された軍隊……三四〇
六、新軍隊の構成……三四五
1、陸軍……三四五
2、海軍……三四六
3、空軍……三四七
4、軍隊の編成及び人員の概要……三四八

5、独自の参謀本部の形成……三四九
6、軍事基地……三四九
7、駐屯軍……三四九
七、再軍備と財政……三五〇
八、再軍備への過渡的手段としての警察予備隊の増強……三五一
九、〃革命戦争〃なら行くと言ふ学生の心理……三五三
一〇、アジア、アジア人を打たざる原則……三五六
一一、アジアはインド及び国連と共に……三六〇
一二、アジアの眼は再び日本に集る……三六三

国家と武装

日本再武装の理論的基礎

第一章　国家の基本権としての自衛

一、国家あれば武装あり

1　歴史上の国家と軍隊の型

国家あれば武装あり。古来さうだつたし今でもさうである。むしろ近代は古代や中世よりもつとさうである。これは議論でなくて事実である。歴史上国家は内容的発展をやめず、いくたの形態変化をとげてきたが、武装力なき国家は一つもなかつた。武装は国家の主要属性の一つである。「武装はいらぬが国家の独立は要求する」と演説して歩く連中は矛盾撞着した無意味なことをのべてゐるのである。

国家と武装とは不可分だつた。国家の歴史において軍隊のとつてきた姿をみると次の如くである。

(a)　古代の征服国家では征服者種族の自由民が氏族別又は部族別に軍隊を構成し氏族や部族の長が軍司令官となつた。ギリシアや古代日本がさうである。同時に被征服者をもつて作つた奴隷軍隊をも使用した。

(b) 中世の封建国家では武士軍隊が中心形式で、武士は領主のもとに特別の身分を構成し、百姓町人の上にあつた。農民が兵士として使役された。西欧及び日本の中世にはこの形態が典型的にあらはれた。

(c) 近世資本主義国家になつて国民皆兵的軍隊ができ、徴兵制によつて国民全体が武器に習熟せねばならぬことになつた。それは民主々義によつて推進されたと共に民主々義をも推進した。武裝はいまや武士のやうな狭い階層の特権でなくなり、全国民の義務となつた。武裝力は政治的に悪用されることが多いが、それが社会の特種集団の手を離れて徴兵制による国民全体の義務にも権利にもなつたのは一つの進歩であつた。近代の民族国家がこれによつて促進された。今日国連に加盟してゐる六十余の国家はいづれも自衛武裝力を有せざるはない。国連加盟の資格は一定の自衛武裝力を有する国家に限られてゐる。自衛権は国家の自主性を表徴する。かやうな自主性をもつた国家でないと国連に加入できない。

(d) 今日のソ連は社会主義国家といふよりも領土拡張的な帝国主義の実行者で、その軍隊は今日では対外戦争用のものといふ観を呈してゐるが、社会主義国家の軍隊のあり方を示す新しい性格がないではない。そのソ連軍隊でも「祖国の防衛はソ連各人民の神聖な義務である」「全国民的兵役の義務は法律である、労農赤軍における軍務はソ連人民の名誉ある義務である」（スターリン憲法）と規定し、満十八歳以上の者が徴兵され、又青年層には広汎な軍事教育がある。第二次戦争の敗戦者たる日

独墺を除いて国民の兵役義務なき国はどこにもない。

2　国家独立の保障者としての自衛武裝力

国家間の武裝の衝突が戦争である。戦争には内乱の形式もあるが大部分は国家間の出来事である。しかしだからといつて国家の武裝力はただちに対外戦争のためにあるのではない。その本質は自国の国土、人民とその家族、その文化を守るための自衛である。

自衛と対外戦争との限界は可動であり、前者が往々後者に逸脱することがある。これは国家そのものの本質にもよることである。国家の本質は権力であるから、国家は一の力主義者たる面があり、アウトノミーを何よりも好み、他からの制肘をきらひ、他国家と不寛容となりやすい。国家は民族を内面の柱とするから、そのかぎりにおいて協同社会的性格をもつけれども、民族は他民族に利益主義的に対抗するから、国家相互間には愛情的協働よりも利益的対抗の方が強い。だから国家の自然的衝動は自衛的な武裝力を対外戦争用に転化する誘惑におちいりやすく、殊に近代のやうに技術や交通が発達して世界の空間が短縮され相互の接触が頻繁となるにつれてかかる機会が増大する。殊に大国は強国主義的な戦争能動者になる傾向がある。市場競争における競争者の打倒、原料地の獲得、他国労働力の大量的捕獲、衛星国圏の拡大、端的に領土の拡張、かやうな目的から大国はその武裝力から自衛的性格を抹殺してこれを純粋戦争手段に転化するやうになる。

しかし国家はかやうな単なる戦争主体に終始するものではない。人類の歴史は国家と共に始まつたとなすヘーゲルの言は真である。人間の精神活動は国家ができてから能動的となり、人間は自然的存在から歴史的存在に高まつた。国家は種々の社会的対立を内包しつつも社会的平和を最もよく保障する。国家は今日においても最も能率的な人間組織形式で、現代の計画経済も完全雇傭も社会保障制も又社会主義も国家を主体とせねばならない。植民地支配に苦しみ抜いたアジアの諸民族が先づ求むるものは独立国家であるのは国家がいかに人間の本質的欲求であるかを示す。

国家の第一条件は独立である。現代の国家の根本傾向はその社会化であり、又個々の国家の排他的主権を超えた国際的協同体が成立しつつあるが、その単位となるのは独立性をもつた国家である。そして国家が独立であるためには最小限の自衛武装力をもたねばならない。自国の安全を他国に依頼する国家は事実上、他国の政治的支配のもとに立たざるをえなくなる。保護国から更に植民地に落ちることがその運命である。かかる無気力な民族は世界史の落伍者であり、人類の共同進歩からはね出される。

武装力は殺人、物質的破壊、自由の抑圧等を予想するが、それが自衛のものであるかぎり、それは却て殺人、物質的破壊、自由の抑圧等を予防する作用をする。武装力は一つの物理的力であるが精神なしのものでない。東洋哲学にいふ仁義の師である場合にそれは国内平和の正当な保障者であるのみならず又世界平和への貢献者である。武装なき国家は去勢された、生殖作用なき中性者である。自ら

睾丸を取り去つた者が平和を唱へてみても睾丸ある者を動かしえない。スピノーザはいみじくも「そ、の平和が臣民の無気力の結果にすぎない国家そして、その臣民があだかも獣のやうに導かれて単に隷属することのみを知つてゐる国家は、国家といふよりは荒野とよばれて然るべきである」（スピノーザ、国家論）と言つた。プラトンが共産主義国家のユートピアを描いた「国家篇」は古来の政治学の文献のなかで不朽の地位をしめてゐるが、かれはそのなかで哲人、戦闘者、生産者の三階級を描き、政治的統治者たる哲人の次ぎに国土を守備する戦闘者の階級をおいてをり、最も厳格にして無私の道徳的訓練をそれに期待してゐる。又金権的寡頭政治の国においては支配者は多数者に武器を渡せばそれが敵よりも怖ろしくなり、金銭にたいする愛着から戦費の支出を喜ばざるに至ると述べてこれを軽蔑してゐる。プラトンが最も正しい意味での平和主義者であつたのは疑ひない。かれでさへこのやうに武装的自衛力を国家の主要属性となしてゐる。

3　ユートピヤ的平和主義の害

すべての国家が武装力を放棄することは望ましいことである。戦争の破壊力の増大のためかやうな状態が将来現はれるかもしれない。しかし現在その兆候はない。現在は各国とも必要以上の軍備をしてゐる。大国の侵略戦争力が増大すれば中小国の自衛武装力も相対的に大きくならざるをえないのは不幸なことだ。日本の周辺にはバターを大砲にかへて数百万の軍隊を養ひ虎視眈々として日本をねら

ふ軍国がある。かやうな現実のもとで無武装のままで日本の独立を保ちうると信じ、又世界中で日本だけが無防備でゐることが世界平和の確立の先頭に立つものだと信ずるのは、驚くべき無知蒙昧である。ここでもスピノーザの言をひくと、かれは「民衆なり、政務に忙殺される人々なりが、専ら理性の捉だけに従つて生活するやうにみちびかれ得ると信ずる者は、詩人たちの歌つた黄金時代もしくは寓話を夢みてゐるのである」（「国家論」第一章第五節）と言つた。第一次戦争後にドイツの青年共産主義者が軍備撤廃（今日の日本や西独のやうな状態）を提唱したときレーニンは徹底的にこれを冷罵し、武装が国家の主要属性であること、今日の文明時代でも単純な力作用を以て解決せねばならぬことのあまりに多いこと等を指摘した。

日本を完全無防備状態におくことが平和主義者の任務だとなす論者は、寓話の夢想者であるのみならず、第一には同胞の殺戮と奴隷化の危険に心の痛みを感ぜざる惨虐なる無感情家であり、第二には侵略国の侵略を容易にしこれを導き入れる役割を果たすもので、意識すると否とを問はず事実において外国第五列的作用を演ずるものである。それは結果において共産党への奉仕者であり、口に高尚な言葉を並べながらも侵略者の来たときに自分だけ何とかして助けてもらはうといふ汚い利己的な保身主義に立つ首鼠両端派である。最小限の自衛的武装をも好戦的だなどといふニセ平和主義が社会民主主義の陣営に見られるが、国際情勢にたいするその無知は気の毒であるのみならず、それは共産党の反米闘争の下請けでもある。

米ソの対立は現今最大の世界的課題であるが、それは要するに西洋人種内部の出来事であり、西欧的原因から出たものである。アジア諸民族はネールの線に沿つて中立することが考へられるし又可能でもある。そして中立であるためにも一定の自衛的武装力をもつことが必要である。中立もまた力なしには確保することができない。アメリカは日本の再武装に最も熱心であるやうに見受けられるが、それはソ連に対抗するために日本人軍隊を使ふといふ意味からでなく、日本に中立と平和保持の態度を守らせる条件として一定の自衛力をゆるすといふ意味であることが、アメリカのアジア政策にとつても賢明であらう。日本国内には米ソ対立にたいして中立ありえずといふ態度をとり、はつきりアメリカ側に立てと主張する向米一辺倒論者がある。これはあまりに短気な態度であるのみならず、アメリカ資本への心からの媚態であるか、もしくは日本の経済的再建のために少々だましてもアメリカ資本を利用した方がよいとするやうな下劣な権謀術数主義である。しかしかの夢の如き亡国的な永世中立論のやうに世界政治の激動のなかから逃げ出すのでなく、この激動のただ中にあつて日本がアジア民族と共に中立を主張し以て世界平和に貢献する余地はまだ残されてゐる。

④ 国家の性格が軍隊の性格を決定する

国家の独立が自衛的武装なしにありえないのは政治学的な一般定理である。各国軍隊は直接的にはその国の自衛のためのものであるにしても、人類的観点からみれば、それは世界を暴力的な侵略主義

から防ぎ、世界平和の楯となるものでなければならぬ。しかし現実においては各国軍隊の性格はその国家の性格によつて決定せられる。進歩的な国家には進歩的な軍隊があり、反動的な国家には反動的な軍隊がある。軍隊だけが国家の性格から離れうるものでない。軍隊の性格については、(1)保守的軍隊と進歩的軍隊、(2)階級的な軍隊と国民的な軍隊、(3)独裁主義的規律に立つ軍隊と民主々義的規律に立つ軍隊、(4)侵略的な軍隊と自衛的な軍隊、などの分け方をすることができる。それらの区別はそれぞれの国家の性格的差違から生ずる。国家の性格はその社会生活の形態と発展程度（人口、階級、家族、天然資源、地理的地位、生産力、政治組織）等によつて決定せられる。

たとへ日本が再武装するにしても旧軍隊の復活の如きは絶対反対せねばならない。日本は過去において軍国主義の深い過誤を犯した故に今日の民族的悲境に落ちた。我々は外国人が日本軍国主義の復活を恐れる以上にそれを恐れる。明治時代の日本軍隊はなほ国民的軍隊たる性格をもつてゐたが、それ以後に至つては、ブルジョア的な帝国主義的侵略の道具となつた。しかもその構造は封建的で、士官と兵士とは主人と下僕の如く、殊に最悪であつたのは帷幕上奏権で、軍事が内閣より独立し、むしろ軍人が内閣の死命を制して政治を指導し、その一点からも、政治に軍事が従属する民主々義国に敗北してゐた。科学的な戦略や装備を生み出す近代的感覚が当然欠乏した。その結果、軍隊は国民から遊離し、士官には封建的な極端国家主義者と結合して改革を名として権力争奪戦に耽る者があらはれ戦地においてすら飲酒無頼の行ひをする者があり、敵を虐待し、アジア人を虐殺する非人道をあへて

するに至つた。軍隊とは非人道なものといふ恐るべき印象が支へられた。これについて軍人に直接責任があるが、かやうな軍隊は日本社会の保守性に根源があつたのだから、その保守性を打破しなかつたわれわれ日本人の共同責任である。来るべき日本軍隊はかやうな旧伝統と完全に手を切つたものでなければならない。

日本の再軍備を具体的に考へるまへにもつと根本的な諸問題にふれよう。

二、国家と戦争——歴史的観察

1　戦争の主体としての国家

内乱も一つの戦争形式だが、普遍的な戦争は国家間に行はれる武力衝突である。もとより国家は暴力的な強盗団体ではない。人間の自由は国家のなかで発達し又それによつて保障せられる。しかし国家は国境外に自己を拡大しようとする衝動をもつてをり、国家と国家との関係は友愛よりも敵対を主としてきたのが歴史上の事実である。アメリカの温厚な経済学者ボールディングもその「平和の経済学」のなかで、国家は戦争を行ふといふ主要目的のために組織された団体だと云つてもそんなに誇張でないといふ発生論的観察をしてゐる。戦争の主体が国家であることは今日まで続いてゐる歴史的事実である。

国家の原初的な核は原始社会の内部で発生する支配関係だが、それだけではまだ歴史的国家にならない。どの文明国の例をみても征服の嵐を経て国家らしい国家が成立する。埃及、バビロン、ペルシア等の古代東方国家も、ギリシアもローマもアレキサンダー国家も、ゲルマン族の国家も、中国の周秦国家も、日本の古代国家も、征服戦争を通じて歴史的国家となつた。近代の中央集権国家は戦争を頻繁ならしめ、戦争がまた前者を強化した。近代国家の主権概念はいちじるしい排他性をもつ。エミリー・リーヴスの「平和の解剖」は、近代の戦争の原因を排他的主権国家の無秩序的併立にありとする。この書物は強国（米ソ）の戦争衝動の分析に臆病だから、けつきよくブルジョア的な書物だが、国家の排他性と戦争との関連を分析したところには真理がある。戦争は国家間の力の時々のテストとして、又暴力をもつてする均衡作用として現れてくる。国家は本能的に膨脹欲をもち、具体的には領土拡張の衝動にかられて相互衝突する。

強国がその軍力に自信ができると、自国を中心として世界帝国を形成する欲望にかられるやうになる。世界帝国の幻想は幾度も人類を誘惑した。この幻想の根柢には人類が統一的であらうとする衝動がふくまれてゐるが、戦争手段をもつて他民族を犠牲にしようとする無理を含む故に一度も永続的に成功したことがない。東西を打つて一丸としたアレキサンダーの世界帝国はその死後忽ち崩壊した。ローマは数百年間は巨人的な世界帝国だつたが民族主義的精力にあふれたゲルマン蛮族の勃興のまへにあへなく土崩瓦解した。倫理的に色づけられた中国人の中華世界帝国の理想は秦漢唐の際に一応実

現したかの如くだつたが明清以来一片の反動的空想として飛散した。世界帝国の夢をぶちこはすのはいつでも民族主義であり、又世界帝国内部の頽廃である。搾取者は頽廃しやすく、民族主義はいつでも健全な歴史の原形質的要素である。

世界は統一に向ひつつある。その実現は二つの道がある。第一は或る一つの強国を中心とする方法、第二は各民族の自主性を尊重しその相互理解の上で成立する民主的な方法である。後者は手とり早くないとしても最ものぞましい。国家は暴力だけの組織でない。それは現代においても最も能率的な人間組織形式である。今日、国家内部で政治の社会化ともよぶべき現象がおこり、また国家間において各民族の合意協力によつて国際民主々義的組織ともよぶべき世界協同体が成立しかけてゐる。これは非常に進歩的意義がある。しかし国家の戦争的伝統がなほ濃厚に残つてゐることを忘れてはならない。

国家間の戦争をすべてネガチーヴなものとするのは一片の感傷である。爛熟廃頽してしかも特権に睡る国、他民族の搾取に生きる無理想にして貪欲なる国、金銭的唯物主義の国、これらのものの支配を脱して諸民族の自由と独立を確保する如き戦争の意義は今日も失はれてゐない。

2　近代国家と戦争

西欧で十六世紀以来発展した近代国家では、民主々義が政治の基準となり中世に比して国内政治は非常な進歩をしたのであるが、国家と国家との間では戦争が中世と較べてずつと頻繁となり且つ規模が大きくなつた。古来の戦争の大部分は国家間に行はれたが、この国家の戦争主体的性格は近代になつて一層強烈となり帝国主義時代に入つてから特にこれが激しい。近代国家において戦争の機会が多く且つ大規模になつてゐる理由は何であらうか。それは、

(1) 近代国家がすぐれて権力主義的であること。権力が自己を強く意識すればするほど、その相互間の衝突がおこり、戦争手段に走りやすくなる。

(2) 近代国家が民族国家として成立してきたこと。民族は排他性と協働性の両モメントを含んでゐるが国家に結合した民族においては排他性の方が強く作用する。

(3) 近代国家に成立した主権概念は、諸国家が正しい意味の自主性をもつて協働するよりも不寛容な排他性をもつて相互対立することを助長してゐること。交通の発達によつて地球がますます狭くなつてゆくにつれて排他的主権国家の対立の矛盾が烈しくなり、それが戦争の一因となる。

(4) 大国の小国抑圧、小国のそれへの反抗、また大国間における小国抑圧の利益又は権利の争奪が戦争をよびおこすこと。

(5) 政治と経済が不可分となり、経済的膨脹主義が政治上の帝国主義的衝突となること。近代国家は公共福祉よりも私的利潤の追求を目的とする資本主義生産方法に立脚する。それは諸国家をして戦

争手段に訴へやすくする。

(6) 近代国家は階級性が強く、具体的にいへば資本家階級が権力の中枢をにぎつてをり、諸国の資本家階級の相互闘争が国家間の衝突の形で表はれやすいこと。

などをあげることができる。

軍力はたしかに国家の主要属性である。しかし今日ではシベリアの荒原も太平洋も中央アジアの沙漠も安全な国境でなく、極地でさへ戦略地点となり、戦争自体も世界化してゐるのだが、各国家は世界協同体を構成する努力よりも、自国の軍事的防衛に全力をあげてゐる。世界にまだ征服さるべき土地の残つてゐた時代、農業に基礎をおいてゐた時代、戦争がなほ小規模でそれによつて社会的矛盾がなにほどか解決されてゐた時代、かやうな過去に成立した国家原則が今日の高度技術時代にまだ残つてゐる。国家の社会化と倫理化が今後の国家の基本動向であるのに、過去からの国家の軍事的性格がそのまま残つてゐる。

しかし矛盾のなかから進歩が生れる。排他的主権を中心とする近代国家は今日では発達の極限にのぼりつめ、かかるものとしての努力はすでに出つくした。近代国家特有の戦争衝動にブレーキをかけるものは国家の社会化および世界化の二大動向である。

国家は戦争主体たることだけが主要特徴であるのでない。国家の権力は社会生活に規律と秩序を与へ、産業を保護し、社会的労働の訓練者となり、階級間の力を均衡し、文化の平和的発達を促進する

機能を従来も果して来た。国家生活がはじまつてから人類の歴史生活が始つたといつてよい。国家はこれまで人類の発明した組織体のうち最も能率的なものである。マルクスは国家を階級支配の機関だとなし、階級闘争が最も露骨に行はれうる国家を最善の国家形態と名づけ、プロレタリアートの勝利を通じて将来国家が死滅すると考へた。ラッサールは国家は人類歴史の基本目的たる自由の保障者だとしてこれを高く評価した。マルクスの憎嫉的感情にみちた理論よりもラッサールの思想の方が哲学的に深いし近世史の実際とも合致してゐる。現代において、国家は高度社会政策（完全雇傭、社会保障制、重要産業国有、計画経済等）の主体となつて社会生活を秩序化する機能を果してゐる。かやうな動向を国家の社会化とよぶことができる。この社会化によつて近代の個人の尊厳とヒューマニズムを保存しつつ新たな社会的ウエルフェアがつくりだされる。一連のアナーキスト的思惟に反して国家は今後もこの基本動向を一そうふかめてゆき尚人類の歴史に貢献するだらう。

他方において近代国家の排他的主権はすでに限界に達し、経済や文化の世界化の基盤の上に世界共同体の成立が可能となりつつある。

右の国家の社会化および世界化の二大動向は国家から戦争主体的性格を次第に除去し、従つて戦争消滅の条件をつくり出しうるものである。

戦争は悪である。戦争のための戦争といふのは強盗主義である。しかし強盗はなかなか世の中からなくならない。強盗から身を守るために国家が一定の武装自衛力をそなへることは、平和のための欠

くべからざる条件であり、それはむしろ正義に合する。武力なき国家、もしくは武装を怠る国家は亡ぶ。華麗な文化を作りだして奢侈をたのしんだ国家が、その軽蔑する蕃族の攻撃によつてあへなく沒落した例は東洋の歴史にも西洋の歴史にも数限りなく現れてゐる。これは冷酷な法則的事実である。健康な国家にして自ら武装を撤去したものはない。武装を怠る国家は、本能弱化し、人間的勇気を失ひ、もはや組織的な国家生活を営むに堪へなくなつてゐることを意味する。かゝる国家は亡んだ方が世界歴史にとつて祝すべきであらう。歴史はその進歩のためにかゝる国家の存在を無用とするのである。これが歴史の冷厳な叡智である。空疎なユートピア的平和主義は現実の嵐に堪へられない。われわれは自由な民族であることを欲する。そのために国家をもたねばならない。そして国家の独立のためには一定の武装自衛力をもたねばならない。まだ人類は国家生活を解体しうる段階に達してをらず、したがつて武装解除は民族の死を意味する。

第二章　戰爭と平和

一、歴史の輪廻の輪としての戰爭と平和

朝鮮の戰爭はいつやむともみえない。一方の国連軍はアメリカ軍を主力としてそれに英佛その他の西欧陣営の軍隊が加はり、他方は今は北鮮軍が刺身のツマのやうになり正面に中共が打つて出でソ連が背後から糸をひいてゐる。それは朝鮮半島だけの局部的現象でなく、米ソの対立を中心とする世界政治とつながり、且つ全面戰爭の接近を予告する危険信号である。残念ながら今日の世界では平和的要因はますますとぼしく、戰爭気運の方が濃厚である。世上でも第三次世界戰爭の戰略戰術論がジャーナリズムをにぎはしてゐる。われわれは平和をなによりも欲求するのに、なぜかうも戰爭に見舞はれねばならぬのだらうか。戰爭が平和よりも好きだといふ人は世界にごく少数であらう。しかるに歴史上では、心になによりも平和を欲する人が事実として幾度も戰爭に従事したのである。一体戰爭とは何か。その根源はどこにあるのか。人間の歴史は戰爭から離れられないのか。さし迫る第三次世界戰爭についての議論は現実問題として大切なことであるが、再軍備問題に当面してゐるわれわれは一

歩さかのぼつて戰爭そのものの本質を究明しておく必要がありはしないか。平和は平和だけの議論をくりかへしても根本的解決にならぬ。われわれは世界平和を何よりも欲求するが、平和は戰爭を克服した上で獲得されるものであるから、まづ戰爭の本質を認識しておかねばならない。

戰爭と平和は、晝と夜、生と死、男と女、光と暗などのやうに自然現象的な必然性をもつてゐないとしても、古来の人間歴史にほとんど交互にあらはれてゐる輪廻の輪である。戰爭は忌むべきもの、平和はのぞましいものであるが、あたまごなしに、理性的に、教訓的に、戰爭を否定してみても、それは明け方の亡霊みたいに退散するものでない。エラスムスのやうな人文主義者やカントのやうな哲学者は尊敬すべき理性主義的立場から世界平和や世界協同体の結成を唱へてきたが、その呼び声は、近代権力国家の成長過程において大砲の轟きや進軍ラッパの音のなかにかき消されがちであつた。近代になるほど戰爭規模が大きくなつてゐる。戰後日本の多くの敗北主義的平和論のやうなもので簡単に戰爭問題をわりきることはできない。現代人はインテリたると労働者たるを問はず、第三次戰爭の諸要因を克服し、平和の気運を高めてゆかねばならぬが、執拗に歴史上に現れる戰爭の本質を究明することなしには平和の本質もわからないであらう。

戰爭と平和をはつきり区別された、全然異質的なものとして対立させることはまちがつてゐるのである。戰爭は平和に、平和は戰爭に容易に転化したし、今だつてさうである。むしろ戰爭と平和は歴史の二つの側面だつた意味がある。ホッブスは、その現実主義から、平和とは戰爭と戰爭の合間にす

ぎないと言ひ放つた。クラウゼウイッチは、戦争は暴力をもつてせられた政治の継続だと言ひ、レーニンはこれをその好戦的な革命理論の基礎づけとした。現実はいつでも否定的なものと肯定的なものとの複合である。悪魔があつて神がきは立ち、悪人があるから善人ができる。ニイチェは、美のための美、真のための真、善のための善、これが理想主義者の三大虚構物だと罵つたことがある。〃平和のための平和〃といふ考へ方もこれに劣らない虚構物で、純粋平和国家は理念の世界にのみ存する。戦争があつて平和の価値が一そう貴くなるといふ関係がある。しかし戦争と平和の併存や内面的連絡が人類の宿命であるわけではない。どちらが本質的かといへば、それは平和である。平和とは各人、各民族、各国家がその本性にしたがつて活動し、相互の自由を尊重し、その創造した業蹟が社会的福祉に表現され集中されるところに成立する。国際平和はまづ国内平和なしには成立しない。

しかし逆説的な現象だがこれまで戦争には歴史の進歩を推進する作用もあつた。戦争は大量的且つ惨酷に人を殺し平和の時期に人の作りあげた物質的精神的業蹟を破壊するが、戦争が機縁となつて社会的矛盾を一挙に解決し新しい事物が創造されることも少くなかつた。アレキサンダーの遠征は平和な交通のなかに緩慢に成立しつつあつた東西文明の交流を飛躍的に促進した。秦始皇帝の好戦政策がはじめて中国の統一を実現した。十字軍は近代ヨーロッパを出現させた産婆の一人だつた。ナポレオン戦争はかへつてヨーロッパ諸民族の自覚を促し、個々の民族の精力を集結させて民族国家の成立を促進したと共にフランス革命の精神たる自由の意識を諸国に普及させた。普佛戦争はドイツの統一を

もたらした。日露戦争は黄色人種の希望と信念を高めた。人間の精神文化も物質文化も平和時代に繁栄するが、それをもたらすために戦争が必要だつたといふ矛盾の弁証法が歴史上にあつたのである。

戦争の本質をつかむ三つの角度がある。第一は歴史的観察だ。歴史上の出来事に永久不変のものは一つもない。みな過渡的である。歴史の内在目的はけつきよく人間の自由の開展であるがそれはジグザクの道をたどる。歴史上の現象でムダなものは一つもない。戦争がいかに自由の開展と関係したかに問題がある。第二は人性からの観察である。人間の生の本能は善にも悪にも発現する。人間には良心とともに不良心がある。人は平和を恋ひつつ他方に戦争に快感や昂奮をおぼえたりする。第三は政治経済的な制度的観察だ。制度（インスチチューション）は人間意志の創造物でありつつ往々人間意志をこえて作用する。この観点は重要で、十九世紀以来の経済学や政治学の進歩に負ふところが多いのだが、現代ではこの観点からばかりする戦争解釈が流行して、その極、人間性を無視する客観主義や機械論的誤謬におちいることが多い。——第四の観点として戦争の哲学的考察がある。これはやゝもすれば戦争と平和を勝手に切断して、或は戦争をそれ自体的に肯定する政治哲学や、或は平和だけを説教する倫理哲学になりやすい。ここではこの最後の観点をはぶく。

二、戦争の一般的な根源

古来戦争の絶えたことがなかつた。弓矢をもつてした戦争も銃器を主とした戦争も現代の戦略爆撃機をもつてする戦争も、各時代の社会的条件に制約されつつ、戦争としての共通性をもつてゐる。戦争一般の根源は次の如くである。

7　不等価的な欲望満足方法として——経済的搾取

人間が欲望を満足する方法が二つある。第一は勤労の果実を等価に平和に交換する方法、第二はそれを不等価に暴力的に奪ふ方法である。第一の方法が第二の方法を克服してゆくところに文明の進歩がゐる。アリストテレスの「政治学」にはギリシア時代に海賊業が産業の一つであつたことが記されてゐる。海賊業は十七、八世紀の西欧の冒険商人にも公許されてゐた。しかし海賊業はもはや今日では是認せられない。戦争はこの第二の不等価的交換方法の最たるものである。かつてエンゲルスは、原始的な氏族を除き、古来の戦争は新しい労働力を捕獲する根本手段として行はれたと論じた。(「反デューリング論」の暴力論のくだりにこの説見ゆ。)成吉思汗の軍隊は、降伏した都市や村落で壮丁や技工者だけを残してその他のいはばムダな人口を鏖殺したが、この野蛮残忍さは戦争の獲物は労働力だといふ法則を単純明白に示してゐる。ソ連が日独の数十万の捕虜を新五ケ年計画のために奴隷的に駆使したのもこのエンゲルスの戦争法則の端的な例である。勝者は敗者の道理ある主張や愁訴を無視することができる。経済上の最も重要な生産要素たる労働力を一挙に大量的に捕獲し自己に有利なや

うに新しい労働編制（分業）を作り出すことは、蕃力にはすぐれてゐるが文明的にたち後れてゐる民族にとつて強い誘惑となる。

西欧の資本主義史に於る所謂資本の原始蓄積は新発見のアメリカやアジアの莫大な労働力の搾取を一つのテコとして行はれた。英仏蘭の植民地争奪戦争の背景も労働力捕獲競争であつた意味がある。

人間の最も原始的な要求たる食糧が戦争をよびおこすことがある。世界史の重要モメントの一つであるところの北方遊牧族の南方農業族にたいする襲撃は、飢渇のため食糧掠奪の行動に出でざるをえなかつた自然の要求にしたがうたものだ。現代においても食糧と人口との均衡のとれない場合にはこの原始的な法則が復活する。日本が無謀な戦争をあへてした原因の一つには素朴な食糧衝動もあつただらう。中共がその大軍力を擁して日本と東南アジアにたいして虎視眈々としてゐるのは、日本の工業力や労働力を支配すれば中国の工業化を躍進させ且つ中国農民の負担を軽減することができ、東南のインドシナ、ビルマ、タイの豊穣な米作地帯を支配しうれば中国に常態的な食料飢饉から救はれうるからである。中共がかやうな不道徳な誘惑にかゝり原始的な衝動のまゝに行動するならば、その理想を汚しその革命性を急速に喪失し変態的な帝国主義者に堕落するだらう。そのことなきを祈る。

資本主義時代になつて戦争回数はずつと多くなりその規模も大きくなつた。資本主義に宿命的な市場競争は不等価的交換手段としての戦争への誘惑をひきおこさざるを得ぬ。国内で最も搾取的な経済を行うてゐる資本主義が国外戦争にかりたてられるのは一つの必然である。これは後にのべる。

2　政治的支配の衝動——国家と戦争

これについては前にのべた。（二三頁以下）

3　戦争の階級的根源

戦争は国家間に行はれ、国家所属員全部がそれに参加することをつねとするが、多くの場合、戦争によつて最も利益をうける階級が最も戦争に熱心となりその煽動者となる事実がある。その口実は国民的利益だがその核心は階級利益である。国内の階級支配は力関係によつて成立する。戦争は国内支配関係の対外的延長でもある。対外的冒険に成功した場合、獅子の分け前が被支配階級にも与へられるがそれは僅かなものである。又被支配階級も人間であるかぎり支配の衝動に欠けてをらず、その国が弱国や弱小民族を支配する場合、かれらも対外的には支配者の一部分であるといふ感情の満足を味ふ。インドを軍事的に支配し中国に阿片戦争を仕掛けた際の英国の支配階級にも被支配階級にもこの特徴があつた。戦争の結果もまた国内階級構造に影響する。勝戦国では被支配階級の地位が多少とも向上し階級闘争が緩慢ながら発展する。敗戦国では支配階級が勝戦国の支配者の命令又はそれとの妥協のもとに被支配階級を一そうしめつける場合もあるが、被支配階級が支配者の力の弱化に乗じて革命によつて政権をとるか少くとも民主的改革によつて利益を得ることが現れる。

4　戦争と人性

人類が文明生活に入つてから数千年が経過したが、この時間は数十万年におよぶ長い人類史からみれば瞬間的なもので、人間性に根本的変化があつたわけでない。人間の精神の奥にはいつまでも馴養されない蛮人が住んでゐる。戦争は大衆の参加なくして行はれない。金銭だけでできる戦争などはない。時としてこの蛮人が文明に倦怠してあばれだし、大衆の精神をもゆりうごかして戦争に突進させることがある。戦争はその結果から生ずる利益や享楽の予想よりも、むしろ征服の快感情や、何か偉大事をなしつつあるといふ満足感や、自分も国家を守る高貴な一員だといふ誇りの感情をかきたてて人を狂乱のなかに躍りこませる。平和時代には失業の危険が絶えないが、戦争になれば完全雇傭となり、更に新しい領土や努力範囲を獲得すれば生活水準が上るといふ僥倖心や賭博心理も大衆を戦争にかり立てる。バートランド・ラッセルは、戦争心理の根源としての人間活動欲をあげ、ペリクレス時代のアテネは最も生産的であると共に最も好戦的であつた例をあげてゐる。平和主義者の任務はこの人間活動欲を非難することでなく、この本能を戦争にでなく、堀割を作つて水を導く如くに有効な建設的事業にみちびくにある。

人生には人間性に根ざした力、愛、理知の三原則がある。この三者が自覚的に訓練され且つ均衡がとれると個人の生活も国家の生活も自由で平和で豊かとなる。しかしこの均衡のとれにくいのが歴史

の皮肉で、特に国家間がさうである。力の原則は大国によつて濫用される。愛の原則によつて国家間の平和をもたらさうと努力したものに宗教があるが、その宗教でさへ、アウグスチヌスのやうに〝キリスト教的世界平和〟といふことを唱へ、キリスト教徒以外は人たるに値せず、むしろ異教徒を撃滅することによつて神の国の平和が実現するといふ片寄つた思想、即ち力の原則によつて自らの愛の原則をふみにじる如き偏曲を生んだ。理知の原則もあまりに抽象的となると、現実世界を支配する力の原則のまへに脆弱となる。大量の軍力をもつ国家が狂信や党派性で鍛はれ、その思想の独裁を全世界に押しつけやうとするに至ると、人間の精神的自由が死し、力の原則が単純な暴力の原則に堕落する。今日のソ連はその不幸な例である。今は力、愛、理知の三原則が均衡を失してゐる時代で、愛の原則は時としてネールの政策にみられるやうに非現実的となり、理知の原則は西欧陣営にみられるやうに勇気を喪うた宥和政策となり、力の原則は中ソの如く狂信や党派性とむすびついてゐる。現代の戦争危機の心理的基礎にはこれら三原則のアンバランスがある。

戦争には文明的頽廃と野性との衝突といふ面もある。ある民族の文明がその歴史的役割を果した後に感覚的享楽的（極端な場合には性的）なものに堕落すると、文化程度はなほ低いが健康な蛮力をもつた他の民族が勃興して、文明人の蓄積した富にたいする掠奪戦争をおこす。かれらは文明人の堕落や勇気の欠乏を軽蔑し、かかる者は亡んでしまへといふ信念をもつ。世界史はその若返りのために時時かかる野性の注射を必要とする。野性的民族が賢明であるかぎり、前代の文明人の作り出した学芸

や技術を吸収して新文明を創造するが、征服当時では学芸や技術への能力は前代人に及ばないから、新文明の形成されるまでには数百年かかる。これは太古から幾度となく繰り返された歴史の波である。燦然たるギリシア文明もその征服したクレータ文明やミケーネ文明を肥料として成長した。ギリシア、ローマ文明の頽廃の後にゲルマン蛮族が勃興したが、前者の文明的成果を理解しえなかつた故に数百年の中世暗黒時代がある。ルネッサンスを起点とする近代西欧文明は真に偉大だつたが、今はその歴史的役割を果して感覚主義的に頽廃しつつあることは、西欧の二大国たる英佛がソ連侵入の脅威の前に途方に暮れてゐることからも判明する。世界史の復活のために野性を注入するかに見ゆるソ連はスラヴ的強国主義の邪道をゆき、世界を戦争の危険でおびやかしてゐる。しかし新しい文明を創造する野性はソ連よりもアジアの方であらう。

5　人類の競争形式としての戦争

戦争は客観的にみて、人類の競争の一形式であつたといふ面がある。競争は人類社会を活気づけ、個人も民族もその個性の故に独創を発揮することができ、その業績が綜合されて人類の一般的な幸福や繁栄を産出するに至るのだが、この個性が磨かれ、発揚されるのは競争の中においてである。競争が止めば、人類の歴史は火の消えたやうに寂莫たるものになるであらう。不合理的なものであつたが、かかる競争の一形式として戦争があつたのである。（歴史は合理づくめに進行するものでない。）しか

し今日では戦争の破壊力があまりに大規模となり従つて競争形式としての意味を失ひだしたところに現代史の大きな意味がある。諸民族は戦争に代る他の競争形式を発見せねばならなくなり、又それが可能になりつつある。将来における戦争消滅の客観的根拠のひとつがここにある。

三、近代資本主義と戦争

近代になつて戦争が頻繁となり且つ大規模となつたが、これは権力的な近代国家が成立したからだけでなく経済上に資本主義が支配的となつたからである。資本主義を組み立てる要素は生産手段の私有、利潤の追求、拡大商品生産、価格競争、賃労働、階級対立等であるが、資本主義はその本性から海外市場を求めて全地球に機械的にひろがらうとする衝動をもち、いたるところで旧来のおくれた非資本主義的な社会秩序を破壊する。西欧資本主義は非資本主義的な中世的東洋を肥料として成長したのであり、後者の富の搾取なくして前者の経済的発展はありえなかつた。西欧資本主義の東洋に対する支配は平和的手段によるよりも露骨な戦争手段が用ひられた。アメリカ原住民に対するスペイン人の惨虐なる大量虐殺、アフリカのネグロ狩りとその奴隷売買、ロシアの中央アジア独立国の撲滅とシベリア劫掠、イギリス人のインドに対する数世紀にわたる軍事的遠征と支配、フランスの安南国撲滅とインドシナの支配、オランダのインドネシア支配、アメリカのフィリッピン占領、イギリスの中国に対する阿片戦争、義和団乱後の各国の中国半植民地化工作等は資本主義の発展史と不可分のもので

あつた。

しかし資本主義の発展のために西欧諸国相互間にも戦争が行はれた。新興ブルジョアの貴族や国王に対する内乱の外に、ルイ十四世の対オランダ戦争、フリードリッヒ大王とマリア・テレサとの間の七年戦争、ロシアの対スエーデン戦争、スペイン王位継承戦争等のマーカンチリズム時代の諸戦争を経て、フランス革命時代におけるフランス軍隊と各国の君主軍隊との戦争や、それに引続くナポレオン戦争や、更に十九世紀後半の普墺戦争、普佛戦争、イタリー独立戦争等は資本主義を発展させ中世的生産方法を除去する大きなテコとして作用した。

資本主義が独占資本主義に発展し帝国主義に入ると共に戦争は大規模化し、且つ従来の戦争の如き進歩性を失つて反動的なものとなつた。全体としての世界資本主義のなかには一のアナーキー状態が支配する。資本主義は今や自由競争時代のやうに豊富な市場や原料地を約束されてをらず、地球はすでに強国間に分割されてゐるから、新進の資本主義国は世界再分割を要求し、又巨大な資本主義国は世界支配のヘゲモニーを要求するやうになる。十九世紀の最後の年から二十世紀初頭にかけて行はれた南阿戦争や一九〇〇年の義和団乱にたいする各国の軍事的干渉は明白に帝国主義戦争の性格を持つてゐる。日露戦争はロシアが旅順大連を手に入れて満洲併呑を目的としたかぎり、ロシア側においては帝国主義戦争であつたが、日本側においてはまだ帝国主義戦争だつたとはいへない。東洋がはじめてヨーロッパ勢力に反撃したといふ進歩的意義があつた。しかしこの戦争で日本は帝国主義の味を知

り西欧資本主義の後を追ひかけて自らも帝国主義となる条件を獲得し、その後はアジア諸民族の期待に背いてアジアの同胞に向つても帝国主義的に行動した。一九〇九年にイタリーがトルコに宣戦してトリポリを奪つて初めてアフリカに植民地を得たことも帝国主義的掠奪戦争に外ならない。一九一四年に始まつた第一次世界戦争は資本主義的矛盾の最初の世界的大爆発である。第二次の世界戦争もまた性格からいへば帝国主義的戦争である。

資本主義は何故に戦争と必然的な関係があるのであらうか。これを要約してみれば次の如くである。

(1) 資本主義は階級協働でなく、階級搾取を原理とする。この非平和的性格はそれ自身のなかに戦争的なものを含んでゐる。

(2) 工業国が農業国を搾取することは一の経済法則であるが、資本主義はそれに拍車をかける。前者の後者にたいする遠征的戦争が必然となる。（工業国が農業国を搾取することは未熟で夾雑物の多い社会主義の下においても行はれる。ユーゴのチトーがモスコーから離反したのは農業国たるユーゴが工業国たるソ連から農産物を搾取される苦痛に耐へかねたことが主要の経済的理由である。今日、中ソの同盟は堅いけれどもソ連は中国の農産物や原料を搾取せざるをえない関係にあるから将来中国がこれに反撥することがありうるのである。）

(3) 資本主義の下では生産力が拡大して消費力を追ひ越す。有効需要は少くとも国内では相対的に

減少する。恐慌がそれに伴ふ。J・A・ホブソンはその「帝国主義論」のなかで、資本家の手に蓄積される富が賃銀部分により多く放出されて大衆の生活水準引上に使はれるか又は租税で徴収されて国民の間に社会政策的に再分配されなければ帝国主義は克服されないと論じたが、資本主義の生活原理では、蓄積された資本家的富は海外市場、原料地、資本輸出地の拡大に向けられ、その競争が戦争を誘発する。

(4) 世界資本主義は統一的体系をなしてゐるものでない。各国家を基盤とする経済的ナショナリズムが相互衝突する。英国がこれまでアメリカからマーシャル計画の援護をうけ且つ米ソ戦争の際には宿命的にアメリカ側に立つ国柄であるに拘らず、英米間の政治的歩調が必ずしも一致しないのは英連邦とアメリカとの間に石油其他についての市場衝突があるからである。

(5) 各国資本主義の発展のテンポは必然に不均等である。テンポの早い国は一そうそれを早めようとし、遅れた国はそれを取り戻すために、これを権力手段で、即ち戦争手段で解決しようとするやうになる。

(6) 帝国主義のもとでは大国の小国支配や植民地支配即ち国民的抑圧が露骨に行はれる。これも又戦争をよびおこす動因となる。

(7) 十九世紀末迄に強国間における世界の分割はほゞ完成した。各国資本主義の発展の不均衡は新しい世界再分割の闘争をひきおこす。

（註）レーニンの次の言葉は参考になる。「資本主義とは生産手段の私有並びに生産の無秩序を意味する。かういふ基礎の上に収入の公平分配を説教することは、プルードン主義であり、小ブルジョア的および俗物馬鹿話である。権力に応じて分配する以外に方法はありえない。そして権力関係は経済的発展の進行とともに変化する。一八七一年以来ドイツはイギリスやフランスよりも三倍も四倍も急速に力を加へた。そして日本はロシアよりも十倍も急速に。資本主義国の実力を吟味するには戦争以外に方法がないし、またありえない。戦争は私有制度といふ基礎に反抗する矛盾でなく、この基礎の直接且つ不可避的な結果である。資本主義の下においては、個々の経済および個々の国家的発展が平均的に増進することは不可能である。資本主義の下においては、時々破壊される平衡を再建するに、産業における恐慌と政治における戦争以外に方法がない。」（「ヨーロッパ連邦の標語について」）

第二次戦争後の各国の資本主義には多少とも計画経済、社会保障、完全雇傭等の管理経済的特色が現はれ、資本主義の古典的特徴（企業家の自由放任競争、無制限の利潤追求、盲目的生産、価格の自動的均衡、階級搾取等）が露骨でなくなり、従つて社会化経済へ一歩ふみ出したもののやうにみえるが、実際には依然として生産手段の私有を基礎としてをり且つ大衆の下からの創意で築かれたものでないから真の意味の社会化経済ではない。米ソ両経済圏の分裂、世界経済のアンバランス、市場を競争する経済的ナショナリズムの一層の強化、永続的な戦争経済体勢、朝鮮戦争を契機とする昨年半ば以来の軍拡経済等をみれば依然として資本主義経済が戦争の大きな原因であることが知られる。

マルクス主義経済学者は戦争の原因をもつぱら資本主義経済に求める。資本主義経済が戦争の大きな原因であることは疑ひないことであるけれども、戦争の原因をこれだけに求めて他をかへりみないところに彼らの思考上の片輪性があるのである。戦争のやうな大きな事実は単純に経済の眼鏡からだけ眺めても真相はつかめない。それは政治にも人間性にも深い根柢をもつてゐる。

四、歴史上における戦争の種類

戦争は人類の相互虐殺であり、物質文明の破壊であり、奴隷的労働力の争奪であるからそれ自身悪であつて、本質的に肯定さるべきものでない。しかし過去の戦争のうちで歴史の進歩を促す機能を果したもののあることまで否定できない。戦争を経て偉大な平和時代の現れることが事実としてあつたのである。歴史上の戦争を分類する根本標準を歴史の進歩を促したか又は害したかにおくことができる。戦争も歴史上のあらゆる現象と同じく過渡的なものである。今歴史上の戦争を右の標準にしたがつて分類してみると次のことが考へられる。

1　反動戦争と進歩戦争

国内の保守的支配者が古い特権や制度を維持するために行ふ戦争、自国外の弱小民族を抑圧しその生産物を奪ひその労働力を奴隷化する侵略的な戦争は反動的なものである。これに反して圧制者に反

抗し、専制主義や民族的抑圧の除去に役立つたが如き戦争は、進歩的なものであつた。資本主義は封建主義にくらべるとはるかに大きい歴史的進歩であるが、資本主義はその発達途上において民族国家を形成せずして封建主義にうちかつことができなかつたのであり、このコースを容易ならしめた戦争――フランス革命より一八七〇年代の普佛戦争やイタリー独立戦争までのもの――は進歩性を有するものであつた。一つの戦争において交戦国の両側が反動戦争を行ふ場合がある。二十世紀の帝国主義戦争はおほむねさうである。又一方の側が反動戦争を行ひ、他方の側が進歩戦争をおこなふ場合がある。しかし双方ともに進歩戦争をおこなふといふことはほとんどありえない。双方ともに真に進歩をめざすかぎり戦争手段にうつたへる必要がないからである。

2　攻撃戦争と防禦戦争

攻撃戦争は他国の領土に先制的に侵入する攻撃的なものであるに反し、防禦戦争は侵入者を迎撃し自国を防衛せんとする受身的なものである。しかしどちらが先に手を出したかといふことは根本問題ではない。攻撃戦争が常に強奪的な反動戦争であるとはかぎらない。反動的なものを寧ろ逆に進んで倒すといふために行ふ攻撃戦争は進歩性をもつてゐる。併し進歩性をもつた攻撃戦争が反動的なものに転化することはありえないことでなく、むしろ容易である。所有の誘惑、殊に領土拡張欲や他民族の労働力の捕獲欲がそれを可能ならしめる。普佛戦争においてプロシア側は最初はヨーロッパの反動

の柱であつたナポレオン三世を倒すといふ進歩的目的をもつてゐたが、後にはフランスの領土と富とを掠奪する軍国主義的なものに変化した。防禦戦争も常に正しいものとはかぎらない。反動政治を擁護するための防禦戦争はやはり反動的である。第一次世界戦争の際に欧洲諸国の社会主義者の多くの者は母国防衛戦争といふ名の下で自国の戦争を支持したが、これは社会主義の原理からいへば煮え切らぬ態度であつた。しかし自民族の生活の本拠たる母国を防衛することはそれ自身進歩的なことである。民族はなほ歴史進歩のための一要因であるかぎり自民族と不可分である自国を防衛することは正当である。しかし自国に反動政治が支配しそれが反動戦争を企てる場合にはこれを助くべきでなく国内の進歩勢力と結合してそれに反対しそれを終止せしめ逆にこれを機会として国内改革を実現すべきである。ただしそれと外敵侵入より母国を守ることとは別である。

ジヤン・ジョーレスは他国に進撃することを一切否定し自国の防衛にかぎつて戦争行為を認めた。これは原則として正しい。第二次世界戦争においてフランス、イタリー、ユーゴ等で行はれた民族的レジスタンスはこの意味の防衛である。しかし自国の防衛の戦略的必要から国外に兵を送るといふこともありえないことではない。しかしこれは侵略に転化する微妙な関係をもつてゐるから、その場合といへども厳密に自衛の限界を超えてはならない。

3　帝國主義戰爭と民族解放戰爭

この分類は現代において最も大きい意味をもつ。資本主義は古い封建主義を歴史から抹殺するために民族国家を組織し、その独立のために民族戰爭を行つた。それは歴史的にみて進歩性があつたが、しかしかやうなものは一八七〇年代の普佛戰爭やイタリー独立戰爭をもつて終りを告げた。資本主義が独占資本主義に発展するにつれて、関税競争、原料地、市場、資本輸出地の争奪が烈しくなり、経済力だけでなく政治力を以てそれを補はねばならなくなり、世界の再分割が強国間に行はれ出した。十九世紀半ばの世界市場における自由競争はやみ、軍事力を背景として市場独占の争闘をする。国家が強大化するにつれて領土拡張欲が経済から離れて独立にうごき出す。強大国は自国を中心として世界帝国を形成しようと夢み出す。自由の代りに権力が時代の原理となる。帝国主義にも大小のクラスがあるのだが、その国家間に行はれる戰爭は進歩のためでなく掠奪的性格を有する反動戰爭である。第一次第二次の世界戰爭は帝国主義的なものであつたし、又今のまゝであるならば予想される第三次世界戰爭も帝国主義的な性格をもつであらう。軍力や富の力をもつて地球を支配しようとする誘惑を打破するのは民主々義に基礎づけられた社会主義の外にない。

進歩的な民族戰爭は帝国主義時代においても消滅してゐない。民族レジスタンス的な母国防衛もこのいみをもつてゐるが、現代の民族戰爭の主要形態は植民地半植民地的な運命を負はされてゐる被圧

迫民族の解放戰爭である。西欧は今日もなほ東洋を支配してをり、この世界史の二大対立物が均衡を失してゐることは世界の進歩を害する重大原因である。既にインド、ビルマ、インドネシア等は形式上植民地的地位を脱却し、中国も独立したけれども完全ではない。新に民族自主性の危くなつてゐるものに日本がある。インドシナではフランスの執拗な植民地支配の努力がなほ続いてゐる。朝鮮民族は米ソ対立の直接の犠牲となつて朝鮮人の想像もしなかつた苦痛のなかに投げ込まれてゐる。十一億のアジアの人々は悲惨な貧困のなかにある。かれらが自主性を要求し、アジア人のアジアといふ共通スローガンをもち東洋と西洋との均衡を要求することは決して不当ではない。アジア人の憤怒が東洋の西洋にたいする一大戰爭の形をとることが将来あるかもしれない。それは史上に類を絶した凄惨なものであるだらう。かやうな不幸はできるだけ避けねばならない。平和のうちに東洋と西洋が共同することが今後の世界史の基本問題のひとつである。

五、平和の方が根本的

以上述べたやうに戰爭の根源や社会経済的要因は根深いものがある。戰爭の害悪を数へて観念上にこれを否定することは容易であるけれども、それだけで戰爭が消滅するものでない。

しかし戰爭と平和がシーソーゲームのやうに交互にくりかへされることが人類の運命なのでない。

人間の歴史や生活にとつて平和の方が根本的である。戦争が人間の歴史にしばしばあらはれても振子が中心に落着くやうに戦争をこえて平和がおとづれこの期間に人類が繁栄する。人間がその労働を等価に交換することは社会生活の永久的な核心であり、それは本質として平和なものである。又平和の中においてそれが最もよく保証される。

今世紀において、すでに二回の世界戦争があり、どの時代よりも大規模な戦争時代のやうにみえるけれども、しかし現代史は戦争を消滅させて平和をもたらす要因も数多くつくり出しつつある。社会構造が、社会主義的に再編成される必要性や可能性が増大しつつある。それは労働の等価的交換と富の社会的使用による個性の発達や文化の向上の条件となる。大衆の政治的発言力の増大も戦争にたいする大きなブレーキとなる。大衆は平和な協同生活を愛するものであつて、時として好戦的に昂奮することがあるけれども本質的には平和の愛好者である。戦争の破壊力があまりに大きくなり戦争が競争形式としても妥当でなくなつたことも、旧来の如き戦争の容易な勃発を不可能ならしめる。従来国家は戦争主体として作用してきたが、国家が社会性を増しつつあることは戦争消滅のひとつの客観的条件となる。

平和は活気のないねむたい平穏状態をいふのでない。個人や民族が、その本性にしたがつて最大限に独創力を発揮し、その業績が綜合され、恐怖や威嚇や独裁が無く、活気に満ちた共働を通じて人類的な、ヒューマニスティックな文化を建設するところに真の平和が成立する。人類や民族の運命に無

関心で日常の家庭的幸福だけしか頭の働かない婦女子的な平和主義や、民族的独立を犠牲にして強国の奴隷となつてもその日暮しができればよいといふ家畜的平和主義によつて、真の平和がつくり出されるものではない。

六、平和とは何か

1　平和の哲学

不可抗力のやうに第三次世界大戦の危機が人類の前に迫つてゐる。

しかし他方において各国の大衆の平和欲求感情はどの時代よりも強くなつてゐる。それはまだ充分理論化され運動化されてゐないけれども、戦争に際して最大の被害者であることを本能的に予感してゐる大衆のこの感情は生活に即したものであるからそれだけ強く、又それは単なる自己保存的な生物感情であるのでなく、平和な社会生活を要求する正当な感情である。しかし勤労者の意識や利益の代表者たる社会主義運動も労働組合運動も不明瞭にしかつかまれぬ、しかし迫りつつある戦争不安と自然発生的に燃えあがりつつある大衆の平和欲求感情にたいして、はつきりした自己自身の原則をまだ提出しえぬ混乱した心理のなかにある。在来の宗教的倫理的な平和運動のほかに、一個の世界法のもとにあらゆる国家が連邦を形成すべきだとする世界連邦運動の如きものが相当進出してゐることも現

代の特色で、それは単なる倫理的観念からでなく政治経済的な現実条件の考慮に立つた運動だから相当の価値がある。

平和とは何であらうか。それは人間が争ふべきを争はず、不正や堕落を見のがし、隷属に甘んじ、家畜みたいに生活することをいふのでない。希望の代りに独裁政治や植民地支配の恐怖の鞭の下に一日一日を死なずに暮してゆくことは、たとへ戦争がなくとも真の平和ではない。恐怖あるところに平和はない。又エピクロス哲学のやうに、外界の事象に動かされず、心の平静不乱さへあればよいといふ如き消極的なものは平和ではない。又ホッブスは平和とは「戦争をしてゐない時期」だといふ現実主義的定義を与へたが、これは「戦ひは万物の父なり」といふヘラクリット流の戦争哲学に通ずるもので、戦争を宿命的なもの、人間社会に固有なものとする思想である。平和とはかやうな戦争と戦争との合間だけをいふのではない。

各国間の平和は先づ個々の国家の内部が平和であることからはじまる。国際的平和と国内的平和とは本質的に異つたものでない。国内において各人がその本性にしたがつて活動することができ、その協力によつて公共的福祉を作りだし、暴力の代りに法の統制に服するところに平和が成立する。人間には争闘の本能よりも協働の本能の方がより根強い。平和は競争や発展を含まざるものでない。各人の個性には差等があり、各国家には大小あり、発展程度の遅速があるが、抑圧や征服の如き暴力方法によらず、人類愛に立ち、共同の目的のために協働することによつてそれぞれの創意力をできるだけ

発揮させるところに平和の根拠がある。国家や個人が創意力を最大限に発揮することを自由といふ。だから平和の内容は自由である。自由なきところに平和はない。

国際的平和は各国家がその所有以上をのぞまず、人類共同の福祉のために協働することからはじまる。平和は単に各国家が条約を結んで戦争の勃発を制限することにだけ限られるものでない。一時的休戦とか勢力均衡とかから生れた平和状態は真の平和でない。平和は各民族の自由が保障され、協働の原則で結びつけられるところに成立する。この意味で戦争後五年以上の久しきに亙つて日独に講和を与へず、これを国際社会の一員に復帰せしめないでゐることは世界平和のために有害である。各国家の協働によつて実現しうべき人類的大事業は無限にある。かつてサン・シモンは人が人を搾取することをやめ人類団結して地球を開発せよと教へたが、各国家が戦争準備に傾注する費用や情熱を平和的協働に転換するならば、沙漠を耕地となし寒帯を温帯に変化させることも可能であらう。驚異すべき発展をとげた現代の技術と能率主義が戦争のためにでなく平和のために利用されたならば、そのもたらす福祉は偉大であらう。

2　世界平和への三つの現実條件

以上述べたことは世界平和の論理的もしくは哲学的規定であるが、これを現実化する条件として次の三つが考へられる。

第一は民族自主性の確保である。民族は意識や感情であるばかりでなく、現在も世界史を形成する政治経済上の能動的単位である。民族は歴史のなかで血族、言語、興亡、世界観、伝統、信仰を共にして生長した自然的な生活団体で、人為的な改編はほとんど不可能である。民族は自立の本能をもつてゐる。民族は健全であるかぎり抑圧に本能的に抵抗を試みる。民族間の抑圧関係をなくして、自由に各民族の精力を発揚させ、これを綜合するところに世界の進歩が生れる。民族的抑圧あるところに平和はない。マルクスが他民族の自由を奪ふ者は自己もまた自由でありえないと言つたのは真理である。抑圧は必然に抵抗(レジスタンス)をよびおこす。各民族の独自性の友愛的な綜合が世界史の平和の一要因である。五十年近い前に書かれたJ・A・ホブソンの「帝国主義論」には各民族の自主性の相互尊敬の上に世界協働体が築かれると書かれてあるが、アメリカの老哲学者ジョン・デューイの戦後の小冊子「単一世界社会への道」にも「自発的な諸国民の協働のみが世界社会をもちきたすことができる」(邦訳一四頁)とある。すぐれた社会思想家や哲学者は民族の正しい意味をかやうに理解してゐる。民族的不平等のままで世界国家を作ることはできない。この意味でカント、ヘーゲル、ゲーテ等を生んだドイツや、東洋文化のすぐれた一地点たる日本のやうな大民族の自主性を長く奪つておくことは世界平和のために不幸である。民族は国家を持たうとする。植民地的地位を脱却したアジア諸民族の第一の欲望は自らの国家をもつことである。民族の協働は、各民族が自国を解体することによつてでなく、その自主的な創意力をますます確保し、その相互尊敬の上に築かれる。民族自主性は独立国家の

かたちで表現される。平和は国家間の協働によつて確保される。強国が世界革命の名を利用し、他国における追随者にその祖国への反逆を煽動し、強力を以て弱国を脅迫してその自由を奪ひ、衛星国圏の拡張を試みる如きは世界平和にとつて最も有害である。

第二は各国の経済構造を社会主義的に再編成し且つ政治を社会主義的デモクラシーによつて築き直すことである。もし一方にソ連がその独裁政治を緩和して民主々義原則をとり入れ、他方にアメリカがその資本主義を改革して社会主義方式をとり入れるならば、現在の戦争危機は解消する。平和は各国間の外交的操作だけで実現されうるものでなく、まづ各国の社会体制が戦争原因の最も少いものにならなければならず、それは今日においては社会主義のほかにない。戦争原因を資本主義の存在にありとくり返すのはあまりに単純すぎるが、今日の発展した生産力と社会化した労働を社会主義的に再編成し、市場競争に浪費される富を大衆の生活水準の向上にふりむけることは可能であり、それは戦争原因の少い社会を作り出すであらう。第二次戦争後における諸国政治には旧来の民主的自由が制限されて公然又は隠蔽された独裁政治の再興する兆がある。これは単なる法律上政治上のデモクラシーのゆきつまつた一証である。民主々義は社会的なものに高まらねばならない。民衆の創意的活動にもとづく真の社会化経済のなかで新しい民主々義の進歩がありうる。各国でかやうな基礎体制ができあがらないかぎり、民主的な世界協同体も合理的な世界的計画経済も実現しえないであらう。

世界連邦運動の世界憲法シカゴ案には「人間の生活に欠くべからざる四大要素、土地、水、空気、

エネルギーは人類の共同財産である」といふ言葉があり、社会主義に一歩近づいてゐる感をあたへるが、水や空気などはわざわざ引きだすにおよばざることで、又土地やエネルギーと共に工業生産手段こそ現代の最も重要な経済財であり、それへ言及しないのは資本主義の根本条件たる私有財産の問題を慎重に避けたことを意味する。そのかぎり、この運動はまだブルジョア的限界を超えてゐないのである。土地の公共的所有又は使用が平和の要因であることはスピノーザもカントも既に述べてゐる古い概念で、現代においては土地よりも工業上の生産手段の方が重要なのである。尤もシカゴ原案は私有財産の管理と使用が公共の福祉に従属すべきことを主張してをり、これは高度の社会政策といふほどのものである。平和は社会主義運動にとつても基本問題である。この問題にとりくまずして運動は前進することができない。平和は評論の問題にとどまるのでない。各国の生産構造や政治体制の社会化なくして平和の問題は解決せられない。

ここにいふ社会主義は、マルクス主義、または英国的社会主義、またはドイツ的社会民主々義のいづれか一づの型だけを指すのでない。民族的特殊性に応じてそれぞれの型が発明されねばならぬ。東洋的社会主義といふ範疇は世界社会主義のなかで生存権をもちうる。

第三は世界協同体を形成する努力である。カントの永久平和論のなかに既に国際連合の思想が現れてをり、それは平和主義者の久しい願望の一つである。第一次戦争後に形成された国際連盟が失敗し、第二次戦争後にできた国際連合もその効果についても懐疑がもたれてきたが、最近にいたつてそ

れはかなり能率的にうごき、朝鮮戦争に際して国連内に二つの勢力の対立が鋭く現れたとはいへ、民主々義擁護のために一致した行動が見られた。国連が異つた理想をもつ国家であつてもすべて一応それらを集めて世界政治の調節を民主的に討議決定する機関である以上、中共の加入を拒否し、又日独のすみやかな講和とその加入をはからないのは国連がその本来の意義をまだ充分貫きえてゐないことを示す。国連は世界協同体への一つの道であるけれども唯一のものでない。やはり一個の世界法の下に各国の争議を裁定し、世界的に市場及び資源についての計画経済を行ひうる一個の世界政府を作ることが将来の目標とならねばならない。

右のうち大切な考へ方の基準となるのは社会主義である。社会主義とは要するに資本主義の害悪を克服ししかもその成果を十分吸収した上で作りだされるヨリ高度の、ヒューマニスチックな新社会を実現するための思想であり運動である。しかしこれまでの社会主義の歴史をみると、平和の問題が真剣に取り扱はれたことが少く、むしろ戦争問題の方が熱心にとりあげられた。マルクスは西欧のロシア・ツアーリズムに対する戦争を主張し、普佛戦争に際してはドイツは進歩戦争を行うてゐるのだと主張した。もとよりマルクスは偏狭愛国心からでなく、歴史の進歩の観点からそれを主張した。又かれはいかなる戦争も講和において無賠償、無併合たるべしといふ鉄則をかかげた。戦争を革命とむすびつけたのはレーニンで、彼は帝国主義を内乱に転化せよと主張し、ロシア革命において一応それに成功し、更に将来の国際的階級戦争や、又東洋被搾取民族の西洋にたいする戦争などを予想し、又ド

イツ青年共産主義者のかかげた軍備撤廃のスローガンをアナーキスト的空想として叱責した。かれもマルクスと同様に戦争終結に際して無賠償無併合の原則を堅持した。マルクスもレーニンも民族的抑圧は社会主義にとつて許すべからざるものとする。このレーニンの戦争主義を継承し而も社会主義的な無賠償無併合原則を捨て去つてゐる人がスターリンである。社会主義史上に平和主義者といひうる人はフランスの大指導者だつたジヤン・ジョーレスくらゐである。そのジョーレスも議会主義的実践家であつたことからして、各国政府間の妥協によつて平和をもたらしうるといふ空想をした。(ジョーレスはその平和主義の故に第一次世界戦争勃発直後に偏狭愛国者から暗殺された。)しかし今や第三次世界戦争の危険の迫るにつれて平和の問題は社会主義の基本問題となつた。この問題を解決せずして社会主義は前進することができない。平和の問題は社会主義にとつて評論の問題でなく自己自身の問題である。又すべての人が社会主義にならなくともよい。しかし各国の生産構造や政治体制の社会化なくして平和の問題の解決されないことを認識すべきである。平和をもたらす主体的勢力は勤労する一般大衆である。そして社会主義は勤労者の生活原理である。大衆の平和欲求感情の理論化や運動化が社会主義者や社会主義政党の何よりの急務である。

3　平和論者の忘れもの

今日の世界で平和の要因よりも戦争の要因の方が多いのは悲しむべきことだ。これにたいしていく

つかの真面目な平和運動がおこつてゐる。従来の平和運動は宗教家や倫理学者の仕事であつたが、第三次世界戦争の危機感の一般化するにつれて、平和運動も従来の狭いサークルを脱して知識階級や一般勤労大衆の意識にのぼるやうになり、或は国連系のユネスコ運動、或は世界連邦運動、或は共産主義系の世界平和擁護会議などの形で現れてゐる。それらの平和運動の評価をしておかねばならない。

平和論者には新旧二つの型がある。旧い型の平和論者は宗教家や倫理学者などから成り、その立場はヒューマニズムとかコスモポリタニズムとかで、第二次大戦まで平和問題はこの人たちだけが専門的にとりあげてきた。かれらはたいてい善意な人々だつたが、その運動自体には大して効果がなかつた。クエーカー派の人々が監獄に入ることを覚悟して徴兵に応じない態度を押し通してきたやうなことは信念と勇気のほど見上げたものだつたが、広汎な社会的影響をもつものでなかつた。

新しい型の平和論者は、第三次大戦の予想されるにつれて、主として一般知識人の間から出てきた。大衆の平和欲求感情がそれにつながつてゐる。その特徴は、これまでの平和論者のとりあつかはなかつた政治経済的考察が多少とも現れてゐることだ。世界連邦運動がその標本的なものだ。かれらにも戦争防止の最後のカギは人間の良心だといふ思想がいつもつきまとつてゐる。しかし良心だけで片づくほど戦争問題は簡単でない。かれらの政治経済的考慮といへども資本主義にたいする歴史的批判や社会主義による戦争問題の解決といふやうな原則的立場が欠けてゐる。

以上の新旧の平和論者の所論には後にのべるやうに色々の不満があるけれども、かれらのまじめさ

には疑ひをもたぬ。

これに反して今日のわが日本には家畜的平和論者ともよぶべきニセ平和主義者がある。或は国家の基本権たる自衛力までを否定して完全無武裝を主張したり、或は国際社会が承認するかどうかにお構ひなく一人合点で永久中立を主張する如き悲惨にして滑稽なる幻想で自己満足する手合がそれである。かやうな幻想にふける国民ほど強国の餌食になりやすいものはない。自らの民族の自由と自主性を売つてまで家畜の平和をねがふ国民は最も容易に他国の奴隷となる。この種の主張者は平和論者と名づけることはできない。朝鮮の現実によつてかれらのふりまく幻想が急に国民の支持を失ひつつあるのは慶すべきである。私がここで問題とするのはかやうな家畜的平和論者でなく、思想的に正当の存在の権利をもつ上記の新旧二つの型の平和論者である。

さて新旧の平和論者はその誠意敬すべきも色々不足したものがある。社会科学的なほり下げや現実政治的観察が足りず、又人性にたいする洞察があまりに理性的であり、又いくらか自己満足的なヒューマニストでありすぎる。

それ故にかれらはその善意にもかかはらず次のやうな重大な忘れものをしてゐる。

第一に「さし迫つてゐる第三次世界戦争の具体的原因が何であるか」を十分に分析してをらぬ。原因を究明せねば危険を除去する手段も分らない。ただ戦争の害だけを力説しても現実の政治とならぬ。二つのドイツの分裂、モスクワとユーゴの確執、水素爆弾の製造着手、朝鮮戦争の背後で働く

力、中共の動き、東南アジアの民族主義と共産主義、対日講和をめぐる米ソのカケ引等々、現実的にみれば大戦争を誘ふ原因が多い。それらの根柢にあるのは戦後の世界資本主義の新しい矛盾や共産主義の名でカムフラージした新しい軍国主義の勃興などなのだが、平和論者はかうした現実を露骨に解剖する勇気や努力が足りない。

第二に「誰れが戦争の能動者であるか、もしくは能動者たりうるか」を卒直に分析することを避けてをり、少くともそれを直言する勇気がないやうにみえる。戦争能動者に反省させることが戦争を避ける最も近い道である。現在のところ世界戦争への能力をもつてゐるのは米ソ両国のほかにない。能力があればその意志もできる。両国といへども戦争を避けたいとおもつてゐるにちがひない。それにもかかはらずその経済には強度の軍事化と戦争体制がある。原爆の競争から水素爆弾の競争に入れば、それだけでも戦争誘発力となる。平和論者の忠告はまづ米ソ両国に集中せねばならぬのである。

第三に人類が経験したばかりの「第二次世界戦争の歴史的性格」を一応真剣に分析してみなければならないのにその努力が足りない。それは第三次戦争の防禦に役立ちうる。勝者がいつも正しく敗者がいつも不正だといふ阿諛的な思想をもつ人は平和のごとき人類的問題を論ずる資格がない。第二次戦争も本質において両者の側ともに帝国主義戦争であつた。

第四に「平和をもたらす主体的勢力は誰れか」の問題にも具体的に答へてゐない。それは各国の勤労大衆を形成する労働階級や勤労農民や中産階級や良心的インテリでなければならぬ。不可抗力のや

うに迫つてくる戰爭の危險を防ぎうるのは、言葉の洪水でなくて大衆行動だ。かかる行動の主体はさしあたり労働階級である。この労働階級の大衆に意識を与へ平和運動の主体的役割を果させるやうに平和論者は工作すべきであるのに、さうした地道なことが忘れられてゐる。

第五に「平和と社会主義との必然的関連」を見逃してゐることも平和論者の重大な忘れものである。平和論者がことごとく社会主義者にならなくともよい。しかし現代の戰爭の根本原因たる帝国主義を克服する社会的経済的体制は社会主義のほかなく、それはまづ一国的規模において始めらるべきものだが、それが国際的には戰爭防止の役割をする。自分の住んでゐる国の現実の資本主義的矛盾、官僚腐敗、貧富の矛盾をそのままにしておいて、倫理的感傷だけで戰爭問題を論ずるのは一人よがりであるばかりでなく、むしろ真の危機から眼を蔽ふものだ。

第六に「戰爭における人性的根源」の問題を平和論者はもつと深く扱ふ必要がある。平和論者が良心の問題をとり出すのはまちがひでない。しかし人間心理には良心と共に不良心がある。人間の心の最奥にはいつまでたつても馴養できない野性があつて、時として文明生活の秩序に倦怠を感じてあばれ出す瞬間がある。戰爭はかかる心理を大衆的に組織する。ナチスはこの心理を資本主義社会の失業不安とむすびつけて大衆を煽動した。人間の自然的な力の衝動の前には数千年の文化的訓練や道徳的説教などがたちまち押し流されることがある。殊にこの衝動が狂信や党派性とむすびつくと暴力が正当化される。宗教においてすら信者と異端者の両陣営に分れて戰ふ非理性的なことが歴史上にしばし

ば現れた。又、人は自分の祖国を愛する。これは理性であるよりもむしろ感情だ。祖国的なものを超えて直に汎人類的に行動せよといふ知性人の声は弱々しい反響をよぶだけだ。又あまりに知性的もしくは感覚的に廃頽した文明にたいして、野性的な種族が征服者となつて現れ新文明を創造する作用は歴史上にいくたびも行はれた。人間の精神の奥にある野性や祖国感情をむやみに抑へつけるのでなく、これを良心や理性と正しくむすびつけるのが人間の不断の進歩にとつて必要であり、それは特に戰爭問題について然りである。要するに平和論者はもつと人間心理や社会心理の理解者であることを要する。

良心の問題は大切である。これが平和の最後の鍵である。あらゆる荒廃のなかで良心の荒廃ほど恐しいものはない。自己の良心の声にみちびかれうる人のみが人生の強者であり又平和の真の使徒である。人類が良心を失ふことはありえない。ただしかし倫理的感傷だけでは却て真の危機に眼を蔽ふこととなる。戰爭の防止と平和の獲得とは、良心を基底としつつ、社会的経済的政治的の現実条件の合理的な調整を行ふことによつて解決される。現在の世界政治は自然主義的で、経済的利己心や政治的支配欲が衝動のままに放任されてゐる。生の衝動は大切なことで、それがなくなれば人生は乾からびてしまふが、人間には愛他、自己犠牲、創造、建設などの高貴な衝動もある。戰爭に至る如き衝動をいかに抑へるかは道徳的説教だけではだめで、具体的な政治経済的方法が必要なのだ。社会構造における社会主義と精神構造における良心がむすび合はされねばならぬ。平和のための主要目標がここに

ある。

正義又は自由を実現するためにやむをえずもう一回だけ戦争する、これが最後の戦争だといふ口実のもとに幾度か戦争が行はれた。キリストの名でいくどこんな戦争が行はれたか数へきれないほどである。第一次及び第二次戦争も民主主義のための戦争といふ口実のもとに行はれたけれども、早くもすでに第三次戦争が予想されてゐる。フィヒテのやうな民主的な哲学者でさへも、その「封鎖的商業国家論」のなかで最後の戦争といふ思想を述べてゐる。社会主義実現のために最後の戦争をするといつた考へ方ももちろん誤りである。レーニンは資本主義を撲滅するためのプロレタリアの戦争は正当だとしたが、これが恐るべき好戦的誤謬をひきおこすことは現在の共産主義者が実際に証明してゐる。世界連邦運動に口火をつけたリーヴスさへ、米ソ間に戦争がおこらねばならぬとすれば、少くともそれを基地や領土のためでなく、理想のための市民戦争たらしめよ、かやうな戦争が終つて自動的に世界連邦の勝利が来るといつてゐる。これも執念深い最後戦争の亡霊にとりつかれた考へ方だ。この思想はじつに根深い。しかしこの「最後の戦争」を止めること、即ち戦争せずして戦争を止めることと、これ戦争を絶滅する所以である。単に戦争の破壊力が大きくなつたといふだけでない。平和と自由とのための主力は最後の戦争におかるべきでなく、平和を作り出す以上三つの条件の追求にこそ力を注ぐべきである。

第三章　二十世紀と世界戦争

一、大戦争時代としての現世紀

われわれのすむ二十世紀は大戦争時代だといふことができる。

十九世紀の初頭にはナポレオン戦争がまだ続いてゐたが、一八一四年のウイン平和会議から一八七〇—七一年の普佛戦争にいたるまでは大戦争がなく、普佛戦争といへども規模の大きいものでなく、この世紀を終るまでの間は資本主義の平和的発展と相応じて、だいたい平穏な状態がつづいてゐたのである。

しかるに二十世紀になつてから様相が一変し、戦闘規模が拡大したのみでなく、多数の国家が二つの陣営に分れて戦ふやうになり、すでに現代人は二回の世界戦争を体験した。十九世紀末から独占資本主義段階が現れ、ヨウロッパの民族国家が世界支配をめざす帝国主義国家に発展し、十九世紀に世界の工場として国際貿易の利益を独占した英国にたいしてドイツが若い競争者としてたち現れてその支配をくつがへさうと執拗にくひ下り、フランスは守勢的となり、東洋に勃興した日本が強国間の競

争に参加し、南北戦争以後にめざましい資本主義生産力をたくはへたアメリカは孤立主義をとりつつも世界政治の押しも押されもせぬ強国となつたのが二十世紀の最初の十年間の光景であつた。十九世紀末に成立した第二インターナショナルはヨウロッパ諸国の社会主義政党の有力な団結で、各国資本主義政府に脅威を与へてゐたが、インターナショナリズムがその観念的紐帯であつたにもかかはらず、各国の国民的利益の衝突がその内部にも反映し、一九〇七年のバーゼル大会、一九一二年のスツットガルト大会では戦争問題が白熱的論争の課題となり、しかも十分の意見の一致が見られなかつた。世界戦争が不可抗力のやうに接近する不気味な情勢に当時の社会主義者がいかに苦悩したかをその論争のなかでみることができる。第一次大戦のはじまるや第二インターナショナルは土崩瓦解し最大の社会主義政党であつたドイツ社会民主党をはじめ各国の社会主義政党の大部分が母国防衛主義の立場をとつた。この第一次大戦からわづかに二十年を隔てて第二次大戦が勃発し、その参加国は前大戦よりも多く、戦略爆撃機の発達によつて戦場は各国の領土のすべてにわたり、死傷者は非戦闘員にまで及ぶ莫大なものとなつた。そして第二次大戦よりわづか六年の歳月しか経過してゐないのに早くも第三次大戦勃発の危険が予想されるにいたつてゐる。大戦争の送迎に忙しいのが二十世紀の運命であるかのごとき観がある。もはや一国対一国の戦争は大した問題でないし、又それは容易に世界の多くの国をひきずりこむ大戦争に発展する必然性がある。

二十世紀を大戦争の世紀たらしめてゐる第一の客観的前提は技術及び経済の発展が世界の空間を圧

縮し、国際市場の網の目が各国経済を緊密にむすびつけ、かくして世界の統一化の物質的基礎ができあがつてきてゐることである。世界の統一化傾向は市場を求めて世界のあらゆる場所にまで機械的にひろがらうとする資本主義経済と、それによつて発達を促された科学とのもたらした功績である。今日アフリカ土人の原始経済でさへ世界市場の景気変動の影響下にある。商品、原料、資本、労働力、サーヴィスのみならず、制度や観念や風習までが非常に迅速に且つ広範囲に流通し一様化する。ただ政治のみが旧来の主権概念によつてその国境を堅く守つて相互に国家的に対抗する。これは保守主義に似てゐるが、民族が今日も政治経済上の能動的単位であることからみれば理由なきことでない。しかし政治と経済の矛盾は時とともに大きくなつてゐる。世界が経済的技術的に統一化に向うてゐるにかかはらず、国家が相互的に対抗することが戦争の原因である。しかしそれだけでない。それだけならば、国家間の協調によつて問題を解決することがそんなに困難でない。国家には大小がある。大国家の強国主義的衝動こそ戦争の真の原因となる。

今世紀を世界戦争の世紀たらしめてゐる第二の前提は大国家が世界統一のヘゲモニーを争うて帝国主義政策に走ることにある。どの国家も大戦争への衝動にかられるものでない。大戦争を行ひうる国は少数にすぎない。今日世界戦争の能動者たりうる国は米ソ両国しかない。英佛は二流の帝国主義国となり、日独は十年二十年のうちには過去の力を回復することができない。世界の統一化はよろこぶべきことだが、それは諸国家の民主的協働によつてできないことでないし又、さうするのがもつとも

合理的であるのだが、米ソ両国は自国を中心としてこの世界的事業を遂行しようと欲する。世界の統一化はどれかの最強国に求心的に集中することが早道で能率的であるかの如く見えるけれどもそれは昔ながらの世界帝国の夢をくり返すことに終るもので、真の統一化は時間的におそからうとも、各国家の民主的結合を通ずることが最も正しく、かつ決して不可能でない。大強国は必ずしも高貴な人類的衝動によつて世界の統一を考へるものでなく、その利益を追求し又権力衝動をみたすために自国中心に行動する。それは理知や合意の手段を手ぬるいだけでなくむしろ有害だと考へ、極端な政治的手段すなはち戦争に訴へてその目的を貫徹しようとする。帝国主義は自由よりも軍力を現実的で合理的なものだとして愛好する。今日かかる軍国的帝国主義を最も粗野なかたちで代表してゐるのがソ連である。社会主義がペートル大帝的な膨脹政策の道具にされてゐる悲劇的な逆説現象が同国にある。

現世紀を大戦争の世紀たらしめてゐる第三の前提は資本主義のゆきづまりである。資本主義は似而非社会主義者のいふやうに単純に破壊的罪悪的なものでなくて、人間の創造的能力を不断に刺戟し巨大な物質的富と技術をつくりだして人間を原初的な労苦から解放し、政治上に民主々義を作りだし、ひいて文化にも種々のめざましい業蹟をもたらした。それはマルクスが思弁論理的に構想もしくは希望したやうに大団円的な巨大恐慌によつて簡単にひつくりかへるものでない。ソ連や各国共産党はアメリカで恐慌の発生することを大旱に雲霓をのぞむごとくに待ちかまへてゐるのだが、かりに恐慌になつたところで資本主義国はその危機をきりぬけるためにまづ軍拡をやつて過剰物資を浪費し失業者

を軍事産業に吸収してその不満を抑へ、ついで残酷な戦争を実行するやうな離れわざをやり、マルクスの設計通りに恐慌で成佛するやうなヘマをしない。しかし資本主義が私有財産と私的利潤の追求を生命とするものであるかぎり、海外市場の争奪は必然的な宿命で、地球は無限でないのだから、その間の競争が世界分割の戦争に転化せざるをえぬ。第二次大戦もこの矛盾を解決しなかつた。他方においてシュムペーターのいふやうに、資本主義はそれ自身の功業によつて自らを無用にする、すなはちそれ自身の進歩の圧力で自己をみぢんに砕く作用をする。企業家の利潤追求意志が生産の型を不断に革命し、生産手段と労働力を常に新たな形式で結合するにつれ、技術的進歩は専門家のチーム・ワークとなり、進歩が自動化され、工場から最後の消費者に至る曲折した過程が単純化され合理化され、商工業の経営は管理（アドミニストレーション）の如くになり、経営者は官僚化し、企業家の創意活動の余地がなくなり、かくしてブルジョア層が消滅し、資本主義経済が破滅せざるをえなくなる。資本主義は積極的な成果を残して歴史的使命を終ることとなる。しかしこれは純粋論理的に考へられた資本主義の運命である。一の社会タイプから他の社会タイプへの推移は現実にはスムースに行はれるものでない。社会的矛盾の解除は荒々しい手段すなはち戦争や革命のごとき過程を必然ならしめる。

第一次大戦も第二次大戦も資本主義に根ざしてをると共に次の新しい社会に道をひらくための社会革命的要素をふくんでをり、政治的な強国主義がそれにからみ合うてゐる。技術及び経済の発展によつて戦争規模はますます増大し、戦争技術は全地球を戦略目標とせねばならなくなつてゐる。我々は

次の戦争の要因として第二次大戦以後の資本主義の特徴及び強国主義の再勃興について観察してみなければならない。

現世紀は大戦争の世紀であるとしても次の大戦を阻止する平和的要因が欠けてゐるわけでない。戦争の破壊力があまりに大きくなつたこと、大衆の平和欲求感情の強くなつたこと、知性的な反省が増したこと、社会主義及び労働組合運動の発達してきたこと、世界共同体の設想が国連や世界連邦運動のかたちなどでやや具体性を帯びてきたこと、アジアが米ソの外に立つ第三勢力としての自覚を強めつつあることなどがそれである。これらの問題はしばらくおき、本章においては戦後の資本主義の特徴や最も戦争的なソ連の体制などの解剖をこころみよう。

二、第二次大戦の性格分析

まづ現代人が経験したばかりの第二次大戦の性格を反省しておかう。

第二次大戦の惨害の記憶は特に敗者たる我々において生々しい。広島の原爆犠牲者三十万、南方海上にもくずと消えた二百万近い人々、シベリアの荒野に奴隷労働に服した数十万、外地で平和な市民生活をしてゐた人々の無財産のままの本国送還、戦後のインフレと窮乏と道徳的腐敗、日本のことだけ考へても実に悲惨である。他国の人々もそれぞれ苦しい目に逢つた。世界の地図は第二次戦争によつて大に変化し社会組織も構造的変化をうけた。これほどの大経験を分析しその性格を確定することなしに、平和を論議したり、次の戦争を有効に防止する政策をたてることはできない。

現在生きてゐる人々は直接間接に第二次世界戦争の関係者であるから、どうしても主観的判断がまじる。この戦争の歴史的性格を正確に決定するのは、後世の歴史家の任務である。けれども第三次戦争の予想される今日、手を拱いて後世の歴史家を待つてゐるわけにゆかない。できるだけ冷静に客観的判断をしてその性格決定をしておかねばならない。

第二次戦争も第一次戦争と同じやうにその根本性格において帝国主義戦争だつたといふことがいへる。戦争には攻撃戦争と防禦戦争がある。帝国主義戦争と民族戦争といふ分けかたもできる。大まかに云つて現代において攻撃戦争と帝国主義戦争は一致し、防禦戦争と民族戦争は一致する。第二次世界戦争で文字通りに防禦戦争の立場に立つたのは中国だけだつたのであるまいか。その他の諸国では濃淡の差こそあれ、すなはち、〃ヨリ少い害〃といふことはいへるけれども、帝国主義といふ言葉を政治経済的に厳密に規定して考へてみれば、どちらの側も帝国主義戦争をたたかつたのであるまいか。

帝国主義の主要の原因や形態は二つある。第一は市場及び原料地の争奪であり、第二は領土拡張闘争である。資本主義のもとでは宿命的に生産力が消費力を追ひ越して利潤が低下する。新需要を海外に求めねばならない。又国内において生産物の一部は労働者に流れるが、他の大部分は富者の手に入る。富者の過剰所得が放出されて賃金を高めて労働者の生活水準を高めたり、又は租税として徴発さ

れて社会に放出され消費を高め、国内市場を豊かにするといいのだが、多くの場合さうではなくて、海外に資本として輸出されたり、海外市場開拓のために使用される。海外市場の把握は単に経済力だけでは不可能か、もしくはまだるつこいので、科学的効率の高くなつた軍力を背景とした政治力と手を携へて進む。大国の小国にたいする抑圧が必然となる。国内政治における民主々義原則は対外関係では沈黙する。かやうに富者の過剰所得が消費されずに貯蓄され、国内市場を豊かにする代りに海外市場の争奪に向ふとき、ここに帝国主義現象が成立する。今一つの領土拡張政策は資本主義だけに伴ふものでなく、人口の圧迫や民族的膨脹慾などからもおこりうるのである。この原理を第二次戦争にあてはめてみると、枢軸側は領土拡張慾にかられ、連合国側は市場拡張慾にかられてゐたといへるのであらう。第一次戦争で深い痛手をうけてゐたドイツや国内資源の貧弱な日本、イタリーはそれだけ貪慾な領土拡張に熱中した。カイロ、ポツダム両宣言はいづれも民主々義の大義名分によつて貫かれてゐるが、市場拡張のにほひがしないことはない。

それではソ連の立場はどうであつたか。ソ連はヒットラーの襲撃をうけて立つたのだから防禦戦争であつただらうか。否さうでない。ソ連が日独伊と秘密交渉して世界分割の計画をしたといふ文書が数年前アメリカ政府によつて曝露されたことがある。まさかアメリカの偽造文書ではあるまい。それ以前においてもソ連はヒットラーと謀つてポーランドを分割しバルト三国を併合してをる。戦後においてソ連の領土拡張政策はその強力な赤軍の背後の圧力によつてまづ東欧諸国の衛星国化に成功し、

東は満洲北鮮を既に呑み、諸国共産党を手先に使つて世界の至るところにその勢力拡張をこころみてゐる。戦後になつて急に領土拡張主義となつたのでない。ソ連の第二次戦争における立場は領土拡張を内在目的としてゐたところの戦争即ち帝国主義戦争だつたのである。この戦争を契機としてソ連の社会主義からレーニン時代の西欧色が消滅しマルクスの代りにペーター大帝の原則が支配するに至つた。

第二次戦争の性格はその結果からかなり判断できる。連合国側は民主々義の名においてこの戦争をたたかつた。この目的は実現したであらうか。日本のやうに形式だけとはいへ民主的改革がわりあひスムースに進行してゐる国は非常に少ない。日本といへども敗戦国といふハンデキヤップから真に自主性を基礎にした民主化だといひきれないものがある。（自主性を欠いた民主化は本物の民主々義とかなり違ふものを生み出す。）世界政治を見渡すと、本来の民主々義の理念からみて納得できぬ現象がかなり出て来てゐる。第一に国際連合における大国の拒否権のごときは旧来の民主々義の多数決原理とかなり違つてゐる。第二に民族的独立は民主々義の第一条件でもあるのに、ドイツは二つに引き裂かれ、朝鮮もギリシアも同様であり、大国と小国との上下関係は以前よりもひどくなつてゐる。二十世紀の国際政治において、排他的主権をもつ諸国家の併立してゐる状態を中世の封建社会における地方的権力分立状態にひとしいと形容した人があるが、戦後の国際政治の地図からみれば主人と従者といふ中世的形像が至る所でみられる。鉄のカーテン内でソ連が主人、東欧諸国が従者である関係が明

瞭である。チェッコやポーランドのやうな西欧型に近い社会も自由を失つた。マーシャル計画では大国の経済的領主権のもとに小国がその家来の役割をしてゐる。第三に講和会議の形式がイタリアの例でみられるごとく勝利者側で一方的に決定し敗者の口出しを許さないやうになつたのは第二次戦争の作り出した新例で、従来の国際法の慣例に反してをり、民主々義の実行だとはいひ難い。第四に諸国の国内関係において従来の民主的原則——たとへば罷業権、団体交渉権等——の制限されるに至つたやうな事実もある。第五に戦後の世界が米ソ二大陣営に分れたことは、一つの世界を実現するといふ美しい理想のかかげられた第二次戦争の現実的結末として最も悲劇的である。ソ連は鉄のカーテンでその衛星国群を外部から遮断し、アメリカは資本主義国家群を領導し、相互の猜疑や利害衝突のため軍備の拡張に余念がない。もはや勢力均衡の原則も現実も見られなくなつてゐる。

しかし第二次世界戦争はなんらの進歩的意義をもたなかつたものでない。古典的な自由放任的資本主義が姿をかくさざるをえなくなつたのはこの戦争の生んだ一つの功績である。戦時の必要のための統制経済は第一次戦争中にも行はれたが第二次戦争中に更に大規模となり、戦後には諸国に計画経済として発展し、イギリスの労働党の社会主義政策やアメリカのフェア・ディール政策などが現れた。それらは依然として生産手段の私有を基礎としてをり且つ大衆の創意性にもとづくものでないから、真の社会化経済といふよりも、官僚的集産主義の特色を帯びたものだが、それでも企業家の無制限的な利潤競争が国家の管理下におかれるやうになつた。資本主義形式は続いてゐるにしろ、それはもは

や明白に衰頽期的な資本主義である。バーナム教授は第一次戦争は純粋の資本主義戦争だつたが、第二次戦争は経営者社会の実現を促進する戦争だとその「経営者革命論」のなかで云つた。かれのいふ経営者社会とは生産過程及び政治過程における専門技術者を中心とする能率主義的な社会で、生産手段は公有されるから搾取者の存在はありえないが、社会の主人は社会主義の予定するやうに労働階級でなく技術者の層だといふにある。彼の説が全然正しいとはいへないけれども、彼の指摘した動向がこの戦争を契機として強くなりつつあるのは事実である。第二にこの戦争中に西欧諸国のアジアにたいする圧力が低下し、アジア諸国の植民地的地位からの離脱がもたらされたこともその肯定面の一つである。

第二次戦争の現実的成果は人類の一大祝福とならずして、政治における米ソ二大国の対立抗争、経済における世界的不均衡などの険悪な形勢を生み出し、早くも第三次戦争の危機といふ不気味な予想が人々を脅してゐるが、それにも拘らず第二次戦争が種々の肯定面をもたらしたのは上述の如くで、更に第二次戦争によつても本質的に歪められなかつたところの近代的なもの——即ち民族の自主力と抵抗力、労働階級の社会主義闘争、一般民衆の民主々義への慾求と闘争——は依然として健全である。それらこそ第三次戦争の危機を克服する力である。決して悲観することはない。

三、戰後資本主義と新戰爭との関係

自由競爭が完全であればあるほど経済循環が調和的に進行し無限生産が可能となるといふ古典経済学流の楽観説は、資本主義の上向的発展期たる十九世紀にはある程度の現実でもあつたが、同世紀末から独占資本主義が強力に発展するにつれて古典的な自由競爭が消滅し、ブルジョア経済学者も完全な自由競爭はあつたことがなく不完全競爭こそ常態だといふ独占擁護の学説を言ひ出すに至つた。しかしそれは市場競爭の消滅を意味するものでなく、独占資本間の競爭は軍力をも伴うた政治力をもつてする深刻なものとなり、その結果第一次世界戰爭が勃発した。この戰爭も資本主義の矛盾を解決しなかつた。第一次戰爭後にはかつての資本主義の全然知らなかつた巨大なインフレーション、構成的失業、大デフレ恐慌、各国金本位制の崩壞等、資本主義の一般的危機とよばれる諸要素が現れてきた。市場価格を中心とするブルジョア経済学の均衡理論——純粋な金錢主義的な理論——が無力を証明し、経済学の中心がその従来興味をもたなかつた雇傭問題に移らざるをえなくなつた。この経済的危機が政治的に表現されて民主々義の危機となり、ドイツやイタリーに独裁政治が現れた。これらの矛盾から第二次世界戰爭が勃発したのである。この戰爭もまた資本主義の矛盾を解決しなかつたからこそ第三次戰爭の恐怖が現在人類をおびやかしてゐるのである。

第二次戰爭後の各国の資本主義には、多少とも計画経済と社会保障と完全雇傭の原則がとりいれられ、管理経済的特色が現れ、したがつて社会化経済へ一歩ふみ出したもののやうにみえる。それは実際には依然として生産手段の私有を基礎とするもので且つ大衆の下からの創意で築かれたものでないから、真の意味の社会化経済ではないのだが、資本主義の古典的特徴——企業家の自由放任競爭、無制限の利潤追求、盲目的生産、価格の自動的均衡への放擲、階級搾取等々——が露骨でなくなり、国民大衆の生活水準や雇傭問題などのいはば社会的均衡の問題を、経済の最も関心的な問題としてとりあげざるをえなくなつたところにたしかに一つの進歩がある。西欧経済のアジア経済にたいする搾取が少くとも植民地支配的でなくなつたことも一つの進歩だ。マーシャル計画の如きもその反ソ的な政治面を捨象してみれば一つの世界的な計画経済たる意味もある。

しかし戰後の世界経済をみても各国経済の内部をみても、戰爭の原因となりうる新しい矛盾が現れてをり、決して祝福すべき光景に充ちてゐない。

いま戰後資本主義における一般的特徴のうち主要なものをあげてみる。

1　米ソ両経済圏の分裂

ソ連共産主義と残余の資本主義世界との分裂は戰爭前からのことであつたが戰後において一層それが拡大し且つ深刻となつた。ソ連は東欧諸国を衛星国化し鉄のカーテンをもつて西欧諸国と遮断し、

更に中国を政治的のみならず経済的意味においてもその勢力圏化した。東欧諸国は実質上ソ連の戦争機構の一部となり、その経済は厳格な軍事的威圧の下に置かれてゐる。ソ連は中国に対しても米英経済との接近を禁止してゐる。一九五〇年初頭からはルーブル貨をもつてソ連経済圏内の国際的貨幣とする意図をハッキリ示し出した。西はエルベ河から東は東支那海に到るまでの広大な地域の資源、生産、商品流通がルーブル貨幣を媒介として一の広大で単一なソ連経済圏にまとめられやうとしてをり、しかもそれは残余の資本主義経済圏と一切の関係を断絶してむしろ自ら進んで孤立してゐる。ソ連経済圏の近代的意味における富はなほ貧弱で、その民衆の生活水準は低級であり、むしろ野蛮でさへある。ソ連経済圏の生産方法を近代化し国民の生活水準を引きあげ、かれらを窮乏から離脱させるのには外部から米英資本主義世界の富を大量的に投げ入れる必要があるのだが、ソ連指導者はそれを頑強に拒否しつづけてゐる。これはありあまる資本主義世界の商品のはけ口をせばめ、その内部矛盾を一層激しくすることにもなるのである。この断絶的に相互孤立する二つの異つた経済体制の存在は世界経済のイビツ状態を一そう促進し戦争の要因となる。

2　世界経済のアンバランス

世界経済全体からみれば、富の生産も商品や資本や労働力の移動の量及び速度もその上にきづかれた物質文明も、米英佛を中心とする資本主義世界のはうが遙かにソ連圏より優越してゐるのだが、この資本主義世界内部における矛盾は第二次戦争の大出血の結果一そう甚しくなつてゐる。アメリカの生産は残余の世界のそれに匹敵し、そこには高度の技術、おびただしい生産財及び消費材の生産、民衆の高い生活水準、文明のあらゆる便宜があるのだが、残余の世界にはなほ飢餓窮乏の暗いかげがある。西欧は最近においてその生産水準が戦前をはるかに上廻つたが、アメリカ人の半分以下の生活水準で、国家も民衆もなほ飢ゑ疲れてゐる。アジアではインド、ビルマ、インドネシア、インドシナ等が大なり小なり形式的には植民地の地位を脱したけれども、西欧がアジアの犠牲において生活するといふ数百年来の原則は陰蔽された形でなほ継続し、深刻な貧困がアジアを支配してゐる。西欧はその経済が回復すれば、いなその回復のために、アジアに新しい搾取経済を行ふ可能性がある。富みすぎたアメリカ、飢ゑたヨーロッパ、搾取されるアジア、この三角関係が調節されなければ資本主義世界経済のアンバランスは一そう激しくなり、戦争不安の一つの種となる。

3　経済的ナショナリズムの強化

資本主義は世界性をもつてゐるが、政治的な主権的国家を踏み台として発展してをり、また逆に主権的国家自身の本能から自国内の資本主義を踏み台とすることが行はれ、したがつて経済的ナショナリズムの相互闘争が不可避である。各国資本主義にとつて市場競争は依然として宿命的である。マーシャル計画は客観的には素朴な世界的計画経済といふ進歩的一面があるにしても、またアメリカ資本

主義の自己発展策の一部でもある。マーシャル計画の西欧における指導者たる西欧経済協力局（ECA）の長官だつたホフマンは西欧経済連合の成立に最大の努力をそゝいだが、それは西欧諸国の経済的ナショナリズム特に英国のサボによつていつも足ぶみさせられた。英国は西欧の一部に違ひないが同時に又英連邦の指導者でもあるから後者の利害を無視して西欧連合に直ちに積極的態度をとるわけにゆかない。フランスはザール炭田を独占的に支配しようとして西独の憤怒を買つてゐる。西欧の工業力はすでに相当回復したが、ソ連、東欧、中国の市場は閉鎖され、アメリカの市場性も限度があるから、早くも生産過剰となる危険があり、市場競争は一そう激甚ならざるをえない。仮りに西欧連合が成立するとすれば、それは西欧人にとつて非常に大きな進歩であるけれども、かやうに強化された西欧協同体が一つの統一的な力をもつてアジアの搾取に積極的な態度をとるにいたることも決してありえないことでない。最近において英米両者の政治的歩調がそろはず、時として英国はアメリカの意思に背くやうな行動をする。（英国が突然中共を承認し且つ中共の国連加入を主張してゐるやうなことはそれである。）一つの例をあげれば英連邦はアメリカから石油を輸入し、一九四九年には一四〇〇万トンに及んだ。しかるに英連邦にも石油の産出があるのでアメリカからの輸入を拒絶しようとしたのであるが、アメリカの石油業者の運動によつて政府は強硬な態度を示し、もしその輸入を拒絶するならば、マーシャル計画による対英援助額を削減するといふ態度を暗示した。英国は一九五〇年九〇〇万トンだけの石油輸入を承認せざるをえなくなつたが、マーシャル計画の終結した後はアメリカ石

油一切を英連邦内の市場から駆逐するといふ決心を示した。又一九五〇年のアメリカでは農産物が非常に豊富で倉庫のなかに積み切れず格納庫や船舶にまで積みこんでをり、そのためダンピングすら行ひかけてカナダからの抗議を受けた。英国は日本の商船隊の拡大に反対し日本の繊維品、造船業等の工業製品の世界市場進出を恐れ且つ妨害しようとしてゐる。各国の大衆の大部分はなほ貧困で光と熱のために石油を求め食糧を欲し衣服や日用品を求めてゐるのであるが、資本主義の下では商品は豊富であつても直ちにそれが大衆の生活のためのものではない。「豊富のなかの貧困」といふ現象は今も資本主義に特有的である。

更にわれわれの新たな注意を促すことは社会主義になつても経済的ナショナリズムとその市場や資源の競争がいつかう衰へず、むしろ強まる現象である。ソ連の共産主義がスターリンの「国社会主義」から更に領土拡張政策に進んだエゴイズムは旧ロシア的伝統の復活としてわれわれの悲しんだところであるが、更に一九四五年以来の英国労働党政府の社会主義が依然たる英国的な経済的ナショナリズムの固持者であり、日本工業品に示してゐる深刻な敵意の如きは驚くに値する。英国がこれまで対日講和に熱心なのはアメリカよりも老練な外交的実際主義からではあるが、日本の工業を低い水準に決定しておきたい意向からでもある。労働階級は被支配者である場合に、資本家の生産手段の私有、貪欲、市場競争の罪を鳴らして攻撃するが、いつたん政権を握つてその経済計画を立てる段になると、かへつて彼らの非難した資本家と同じ手法をとつてナショナリストになる。もちろんそれは資本家と

根本的に動機を異にするにしろ、少くとも自国外に対しては依然としてナショナリストであることは同じである。西欧経済連合を最も渋つてゐるのも英国である。高田保馬博士は、集産主義は国家的傾向を強めるといふ説を立ててゐるが（「世界社会論」二〇〇頁以下）、これは定則として立てられぬとしてもその傾向が異つた社会主義体系をもつソ連及び英国に共通的にみられるのは教訓的である。しかしこれらはソ連においては旧ツアーリズムの伝統、英国においては数百年にわたつてアジアを掠奪した伝統のいかに拭ひきれないか、またそれがいかに便宜的に利用されてゐるかを示すものである。これはまた社会主義の建設に国家がいかに有用で能率的な機構として利用されるものであるかを示すのである。しかし自国家にあまり強く執着すれば社会主義の理想が失はれ、社会主義は単なる手段にすぎなくなり、ナショナリズム自身が依然として本体だといふことになる。これでは新しい歴史段階を開くこととはならない。新しい歴史時代は旧来のナショナリズムを整理することを条件としてをり、少くともナショナリズムが新しいものとして生れ変らねばこれも戦争の要因となる。

4　永続的な戦争経済体制

第二次世界戦争がすんで六年にもならないのに諸国の間に平和がきたどころでなく、戦争準備のために各国の経済が高度に動員される状態があらはれてゐる。戦争不安の増大と共に、生産財 Means of Production 及び消費財 Means of Consumption のほかに破壊財 Means of Destruction と

も呼ぶべきものが新しい重要な生産部門となつてゐることが戦争経済の特色である。この破壊財は原爆其他の超科学兵器、軍用機、爆弾、大砲、軍隊装備等から成り、その経済的効果からいへば平和で且つ有効的な再生産の過程に入らずまた大衆の生活水準を高めて労働力の再生産に貢献するものでもない。それは富者のみが消費する奢侈財の生産以上に一般経済循環を害するもので、しかもその生産は非常に拡大してゐるところに今日の特色がある。

この軍需資財の大市場は国家自身である。この意味で国家が戦争主体であることが誰の目にもうつる。戦争目的のための生産が経済活動において決定的地位を占めるにつれて国家官僚の役割が増大する。官僚は今や経済の統制者、集中者となる。彼らの人員量も機能も増大する。元来経済にたいする国家の干渉は資本主義史上幾多の段階的発展がある。第一に重商主義時代には国家が一般経済の発展の促進者として積極的に活動した。十九世紀においてもドイツや日本のやうに遅れて資本主義生産方法を採用した国では国家官僚自身が広汎な経済発展の指導者となつた。第二にアダム・スミス以来の古典経済時代では自由放任主義が原則となり、国家の干渉が最少限度に縮小した。第三に独占資本主義時代においては国家が弱小の個々の企業を整理して大企業に集中する過程を立法的にも権力手段的にも促進した。第四に計画経済的特徴の現れてゐる今日の資本主義段階においては、一方に社会経済的進歩をましながらも、他方においては将来の軍事的衝突を考へて、経済における潜在戦争力の建設または維持に力をそそぎ、破壊財の生産を停止することができないのみならず、むしろ進んでこれを

増大せねばならぬハメにおかれてゐる。それは労働階級の生活水準や小ブルジョアの生活を犠牲とするものであり、又ある程度においてブルジョアの政治力をも制約して行はれる。戦争経済の下にあつては官僚の権威が増大する。日本の官僚の非近代性や非能率性について多くの人は指摘してゐるが、しかし近代国家であればあるほど現代においては国家官僚の分量も機能も計画経済や戦争経済の必要からして増大する一方であつてその減少は望まれない。(だから日本においては官僚を近代化し能率化することが直接の問題をなすのである。)

資本主義経済の下において生産力が消費力を追ひこすことはしばしば述べたごとくであつて、過剰の生産力はどこかで使はれて生産力と消費力とのバランスを保たねばならぬものだが、再軍備のため戦争資財の生産が熱心におこなはれるのは、この過剰生産力を処理し失業を防ぐ窮策といふ意味があり、一九三〇年代にこの現象があらはれ、そして第二次大戦の一因となつた。破壊財の生産と蓄積が増せば増す程ただそのことだけが動機となつて戦争を呼びおこすこともなりうる。ソ連が国富の一八%を軍備に投じアメリカの軍事予算が第二次大戦後つねに全予算の二五%に及んできた状態はそのことだけで戦争を誘発するずゐぶん危険なことである。今後アメリカの軍事予算が一ケ年四百億ドル以上にのぼることは確実である。高度の軍事力を背景としたいはゆる武装平和 Armed Peace は真の平和をもたらすよりもむしろ戦争の危機を一觸即発的に含んでゐる。朝鮮戦争の勃発するや、アメリカ自身の経済も西欧経済も日本経済も更に戦略物資の買付地たる東南アジアの経済も、忽ち活況を

呈するに至り、工業生産が上昇し失業の波が急に退いて、一見結構なやうにみえるが、それらは明白に戦争で作り出された景氣で、次の一そう大規模な戦争を準備し、幾百万の大衆を戦火のなかに投ずる條件を作り出してゐることを意味する。強国間の大軍備はそれだけでも戦争を觸発する。平和時代には不景氣、戦争時代には好景氣と完全雇傭といふ悪循環を断ち切るには社会主義のほかにない。

5　国有化と計画経済。官僚的集産主義

第一次戦争当時からのことだが第二次戦争後に特に決定的にあらはれてきたことは、資本主義経済において十九世紀的な自由放任主義が抹殺され、計画経済的資本主義ともよぶべき新段階が登場してきたことである。近代経済は不可避に集産化へ向ふ。それは独占によつて下地が作られたのだが、二回の世界戦争がそれを促進した。戦後の各国において計画経済または経済統制の動向がいちじるしい。英国の労働党政府はかつてマルクスが同国について予想したよりもはるかに高い標準で国有化を実行してゐる。フランスにおいても炭坑や重要産業の国有化やモネ経済計画案がおこなはれてゐる。アメリカでもニュー・ディール政策以来の経済統制が戦後にむしろ強化され、朝鮮戦争以後に特にそれがいちじるしい。私有ではなくて国有、企業家の自由活動でなくて国家の経済計画、これらは資本主義の部分的な自己否定であるが、それは労働階級の自主的運動や社会主義をもつて基礎づけられてゐない。だからそれは官僚的集産主義 Bureaucratic collectivism とよぶのがふさはしい。それは

経済の集中化、したがつてその社会化としての進歩的意義を多少とも持つのであるけれども、かんじんの大衆の政治的経済的創意性によつて基礎づけられてゐないのだから真の民主的な社会化経済でない。それが真の社会化経済として成立することを流産せしめてゐるのは、労働階級自身の社会主義や労働組合運動が依然階級的な経済利益のなかを動きまはり国家や民族の大局的見地を忘れてゐるからであることを反省する必要がある。

計画経済のあり方は各国の自然的社会的條件の差違に応じて異つてゐる。自然資源が貧弱でこれを最も能率的に使用せねばならぬ国や、生産財や消費財のひどく欠乏してゐるのに急速に高度の資本蓄積を行はねばならぬ国、いまだ軽工業も十分発達してゐないのに急いで重工業を発達させねばならぬ国、自然資源と生産力との組み合せを急速に合理化せねばならぬ国等においては経済計画の必要が大きい。計画経済には一定の近代的生産力の発展してゐることや、統計其他の資料を準備する能力あることなどを必要とする。戦後のヨーロッパ諸国や、敗戦で荒廃した日独や、戦後急に植民地の地位を脱却した東亜諸国、自然資源と生産力のアンバランスのひどいソ連等は以上いづれかの場合に該当する。もはや純粋の自由経済にかへることはアメリカだつてできることでない。アメリカは以上のべた諸條件からしばられることの最も少い国で、生産力が豊かで個人の自由も最も保障されてゐるのだが、それでも生産、分配、貿易、消費等の方面で計画経済的特徴がしだいに増してゐる。かやうな戦後の計画経済的風潮は、進歩的な社会化経済への一動因であるけれども、戦争経済の必要がそれを促

進してゐるのである。

計画経済の一つの特徴はそのなかに完全雇傭政策を織りこむことである。それは必ずしも大衆の利益それ自身から出発したものでない。第一次戦争後からの構成的失業は資本主義の均衡を破壊する最大要因であるから、直に完全雇傭といふ高度の政策をもつてこれを解決しようとするもので、その目的は経済の均衡の維持にあつて大衆自身の福祉は目的でなくて手段である。完全雇傭政策は往々にして大衆のナショナリズムもしくは排外主義（ショヴィニズム）をかきたてる作用をする。完全雇傭を実現するためには、他国への侵略や戦争もやむをえないといふ心理が大衆の間にあらはれる。または戦争になれば完全雇傭になるといふ冒険的な心理もできる。平和時代には失業の危険、戦争時代には完全雇傭といふ悲惨な皮肉を資本主義の下ではまぬかれることができない。この大衆心理を悪用したのがファシズムである。だからファシズムはその指導者だけでなく大衆の間にも根をもつたのである。この危険は今日も消滅してゐない。労働階級の自覚やそのエネルギーを結合した自主的な運動がおこらねばこの矛盾を解決することはできない。

要するに戦後資本主義に現れてゐる一般的特徴は平和よりも戦争の要因をヨリ多く含んでゐる。

四、アメリカの第三次大戦々略構想と日本

アメリカは帝国主義の主要特徴たる領土拡張といふことには大して興味をもつてゐない。これはアメリカがそれ自身一の大陸をなし、資源豊富、その勤勉によつて築きあげた大生産力によつて国内において十分に世界一の生活水準を楽しみうるからである。それ故にせちからい外交戦においてはロマンチストの陥るやうな失敗を演じ、現実主義者たるソ連に屢ゝ出し抜かれた。尤もキューバ、メキシコ、ハワイ、フイリッピンなどの小国にたいして弄した政策史は多少とも領土拡張政策の特徴を帯びてはゐる。

アメリカの外交政策の主題は資本である。商品、資本、信用の輸出、原料地の確保、利子の取立て等については敏感で実際的で、そこにはロマンチストの俤が全くない。資本の発展のために地球支配の衝動にかられざるをえない。ただ二つの強国として残つた米ソ両国は当然衝突する必然にある。第二次大戦後、ソ連はアメリカを出し抜いて大軍拡を遂行し無遠慮な膨張政策をとつてきたが、アメリカは軍事的立ち後れを自覚して猛然として大軍拡に着手したのが昨年以来の情勢である。アメリカ国民の各層は悲愴な程に対ソ戦争の決意を堅めるに至つた。その戦略構想は日本にも直接に影響する。

アメリカ軍部の戦略構想は機密に属する故に我々によく分らぬのが当然である。しかし民主々義の国だからソ連では一言も許されないやうな戦略論が民間の識者から発表され、それがアメリカの戦略構想の動向を察知する手がかりとなる。それらの議論は往々アメリカ軍部に決定的影響を与へることがある。政府と民間とが協力して国の政策を決定するのはアメリカのすぐれたところだ。民間の二三

の有力人物の第三次大戦々略論を見よう。

ニューヨーク・タイムスの軍事記者ハンソン・ボールドウインは第二次大戦中アメリカ軍のとつた飛石戦術の創唱者で、対峙する敵を直接攻撃するのでなくこれを孤立させよといふ戦術を述べたその著書「勝利のための戦略」によつて一躍軍事評論の権威となつた人だ。かれが昨年四月の「フォリン・アフェアー」にのせた論文「二つの原子力世界の戦略」は第三次大戦のアメリカ戦略のありかたを示唆する。かれは、アメリカの原爆独占が終つたに拘らず、原爆を積んだ長距離爆撃機の観念がアメリカ国民にマジノ線のやうな安心感を抱かせ、戦争が勃発すれば迅速且つ安価な勝利が得られると考へてゐるのは非常に危険だと指摘してゐる。原爆はソ連の攻撃にたいする大きな防禦力たる意義を失ひはじめた。アメリカの陸海空三軍は第二次大戦当時に比して相対的に立ち後れとなり、民間防空設備も初歩的にすぎない。何より必要なのは戦略爆撃機にたいする観念の根本的変更だとかれは言ふ。前大戦後に戦略空軍部隊は原爆が攻撃の先頭に立つとの前提のもとに考へられてきたが、二つの世界が原爆を貯蔵するかぎり、この前提は正当性を失つた。今や戦略爆撃に関する概念はレーダーによる爆撃や夜間爆撃や四万呎の高空からの爆撃でなくて、正確な目標を低空から爆撃するものとならねばならない。即ち地域爆撃の代りに地点爆撃であるべきで、トンネル、橋、石油施設等を注意深く選択すべきであり、この結果、長距離戦闘機の意義が重大となつたとする。戦略爆撃の重点は今や長距離爆撃機から長距離戦闘機に移つたのであり、この戦術空軍部隊の再建が行はれねば西欧はソ連の数千の戦

闘機に葬り去られるであらう。航空母艦、機械化部隊、海軍兵力、民間防空、諜報機関、アラスカ及び沖縄の整備等は右の基本戦略に従属せねばならぬとする。

セヴェルスキーの「空軍こそ生存の鍵」(一九五〇年ニューヨークで出版、リーダーズダイヂェスト米語版九月号で紹介)は最も代表的なアメリカ的な戦略論であるやうである。かれはロシアに生れ後にアメリカに帰化した空軍技術家で、代表作「空軍による勝利」は劃期的な名著といはれ、十年前保守的な軍部によつて用心深くその思想が採用されたといふ。「空軍こそ生存の鍵」は徹底的な空軍第一主義で、大戦闘機 Battle Plane を中心とする空中機動部隊による全地球的制空権の確保がアメリカの生存の鍵だといふ思想に立つ。今日のアメリカの戦略の恐るべき誤謬の第一は空軍も陸軍も海軍も世界最強にしようとの考へで、これは最も重要な最も決定的な最も得意な軍事要素を集中、拡大、整備してこれをもつて敵を圧倒せよとの古来の戦略原則を無視するもので、アメリカがいかに富裕なりとも陸海空三軍を世界最強にすることはその能力を超えてをり、アメリカが最も正しい武器をえらぶとすれば空軍の外にないと彼は言ふ。陸軍でソ連を破ることはできない。又陸国たるソ連は海軍で封鎖しても痛痒を感じない。ソ連の優越性は人的資源、自然資源、地理的スペース等における量である。アメリカの優越性は技術にある。ここに技術とは科学、狭義の技術、工業知識、発明的天才、民主的融通性等を含むひろい概念で、今日のやうに最も機械化され最も高度に最大の力を発揮するのは技術の集中体たる空軍の外にない。彼は全地球的制空権の確保のためには第二次大戦当時の飛

石作戦や地域的制空権の如きは速かに放棄せねばならぬとする。

彼は地域的制空権の思想の抹殺と共に敵の大陸に近い遠隔地に基地をおく戦略も放棄すべきで、アメリカはアジアやヨーロッパに多くの基地を設けて自己の空軍力を分散すべきでなく、第三次大戦においては本国に巨大な空軍をもつ国が勝つだらうとする。ここで彼は、工業的自給力ある英国はまだよいが、日本は英国に似てゐるやうに見えつつ実は然らず、日本には第二次大戦当時保有したほどの工業力もないから、日本はアメリカにとつて空軍の戦略基地たるよりもむしろ荷厄介となると指摘してゐる。即ち我々の重大な関心をひく戦時日本放棄論がここにある。

彼は全地球的制空権をめざす空軍部隊の中心は爆撃機中心でなくて空中戦闘力に重点をおく空中機動部隊たるべきで、海戦と同様に敵の空軍力の殲滅が目的であり、小型の戦闘機(ファイター)中心でなく、海軍の戦闘艦(バトルシップ)に相当する大型戦闘機たるバトル・プレーンが中心でなければならぬと言ふ。従来戦闘機は小型たるべしとの思想があつたが、肉眼で飛行機を発見し攻撃した時代が過去となり、レーダーがこれに代つた今日、小型戦闘機の有利な条件は消滅し、多くの装備をもつ大型戦闘機の時代がまさに出現しつつある。航空母艦も潜水艦も不用になりつつあると彼は大胆に言ひ放つてゐる。一日六百哩を航行する船が一時間六百哩を飛ぶ飛行機の目をくらますことはできないし、潜水艦もレーダーの発達によつて海が透明に近いものになりつつあるからその唯一の長所たる隠れるといふことも不可能となりつつあると言ふのである。

日本にも読者の多いウォルター・リップマンが朝鮮戰爭勃発の数日前に書いた論文「日本はいかに防衛されるか」（六月十二、三日、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙掲載）には、戰爭の場合アメリカが日本を保持するのは戰略的資産でなく、桑港から横浜まで海路四千マイルあり、シベリアや中国を基地とする飛行機や潜水艦の襲撃にさらされつつ八千万の日本人を防衛し且つ食糧を供するのは非常の難事であり、かかる義務から解放されるのはアメリカの利益に合するとなしてゐる。アメリカの防衛線は日本から沖縄を経てフィリッピンに至るといふ議論は今は抽象論にすぎない。むしろフィリッピンに基地をおくことが戰略的に望ましい。しからば日本の防衛はいかにすべきか。第一は日本が攻撃された場合アメリカが自動的に参戰するといふ保障を与ふることである。それは侵入者を躊躇させる。第二は日本に信頼しうる警察隊と海上保安隊を組織させ一定の武裝自衛力をもたせることで、日本に近代的防衛兵器を与へるのはアメリカの義務である、とリップマンは言ふ。（毎日の林特派員の通信によると、リップマンはアメリカが大陸軍兵力を欧洲に派遣するのは不可能且つ不必要で、もしソ連が欧洲に侵略すればアメリカはソ連本土に激しい報復を加へ且つソ連がルールを占領してもそれを利用させないやうに破壞することを明かにして以てソ連の侵略を思ひとどまらしむべきだとの意見であるさうだ。日本防衛についての意見と同一根源に立つ考へ方である。）

以上三人の有力人物の所説からアメリカの第三次大戰々略の重点がほぼ察知できる。即ち、

(1) 空軍に主力をおき大型戰闘機を中心とする空中機動部隊によつて全地球的制空権をめざす。ア

メリカ本土の基地が堅確であればよい。世界各地に基地をおき空軍力を分散せしむべきでない。（全地球的制空権といふのは壮大な構想であるが、アメリカ大陸に立てこもるといふ新しい孤立主義の匂ひが感じられる。）

(2) 徹底的な技術主義に立ち、ドルと人命を節約し、アメリカ的生活水準を下げず、経済的に戰爭するといふ思想がある。（この空軍第一主義、人命節約戰術、極端技術主義が中ソの人海戰術に端的に表現されてゐるアジア的捨身戰法と戰ふ場合、どんな結果を生ずるか予断をゆるされない。）

(3) 欧洲第一、アジア第二といふ戰略が依然中心構想をなしてゐる。

(4) あまりに軍事技術的で、社会的経済的考慮や仮想敵国にたいする心理戰爭の考慮が乏しいやうに思はれる。（それではアジアはおろか西欧諸国すら動揺するかもしれない。）

アメリカがその利益と能力において第三次大戰の戰略を構想するのは当然のことである。その戰略において日本は大切な地点であるが、戰時に一時的にもせよそれを放棄する可能性のあることが以上の民間有力者の戰略論のなかにも見ゆる。日本の安全を国連の集団保障だけに依存するといふ論者はその無責任さを反省すべきである。日本を防衛し自由と独立を守る最後の且つ基本的な力が我々日本人のほかにないことを我々は自覚せねばならぬ。

たしかに日本の安全を国連の集団保障で守るといふのは公文書になつてゐないにしても国連の指導者であり日本の武裝の徹底的解除者であるアメリカが日本に与へてゐる一つの事実上の公約である。

しかしアメリカは日本だけに利害を無視してまで特別に力を入れる理由はなく、その第三次大戰の戰略構想の一環として日本の防衛の価値及び態勢を決定するものにほかならない。アメリカがその指導のもとに制定させた憲法の戰爭放棄規定をむしろ季節はづれのものの如く感じ出し、日本の再武裝、日米共同防衛協定、太平洋同盟等を提唱するに至つたのもこの理由からである。どこの国でも自国の利益を中心として対外政策を決定する。アメリカがその利益に応じて対日政策に変更を加へることがあつても不思議でない。日本もまた日本の利益を中心として国際情勢を判断し、自主性をもつてアメリカの提唱する諸問題にたいする態度を決すればよいのである。

日本の安全殊に第三次大戰の場合の日本の地位を考へるには是非ともアメリカの第三次大戰の戰略構想を参照せねばならない。

アメリカで日本再武裝論の盛になつたのは、第一には国連軍やアメリカ駐屯軍だけでは中ソの日本襲撃を食ひ止めえないといふ認識からである。朝鮮出動中のアメリカの七ケ師団は近代技術で裝備された精鋭中の精鋭だが、中共五十万の人海戰術には手を焼いてゐる。もし国連軍が朝鮮を撤退し日本が第一線となるやうなことがあれば、周囲一万海里の日本沿岸のどこから蟻のやうに中共軍がよぢのぼるか分らない。かやうなとき日本防衛はドルを要することが多く、バランスシートはマイナスとなるといふ危惧がアメリカにある。第二にアメリカの伝統的な西欧第一主義からいへばアジアは第二義的であり、戰略上、日本防衛にそんなに力を割けないといふ思想がある。ナナ通信のコンスタンチ

ン・ブラウンのやうに極東第一主義を唱へる人もあるが政府や世論をひきずる力はない。第三に西欧諸国の牽制がある。アジアで自由が亡べば西欧の自由も亡びるのは見易い道理だが、頭髪に火がついたやうに狼狽してゐる西欧諸国はアメリカにアジアを放棄させ西欧だけに注意を向けさせようとする。一九五〇年秋のトルーマン・アトリー会談で英国は朝鮮を捨てよと勧めたと伝へられたが、更に日本を犠牲とするくらゐは英国の考へさうなことだ。

もとより日本を失うた場合のアメリカの損失は非常に大きいから、アメリカは国連集団保障の原則を堅持するのみならず、ウォルター・リップマンのいふやうに、日本が中ソの侵入をうけた場合にアメリカは自動的に参戰するだらう。一九五〇年九月の英米佛三国外相会議は西独が攻撃された場合これを三国にたいする攻撃とみなして侵入者に宣戰すると決議したが、同様の原則が日本にも適用されるであらう。日米共同防衛の成立したあかつきには特にさうであらう。これはアメリカの大戰々略からみて、日本の工業力や労働力や太平洋岸の潜水艦基地を中ソに与へることはアメリカの忍びえないところだからである。

しかし以上のべたことからして万一の場合には〃保障すれども防衛せず〃といふ有難くないことが生じうる。国連の集団保障や日米防衛協定や中ソの日本侵入の場合のアメリカの自動的参戰などは侵入者を前以て躊躇せしめるであらうが、アメリカは日本防衛だけに専心するものでないから、場合によつてはかつてロイヤル元陸軍長官の口走つた戰時日本放棄論もアメリカの大戰々略のなかから出て

くる可能性がある。日本の防衛はまづ日本人自身の自衛の意志と力を第一条件とするものであることを我々は改めて認識しておくことを要する。

五、スターリン帝国主義の興起

1　帝国主義の意味

第二次世界戦争のすんだ後に世界には真の強国はアメリカとソ連の二つだけしか残らなかつた。ソ連はアメリカを資本家的帝国主義と呼び新世界戦争を準備してゐるとののしり、アメリカはソ連を赤色帝国主義と名づけ新戦争の挑発者だと非難してゐる。戦後間もなくいはゆる冷い戦争がはじまつたが、朝鮮戦争をきつかけに小型の熱い戦争が世界のことかしこにはじまりかけてゐる。実際上、今日において戦争能動者たりうるものは米ソ両国のほかにない。もちろん両国とも戦争のために戦争をやるのでなく、その生活原理及び実力からして、戦争におしやられざるをえない関係にある。アメリカは市場と資源地の獲得のために、ソ連は領土乃至勢力圏の拡張政策のために、最後には戦争手段の行使をも辞しない決意と実力をもつ。

さきにあげたエメリー・リーヴスの著書「平和の解剖」（一九四六年）は二十五ケ国語に飜譯されて大センセーションを呼び世界連邦運動の口火となつた有意義な本だが、戦争の原因を民族国家の偏

狭主権性に集中させて、強国の帝国主義を解剖することが少い。たしかに諸国家の排他的主権は経済や技術の世界化傾向と背馳しそれが戦争の原因となるけれども、諸国家には強弱の差があり、小国はむしろ戦争を恐怖するに反し、強国は膨脹欲にかられ、更に世界帝国を欲望するにいたり、それが最大の戦争能動者となる具体的事実の分析が大切である。そして米ソ両国のうち、どちらがより帝国主義的であるか、即ちどちらが次の戦争のより烈しい挑発者であるか、といへば、それがソ連の方であるのは今や世界の耳目に明かである。領土拡張といふ帝国主義本来の特徴はソ連の方が濃厚である。今日世界的規模で戦争を行ひうる国はソ連の外にない。アメリカはその主導権のもとにといふ意志を捨てないにしろ、伝統的な民主々義の衣裳を捨ててをらず、その世界帝国的構想を平和的手段で実現しようと欲してをり、戦後には軍需工業の平和産業への転換をやつて、そのため軍事的にはソ連にくらべて劣勢となつた。しかし朝鮮戦争がはじまつてから驚異すべきスピードで大軍拡をはじめた。ソ連は第二次大戦後も戦争体勢を解かずに孜々としてその産業能力の大部分を拡張に向け、且つ民主々義の寛容もしくは間抜けを利用して、その対外政策をがむしやらな領土又は勢力圏の拡張に集中して東欧を既に衛星国化し、更にアジアを勢力圏にひきいれる工作に怠りなく、世界革命の大義名分(?)によつて各国共産主義者をその第五列たらしめてそれぞれの国家への反逆にかり立ててゐる。

ソ連が第二次戦争で獲得したほとんど不抜の大国的膨脹に比すれば、アメリカが戦後に獲得した世界経済への指導権はずつと不安定である。元来アメリカは植民地支配に興味をもつてゐないし又植民

地支配の古典的形式もインドやビルマの政治的独立、エジプトやアラブ世界が英国をもはや主人と仰がなくなつたこと、インドシナやインドネシアの政治的半独立にみられるやうに、戦後に解体しつつある。英国はもはや第二級的な帝国主義権力に成り下り、フランスやオランダも昔日の植民帝国の俤がない。アメリカ資本の威力は疲弊した西欧にたいしてずつと増大した。植民地奴隷と主人のやうな関係でないが、領主と臣下のやうな関係が経済的に成立してゐる。アメリカ国内の経済政策では伝統的な自由経済思想とケーンズ的なニュー・ディール思想が対立してゐるが、対外的には戦後資本主義の新段階に対応して少くとも経済的膨脹主義であり、それが政治に反映して軍備の強化、世界至る所の軍事基地の設定、水爆其他の超科学兵器の研究となるのであるが、しかしソ連のやうながむしやら性はない。世界に散らばる六十ほどの政府は米ソ両国のいづれかの陣営に磁石に引きつけられるやうに組み入れられる。かうした強国主義の原始的な活力の再勃興が第三次世界戦争の不安を刻々増大する。

マルクス主義経済学は、帝国主義とは独占資本の政策なりと説明するが、厳密な政治学的用語としての帝国主義は、そんな余りに経済に偏した狭い概念規定で律することができない。近代の巨大な帝国主義の現象は経済的要因の外に地理的人口的民族的其他の要因がからみあひ、宗教さへその要因となることがある。また帝国主義そのものは近代になつて初めて現れたものでなく古代ローマ以来強大な政治的国家の存在と不可分のものである。近代の帝国主義は帝国主義一般の近代的姿容に外ならな

い。帝国主義の特徴を数へてみると、その第一は強国が自国以外に領土や勢力圏を拡大し自国を中心とする一の世界帝国を形成しようとする衝動にかられることにある。それが古来いくたびか成立し且つ消滅した世界帝国の内在的促進力であつた。第二の特長は自由よりも権力が原理であることである。その政治形態は反民主々義的な独裁政治である。個人は全体の前に全く無力である。法律をじゆうりんすることが容易でなければ独裁政治は成立しない。その権力は政治的に人を支配する道具であるばかりでなく、真も善も価値も美も恋愛も一切がこの権力の判断と支配の下におかれる。第三の特長は戦争が根本手段となることである。強大な軍事力の装備が何をおいても努力の目標となる。したがつてその国家は戦争体制の国家である。軍事的勝利が常に善であり正義であり、敗北は常に悪であり不正である。第四の特長は経済的優越特に他民族の労働力を奴隷化しその生産物を搾取することが目標となることである。他民族にたいして徹底的に無慈悲である。国家内において個人に無慈悲である独裁政治が他民族殊に弱小民族に友愛的でありうる道理がない。弱小民族は猛獣の前の餌食のごとく見なされる。

以上のことは古来の諸々の強国が追うてきた夢であり、強力が一応それを実現しえてもやがてヨリするどい矛盾が内外から群がりおこつて短い時間の間に世界帝国を亡ぼしてしまふ。盛者必衰の道理を世界帝国の運命の如く鋭く示すものはない。強国のこの緊張と弛緩の法則は今日も形は異つてもその作用をやめない。

2　スターリン帝國主義の諸形象

スターリンは史上稀にみる大独裁者である。その支配する今日のソ連はレーニンの指導した革命時代及び一九二四年頃にいたるまでのソ連とは本質的に異るものがある。今日のソ連、殊に第二次大戦後のソ連はスターリン的帝国主義といふ特異な形象を生みだしてゐる。

(イ)　レーニンよりの退却。旧ロシア的な領土拡張欲

第二次大戦に最大の獲物をえたのはソ連であつた。それは旧帝政ロシアのどの時代とも比較にならぬほどの大膨脹をした。旧帝政ロシアは貪慾な猛獣のやうに領土にたいする食慾が旺盛で、中央アジアの弱国を殲滅して自国に併呑し、イランやトルコやバルカン諸国にまで手をのばした。その旧ロシア的領土拡張欲がスターリン統治のもとで目をさました。東欧諸国は今日衛星国化してゐるがそれがソ連領となつて併呑されるのは単に時期の問題にすぎない。東独も衛星国化した。ポーランドにもルーマニアにもチェッコにもハンガリーにもソ連赤軍の将校や士官が軍事的指導権をにぎつてゐる。ユーゴ、トルコ、イランにたいしてもソ連赤軍は虎視眈々としてゐる。西欧とロシアとの昔ながらの不和感情は今もつゞき、大軍を擁するソ連の食指は西欧の工業地帯に向つて動く。日本からは南樺太と千島列島をとりあげた。満洲がソ連の束縛を脱するのはもはや不可能に近い。しかし朝鮮ではソ連は藪をつゝいて蛇を出したやうな失敗をした。ソ連は北鮮を使嗾して南鮮を占領させ、一の既成事実を

234075

作りださうとして失敗し、更に中共の大兵力を出動させて一時その人海戦術をもつて国連軍の心胆を奪つたが、アメリカ軍の近代兵器のため無数の死傷者を出し、中共の内政に破綻を生ずる危機を生みだしてゐる。アメリカがあれほど自国の青年の血を流した朝鮮から安々と引きあげることはないだらう。朝鮮をにぎるものは満洲に迫りうる重大な足場を獲得したことを意味する。日本は朝鮮をにぎつて満洲に進出した。アメリカが朝鮮からソ連兵の駐屯する旅順、大連、奉天へ襲撃することが今後容易となつた。更に朝鮮からウラジオを衝き、更にシベリア・ルートからヨーロッパ・ロシアに向ふこともアメリカとしては考へるだらう。かゝる戦略をアメリカに与へてしまつたのはソ連当局者の重大な誤算の結果である。しかし転んでただでおきないソ連である。由来ロシアの政策は東に重点をおくときは西に軽く、西に重点をおくときは東に軽るかつた。東にこの容易ならぬ失敗をしたソ連は今後西欧の攪乱政策に転ずるかもしれないが、西欧では西欧統一軍の計画が着々進行中だからそれも容易でない。ソ連は今日守勢的地位に追ひこまれてゐる。

シュムペーター教授は、ロシアが社会主義国であるのは問題でない、ロシアが依然としてロシアであることが問題なのだ、と言つたことがある。（同氏「資本主義、民主々義及び社会主義」一九四七年第二版三九八頁以下。）この言葉は当つてゐる。ツアール時代のロシアは西欧より恐怖の目を以て見られてゐた。鉄血宰相といはれたビスマルクでさへロシアに手を出すことは禁物だとその自伝のなかで書いてゐる。マルクスもロシアの反動政治がなくならねば西欧の革命は成就しないと信じ、しばし

ばロシアに対する攻撃戦争をすら唱へた。レーニンはツアーリズムといふ反動の怪物を倒すことがロシア・プロレタリアートの世界史的任務であることを一九〇二年の著書「何をなすべきか」のなかに書いてゐる。今世紀の初めにヘーグ万国平和会議を主唱したツアールはすぐその後でトルコに対する掠奪戦争をおこなつた。他民族に対する無慈悲な抑圧と貪慾なる領土拡張、その国内における必然的な裏付けとしての死刑と流刑とのテロ政治、忍従的な大人口の悲惨な生活、これらの旧帝政ロシア帝国主義の特色であつたものは、一応一九一七年のレーニン革命で刈りとられた。しかし一国一国民がその歴史のなかで作りだした伝統は政治や経済の体制が変化しても一朝一夕に消滅するものでなく、執拗な力でよみがへらうとする。

スターリンはレーニンのやうな理想主義者でもなければ世界政治に通じた国際主義者でもない。彼は徹底した現実主義者であり、ロシア一国のみに生活した西欧嫌ひの土着人であり、その意志はアジアの遊牧族の首領（ジンギス汗やチムール）の如く強烈で、いかなる無慈悲なことも実行する人間であり、利害の打算に敏感であり、いかなる手段をもつてしてもできうるかぎり急速にロシアの近代化を実現し西欧に追ひつきそれを追ひ越さうとする。しかもこの近代化を旧ロシア的な中世的方法で実現しようとする矛盾をも押しとほさうとする。彼には無限の組織的精力や果断な意志や実行力がある。彼は歴史の生んだ大独裁者の一人であり、その目的のためには師匠レーニンの原則をふみにじるなどは何でもない。

たいていの人はスターリンはレーニンの忠実な弟子であり、今日のソ連はレーニン革命の継承発展だと考へてゐるがそれは正しくない。レーニンはツアーリズムを倒すといふ大事業をした。それは彼のいふやうに世界史的な意味をもつたことだつた。レーニンはまた忠実な国際的社会主義の信奉者だつた。彼のつくり出した組織は社会主義の名に値する。彼の唱導したプロレタリア独裁はマルクス説のロシア的発展であるけれどもなほその原型たるマルクス説のもつた西欧色を失つてゐない。しかるに今日スターリンの指導するソ連の国内政治も対外政策もレーニン的であるよりもむしろ旧ロシア的特長の方が強い。フランスやアメリカにゐるトロツキストは、スターリン体制を以て「レーニン革命に対する反革命だ」と言つて非難してゐる。それほどでないにしてもレーニンの理想主義的情熱や国際主義的忠実が消失してゐるのは蔽ふべからざる事実である。スターリンの唱へる一国社会主義なるものは社会主義、国家、国民の三つの要素の結合物だが、その中心をなすものは国家で、社会主義は目的でなくて手段にすぎざるものとなつてをり、個人は国家といふ大機械への隷属物にすぎず、その国家は力殊に軍力を最大要素とする旧ロシア的なものであり、むしろ十三世紀より数百年に亙つてロシアを支配した蒙古人や其他のロシア周辺の遊牧族の原始的な力の信仰が支配してゐる。ソ連共産主義における暴力主義はマルクス的唯物論の帰結として生じたものでなく、アジア蛮族の力の崇拝に似てをり、個人の人格的強さを基礎としたものでない。ロシアの史書には、蒙古人がスラヴ人に向つて「奴隷か、死か。いづれかを選べ」といふ酷烈な態度で暴力支配を徹底的に行つたと記してゐる。こ

れがいつの間にかロシアの政治的伝統となり、民族心理となつた。単純なる力の信仰を基礎にしてゐるから、ヨリ暴力的なものにたいしては狡猾にこれを避け、敵手が力弱まるとみればたちまち残忍な一撃を背後より加へるものであることはスターリン外交の神髄であり、日本の関東軍が満洲に頑張つてゐた際には甘言を以てあやつり、原爆によつて日本の戦力の喪失が完全に証明せられるや忽ち満洲朝鮮に怒濤の如く侵入し一挙に朝鮮内にまで入り三十八度線以北をその勢力圏にくみ入れた如きはその一証である。

西欧人はこれまでロシアをアジア的野蛮の国として軽蔑してきた。西欧文化とスラヴ文化とは異質的である。西欧文化が十六世紀以来作りだした業蹟は真に偉大だつたが、今日ではそれが下り坂になつてゐる。西欧諸国がソ連の脅威のまへに右往左往し、一にも二にもアメリカにすがりつく非自主性は遠い東洋からみても気の毒の感じがするが、それだけ西欧文化はたそがれの時期に入つてゐる。しかしロシア固有の独裁主義や政治の伝統や暴力主義や神秘主義がこれに代るのであつては、世界文化の後退をまぬかれない。どの型の帝国主義であつても世界の迷惑になるが、ロシア的伝統をたぶんに含んだスターリン帝国主義でも迷惑なのである。いなそれはアメリカ以外に競争者もありえないほどの大兵力を有するだけに、その脅威は深刻だ。それは民主々義のもつやうな寛容性の一片もない露骨な力主義である。

(ロ) ここでも官僚的集産主義

ソ連は社会主義の国だと簡単にあたまから極めてかかる人が多い。又少くともソ連は資本主義に反対してその打倒をめざす国であり、且つ世界平和の擁護に最も努力する国だと信じ込んで、これを擁護せねばならぬといふ気分をもつ左翼労働者が各国に少くない。人はなにらかの幻想や神話をもちたがる。ソ連は果してかやうな幻想や神話に価する社会主義の国であらうか。

社会主義は単純な形式問題でない。「生産手段の公有は社会主義を意味する」といふ公式は余り簡単すぎる。政府が生産手段を所有することは確かに社会主義の条件である。併しその「政府を誰れが握つてゐるか」が根本問題である。今日のソ連政府を現実に握つてゐるのは人民でなくて共産党官僚である。主人で主権者である筈の人民の自由は極度に制限されてをり、奴隷の一形式としての強制労働までがある。スターリニズムが資本主義に激しい敵意をもつてゐるのは事実であるが、それが資本主義に代つて作り出してゐるものは、生産手段公有の形式をもちつつも、実は官僚支配の国家である。

今日のソ連の経済体制もまた戦後の資本主義国家と同じやうに官僚的集産主義の名でよぶことがふさはしい。高度資本主義国では経済の集中化がいはば自然に成立したが、ソ連では人為的に、気短かに、強権をもつて実行せられてゐる。元来、社会主義国家の生産手段の公有は、人間による人間の搾取を除き、広汎で積極的な人民のデモクラシーによつて基礎づけられた、生命ある社会化経済の道を開くはずのものであるが、今日のソ連ではかやうな進歩面が却つて抑圧されてゐるといへる。この特徴はソ連だけでなく、その衛星国になつた東欧諸国の産業国有や計画経済にもみられる。レーニンは

大衆の創意性を通じての革命を何よりも重んじたが、今はソ連でも東欧でも大衆の創意性が逆に抑へられ、政治は党官僚や組合官僚や軍隊や警察隊のもとで運営されてゐる。

ソ連はたしかに資本主義に反対してゐるが、強国的拡張政策においては独占資本の国と競争し合つてゐる。世界平和の擁護者といふのは明かに事実に反する。巨大な軍隊を擁し、東欧より中国に及ぶ広汎な世界的戦争体制の確立に努力し、世界人権宣言の如き無害なるものにも参加を拒否し、軍力を以てする世界支配といふ原始的な構想に立つてをり、世界平和の脅威となること此国の如きは今日の地球上に存在しない。

ソ連は産業革命の真最中なのだといふ見方も成りたつ。英国をはじめ西欧諸国が十九世紀中に完了した産業革命を旧ロシアはまだ経過してゐなかつた。ロシア社会の近代化のためにこの革命は絶対必要である。政権は政治革命によつて短時間に奪取することができても、農業国から工業国へ転換することは安々とできない。それは経済法則に従ふ。長い時間が必要である。これをできうるかぎり短時間に強行しようとするのだから無理がおこる。労働編制における強制性、政治的自由の剝奪、弱小民族への冷酷、資源の渇望等が不可避となる。これがスターリン的独裁政治とその帝国主義の一つの重要な動機であり、ここで自国の発展のために他国を犠牲にする無慈悲なソ連の自己中心主義が成立する。各国の共産主義運動もソ連の道具にほかならなくなつてゐる。

ソ連の産業革命——農業国から工業国への転換——は大きな歩度で進んでゐる。しかしその完成は

まだ二三十年かかるだらう。その成功の暁は、英国の如く工業は繁栄したが農業は衰頽したといふ型の産業革命でなく、アメリカの如く大農業国でもあれば大工業国でもあるといふ型であるだらう。その際には中世的な独裁政治の緩和される物質的基礎ができる。しかしその際、ほんたうにソ連は民主主義の国となり他民族に友愛をもつてのぞむに至るだらうかといふに必ずさうなるとは予想できない。力を以てする世界国家への渇望はその民族的伝統からして容易に消滅しないだらうし、官僚的に運営される集産主義は一そう強いナショナリズムを培養するかもしれない。

(ハ)　一大軍営的な強権国家

唯物史観では経済が一切を決定するはずであるのに、今日のソ連ではむしろ政治が一切を、したがつて経済をも決定する。その政治は権力偏重の極として当然軍事が最高原理となる。今日のソ連において政治そのものが軍事的性格をもち、経済も軍事的規律にしたがふ。だから今や社会主義は目的であるよりもむしろ強国建設のための手段となつてゐる。目的は軍隊的な強国の建設だといふ観を呈してゐる。工業は近代社会にみる能はざる奴隷労働——強制労働——を伴うた峻厳な軍事的規律のもとにおかれ、軍事的重工業の発達に全力をそそぐ。農業では強圧的なコルホーズ化が断行せられた。工業の重点は軍事工業である。常備軍四百万、戦時二千万の巨大陸軍が一大消費者である。これでは一般国民の生活水準は低下せざるをえない。労働者は近代民主社会における労働者の自由——労働組合、罷業権、団体協約等の自由——をもたない。

ソ連は一の軍国である。この軍国の中心をなす共産党自身がまた最高の軍隊的規律を以て貫かれてゐる。レーニン時代における党内民主々義が完全に死滅したことは一九三九年以来の長きにわたつて党大会の開催されないことでもわかる。大元帥にして党書記長たるスターリンは古今に数少い大独裁者である。党の最高機関たる政治局十四名のメンバーのうち、革命以前からの政治局員はスターリンただ一人であり(革命以前からの他の政治局員はスターリンによつて打倒され一掃された)現在スターリン以外の政治局員はすべて彼の認可によつて就任し且つその地位に留まりえてゐるものである。レーニン時代では政治局の決議は投票を以て決定された。ブレトリトヴスク条約や賃銀制改革に際してはレーニンへの賛成投票が少くて容易に決定できなかつた程だが、スターリン時代になつて政治局の決議方法は「満場一致」形式となつた。多数決は民主的だが満場一致は独裁政治特有のものである。スターリンの意志が一切を決定する。だから党の決定は党員の総意を盛つたものでない。党員は上部の命令を機械の如く実行すればよいのであるし、又実行せねばならない。鉄の規律とは個人の意志を何らの価値なしにすることを意味する。「前衛」とは知性が高度で自発力が豊かである人であるはずであるのに、ソ連の党員は精巧なる機械の部分品であればよいので、それ以外は許されない。もし失敗すれば、除名だけでなく、強制労働所に送られ又は生命の危険がある。一旦失敗した者はたとへ復党をゆるされたとしても何かの機会に更に烈しい制裁をうける。党員にたいする峻厳な信賞必罰は、近代的政党にみることのできない軍隊的なものである。独立採算制に成功しなかつた工場長や労働組

合幹部がサボタージ又は反革命の名によつて十年近い刑罰に処せられることはプラウダ紙等にザラに出てゐる。

独裁政治に特有な秘密警察やスパイ政治も革命以前の非合法運動の経験を活かして遺憾なく用ひられてゐる。六十万のMVD（国家保安隊）とMGB（秘密警察）とは人民恐怖の的で、それから摘発されると政治局員も地位が安泰でない。

青年や少年にたいしては「母なるロシア」といふ言葉で偏狭愛国心をあほつてゐる。ソ連は天国で資本主義国は野蛮な地獄の国だと教へ込む。青年男女は皮相な唯物論的教育によつて神をブルジョア的偽瞞と思ひ込んでゐる。文明国たるソ連が野蛮国たる資本主義諸国より侵略されることを防ぐだけでなく、進んで後者を征服するのは神聖な人類的義務だといふ顚倒した観念までを培養する。強烈な政治主義が貫いてゐる。政治の最も原初的形態たる軍国的支配と対外的征服欲が新しいかたちで再現してゐる。ソ連の資本主義諸国にたいする猛烈な対抗体勢はいくぶん古代や中世の遊牧族が当時の頽廃した文明諸国を脅かした形勢と似てゐる。しかし英米諸国はゲルマン蛮族の襲撃をうけた末期のローマや、蒙古兵の鉄蹄にふみにじられた宋末の中国社会のやうに堕落してをらず、その物質的生産力や民主々義体制は単純な力の原則によるソ連の世界征服計画にブレーキをかける。その故にソ連の闘争心は一そう猛然となり、その戦術は過去のあらゆる征服者の経験を綜合した最高の狡智の集中となる。かうしてレーニンの理想では世界最初の社会主義国として他国をリードするはずだつたソ連は、

スターリン時代に至つて世界一の軍力を備へて世界征服をめざすところの古来珍らしくもない強国自身を目的とするやうになつたのである。

(二) 社会的階層別の成長

資本主義社会では生産手段の私有が階級の根源となつてゐるが、ソ連には生産手段が公有なのだから階級もまたなくなつたと信じてゐる者が多い。しかしこれは擬制にすぎない。私有財産にもとづかないところの、他の社会的区別が急速に生長してきてゐる。

その成立理由は三つある。第一は権力的地位の差違である。権力の中枢にあるか、その周辺にあるか、又は圏外にあるかによつて、社会上における地位や、そのうける利益について大きな差違が生ずる。純粋な政治的理由が人間の社会上の位置を決定する有力な証拠である。第二は国家の機関内において占める地位からである。ソ連においても国家が社会生活の組織者として大きな役割を演じてをり、それに参加する官僚や将校はしぜんに優越した階級を形成する。第三は生産における技術的差等である。ソ連において人は最大の物質的能率を発揮せねばならない。技術者が優遇され、能率の高い労働者は普通の労働者よりはるかに高い報酬をうける。

ソ連では生産手段の所有が階級の基礎となるといふ資本主義社会の現象はない。しかし以上三つの無体財産がやはり階級的区別の基礎となつてゐる。今日のソ連社会の階級構成は次の系列をなす。第一はソ連共産党政治局メムバー十四名。これが今日のソ連の最高貴族層である。第二はソ連政府各省

大臣約四十名。これが前者に次ぐ貴族層である。第三は共産党高級役員である。党員五百万もおのづから一般民衆よりは高い地位を占めてゐる。第四は国家の高級官吏である。秘密警察の指導者や赤軍将校は特に優遇される。第五は科学者、技術者、芸術家等の専門家の層である。第六は能率の高いいはゆるスタハーノフ的熟練労働者である。生産標準（ノルマ）を超過するにつれて賃銀が飛躍的に累進する。金属加工業者についてみると次の表がある。

生産標準（ノルマ）超過	賃銀累進率
一%——一〇%	三〇%
二%——二五%	五〇%
二六%——四〇%	七〇%
四一%——以上	一〇〇%

第七に以上のほかにあるものが一般大衆である。労働者は全人口の五分の一、農民は全人口の約半分を占めるのであるがその収入も生活水準も右の六つに比すれば非常に低い。第八に奴隷といふべき強制労働に服する人があり、その数は一千万にのぼるといふ。ソ連では強制労働といはず矯正労働といふのだが、政治犯（にされるもの）や軽微であつても窃盗犯などが集団的に労働キャンプに送られる。矯正労働法によると、裁判によらず、行政処分でも強制労働所に送りうるとある。自国人をこんなに安く取扱ふのだから、日独の捕虜をただでこき使つたことなどはソ連の常識では当然のことで、

それを騒ぐ日独や国連諸国が怪しからぬといふ論理になる。

かうした政治的地位の差異や収入の差異はしぜん富の懸隔をも生み出す。生産手段の私有制度がないのだから、富の差違といつても大したことはない。その差異の存在の一つの証拠は貯蓄の出現——貯蓄銀行への貯蓄、政府公債への投資——である。ベアード教授の「政治の経済的基礎」（清水幾太郎譯）によると、一九四四年末には一、一七二億ルーブルの国債未償還額があつた。一九四〇年には三万七千の貯蓄銀行に七〇億ルーブルの貯金があつた。一人で国債七十万ルーブルくらゐを所有してゐる者がある。ソ連の所得税は年収一、八〇〇ルーブルに一二〇ルーブルを課税し、収入の増加につれて税率が累進するが、年収二万四千ルーブル以上にはもはや累進課税しない。英米諸国で高率の累進所得税が行はれ、最高収入に九七％に及ぶ高率課税があるのとは全然逆である。又相続税が存在しないから、両親の富はそのまま子に伝はる。ソ連当局者は経済建設にたいして貨幣をテコに使用してゐるが、十年目くらゐに平価切下などを弄してせつかくの蓄積を無効にする手段をとる。しかしそれでも少くとも物的財産の蓄積（殊に相続税による）は可能である。

第三次世界戦争がはじまつて原爆その他の科学兵器が遠慮なく使はれ出したら人類のうける物質的破壊や人命の損失は想像を絶するものとなるだらう。この戦争をやめる最も簡単な方法は、一方でアメリカが資本主義を修正して社会主義方式をとりいれ、他方でソ連が独裁政治や領土拡張政策を少くとも緩和することにある。しかしこれはなかなか実現しさうにない。

今日の世界政治では平和要因よりも戦争要因の方が多い。世界の人々は、まだ小さくとも、平和要因をできるだけ大きくして、戦争要因を抑へてゆくべきだ。大衆の平和欲求感情はどの時代よりも大きい。強国の横紙破りの政策を真に抑へるのはこの大衆の平和感情を組織化してゆくのが一番大切だ。

スターリン帝国主義の歴史的運命はどうであらうか。力に頼る者が力によつて亡ぶることは世界史の教訓である。どの民族も自主性の要求をもつてゐる。一時強国に屈することがあつても間隙をみて抵抗を試み自立を達成しようとするのは民族の本能である。東欧衛星国は力づくで抑へつけられてゐるけれども、既にユーゴがソ連の支配を脱した如く、いつかはソ連の束縛を脱しようと欲してゐる。ソ連が西欧征服戦争に直に着手しえない理由の一つは東欧諸国を十分信用できないからである。西欧文化は黄昏期に入つたとはいへ、西欧人の精力はまだ磨滅してしまつてはいない。アジア人は文化程度が低くても自主性の要求は強烈で盛期の西欧植民政策時代にも心からこれに屈従することがなかつた。ソ連の新しい帝国主義政策が世界の至るところで障壁につき当ることは今後当然おこるだらう。ソ連国内の民衆が自由を欲するに至ることも将来の課題である。スターリン的帝国主義の前途は決して明るくない。さりとて資本主義の将来も歴史的にはきまつてゐる。次の新しい社会——社会主義社会の出現は必然性をもつてゐる。

社会主義は天から降つてこない。世界資本主義やスターリン帝国主義の克服は困難な課題であつても、世界の勤労者が力を合せて立ち向ふべき人類的仕事である。

六、ソ連の第三次大戦々略と日本

第二次戦争において、旧ツアーリズム時代をはるかにしのぐ領土および勢力範囲の大拡張をしたソ連は、米英その他の西欧陣営が戦後に軍備を縮小して、やれやれといふ気分で平和をたのしんでゐた際に、依然として戦争体制をゆるめず、かへつて軍拡を遂行し、既に昨年末において戦前戦力の五〇パーセントを上廻る拡張をとげた。第二次大戦の終戦の頃アメリカの軍事諜報局のソヴィエット経済部長だつたエルワース・レイモンドがルツク誌にのせた研究によると、ソ連の戦車生産高は一年六万台、一九五五年までには九万台となると推定され（アメリカの第二次大戦中の一年最高生産高は八万六千台）、航空機は一年八万台、一九五五年までに十二万に達すると予定され（アメリカの第二次大戦中の最高生産高は九万六千台）、大砲は一年二十四万門、一九五五年までには三十万門になる予定である。（アメリカの第二次大戦中の最高生産高十二万五千門）。レイモンドは一九五五年までには鋼鉄をアメリカの第二次大戦時生産高の五二％、戦車一〇二％、航空機二八八％、機関銃一六二％、小型兵器二三四％、弾丸一一一％を生産できるやうになるだらうと予想してゐる。かやうに強大なる赤軍を背景として、政治的には戦後着々として東欧諸国を衛星国化し、その鉄の爪を以て東欧をもつかみ、鉄のカーテンを西欧に向つてひろげつつある。更に中共の中国支配はソ連にとつて巨大な羽翼をえた

に等しい。

今やソ連の軍事体制は防禦的でなくして、全く積極的な攻撃性に立つてゐる。現実主義者たるソ連指導者は国家間において強大な軍力を有するものが常に勝利者だといふ一方的教訓にとらはれ、軍力をもつてそのいはゆる世界革命を遂行する決心になつてゐる。各国共産党の戦術は一切ソ連の第三次大戦の戦略に従属せねばならぬ。かくして現在の共産主義は理論や社会運動の域をこえて露骨な軍事共産主義の段階に入つてゐるのである。ストックホルム平和宣言やスクーリンの周期的な平和攻勢の如きは、アメリカに対する科学兵器の劣勢をカヴァーする目的や、勇気を喪失して動揺しつつある西欧諸国を攪乱して、敗北主義的気分をうゑつける目的のために行はれるものであつて、真の国際平和を目的とするものでない。

アメリカのバーナム教授はその「世界支配の闘争」（一九四七年）のなかで、ソ連本国を中心としてその外側に五つの地帯（ゾーン）を考へてそれぞれに異つた政策をとつてゐるとなす。ソ連本国では五ケ年計画の遂行、原子兵器の完成、陸海軍の整備と訓練等を以て臨んでゐる。外側の第一番目の地帯は自国編入地域で（ポーランド、千島、樺太、蒙古等）ソ連と同一の政策をとる。外側の第二番目の地帯は衛星国地域で東欧東独がこれに当り漸次第二地帯に吸収する政策をとる。外側の第三番目の地帯は中間圏で（フィンランド、イラン、イラク、トルコ、スカンジナビヤ、西独等）で、威嚇や敗北主義の宣伝でかれらを動揺させ、やがてその衛星国化をねらふ。特に西独は最大の目標で、ドイツの技術と

ロシアの労働者を結合することはレーニン以来の夢である。外側の第四の地帯は反ソ的であるが共産党の活動も相応に盛んな地域で（フランス、イタリー等）、ここでは傀儡政権樹立の方法でなく、共産党活動に有利な政治的条件を作り出し、親ソ傾向を助長し、友好的な通商条約を締結したり、民主々義を認めて共産党員を連立政権に参加させたりする。外側の第五の地帯はイギリス、アメリカ、英連邦等の対立圏で、ソ連の力がほとんど及んでをらず、むしろ反ソ的傾向の深刻な国々である。これに対しては極力滲透し、戦ふ前に弱体化させる方法をとる。このために秘密警察、軍諜報機関、外人、旅行者等を利用する。バイナムがかやうな分類をした一九四七年当時にくらべると情勢の変化もいちじるしいが、ソ連の対外政策は大体なほかやうなコースをとつてゐる。

一九四九年に中共が中国を支配下におくに至つたことは、アメリカにとつては戦はずして一大敗北を喫したにひとしく、逆にソ連にとつては非常な獲物をえたことを意味する。ソ連の世界戦略は具体性を帯ぶるにいたつた。今日の中ソを中心とする国際共産主義勢力の世界戦略は、ヨーロッパにおいては、ドイツのルールライン地帯の重化学工業の奪取を中心として、スカンジナビヤ半島の精密工業を支配し、ヨーロッパにおいて唯一の手ごたへある敵手たる英国を降すことをこころざす。西欧を手に入れることはアメリカを打倒する第一条件の成功を意味する。アジアにおいては東洋のルールたる日本を手中に入れ、西に向つては中国兵を使つて東南アジア、更にインド、更にイランの制圧を志してゐる。交通技術の発達はかかる遠大なる共産主義世界戦略を可能ならしめるやうにみえる。しかし

かれらの企てには多くの障害がある。第一にはアメリカの抵抗に直面してゐる。アメリカの民主々義がブルジョア的なものにあるにしても民主々義の欠乏せるソ連に比すれば近代的であり、又アメリカの巨大な生産力は軍事的共産主義の無遠慮な活動を不可能ならしめる。アメリカの原爆、誘導爆弾、B36重爆機、其他の新式兵器等の科学戦争の脅威は、近時のソ連の指導者の外交政策をいちじるしく守勢的立場に追ひ込んだ。アメリカの反ソ心理は強烈で、予防戦争を主張する者さへある。アメリカ当局者の反ソ演説はますます激越な口調となつてゐる。ダレス顧問は本年三月十四日の演説でソ連が対日講和にサボタージすることを非難し「ソ連が対日条約についての交渉再開を拒否したのは、アジアを血の池にしようとする暴力革命の陰謀の一部にほかならない」「軍国主義者は平和への道の遠い時は平和を口にし、平和が間近かに迫るとかれらは平和に脅威を与へる」といふ激しい言葉を使つた。しかし国際共産主義運動にとつて、最も根本的な抵抗条件になるものは各民族の自主性である。民族の自主性要求は、自然的な本能であつて、軍力をもつてうちやぶることはできない。国際共産主義勢力の世界戦略は過去のあらゆる世界帝国が諸民族の根強い自主性の前にほろびたやうに到底その目的を実現することはできない。東欧衛星国においてはユーゴのチトー既にモスカウより離反し、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、チェッコ等ではチトー同情者が苛酷に粛清されてゐるが、東欧人民の間の反ソ気分は増大するだけであらう。各国の共産党のなかからもモスカウの利己主義に愛想をつかしてイタリーの如く脱党者を出し、フランスの如く党勢の弱体化となつて現れてゐる。

世界はたしかに統一化の方向に向つてをり、そのための経済的地盤はすでにできてゐる。又近代的知性はそれを要求してゐる。しかし、世界共同体の成立は各民族の自主性を基礎とし、その相互尊重の上に築かれるであらう。東欧諸国内部の反ソ主義者は、第三次大戦の勃発をソ連より解放されるチャンスとしてまちのぞんでゐると伝へられるが、これはありうることで、ソ連がうつかり戦争をはじめられない理由もここにある。ソ連の内部においても弱点がないことはない。経済についていへば、輸送力の不整頓は依然その大きな弱点である。自然資源と工業地帯との結合は均衡的でない。工業地帯の集中はアメリカ爆撃機の前にさらけ出されてゐる。消費財産業が軍需的重工業の一〇%にすぎないことも国民生活が危機に際して一度に崩壊する危険を内包してゐる。モーター燃料も十分でない。コルホーズ農業は依然農民の不平とサボの種になつてゐる。更に独裁政治にたいする国民の不満は心理的に戦力を低下させる。

ソ連の世界戦略における日本の地位については後にのべる。（一三六頁）第三次大戦に際しソ連が初期に先制的に西欧に殺倒して短時日の間にこれを制圧し、次いで中共と合体して極東の総攻撃を行ふことは十分ありうることで、その際、近代工業の国日本がその主要対象となることは十分想像せられる。その上陸地点は北海道の東西両海岸、宗谷海峡、新潟、山陰、北九州等であらう。これを防ぐには国連軍やアメリカ兵だけでは足りない。民兵組織を以てする日本人自身の自衛力の発動力なくしてこれを防ぐことはできない。

第四章　日本周辺の国際情勢

一、国際情勢とは何か

われわれ日本人は国際情勢についてのセンスがあまり鋭くない。今日国際情勢と国内情勢とは鋭敏相互に作用する。前者についての感覚がするどくなければ後者をも有利に処置することはできない。われわれが国際情勢に鈍感であるのはいはゆる島国根性の故であらう。豊臣秀吉は明の使者と称する無頼漢に散々翻弄された。明治維新直後にはロシアのひどい謀略にかかつて樺太を千島と交換させられた。第二次大戦の末期に近衛首相は溺れる者ワラをもつかむ心理になつて虎のやうなソ連に依頼して戦局を片づけたいといふ甘い空想をしてうまうま逆用された。終戦後に日本が占領され外部と遮断された故もあるが、今日国際情勢の重要性を理論的に認識しながらもそれに関するセンス、いはゞ勘がにぶく、空想的で亡国的でもある永世中立などの自分勝手な幻想にふける者がまだある。

国際情勢がどんなものであるかを常識的に知つてゐる人は少くないであらうが、今一応これを概念的にはつきりさせておく必要がある。

(1) 国際情勢の背景には経済や文化の動きがあるが、しかしそれは本質的には政治関係である。

(2) 端的にいへば国際情勢とは国家間の生存競争に関する現象である。大国家はますます優越せんと欲し、中小国家はできるだけその自主性を失ふまいとして活動する。人類は国家を創造してからはじめて歴史生活をするにいたつたのだが近代人はわけても国家人である。国家はいらぬと理念的にかんがへるインテリも現実には国家の法の保護のもとに生きてゐる国家人である。国家の自由と独立がなければ個人の生活も人たるに値しない。独立国家をもつことは個人の人格的独立の第一条件である。国家競争の根柢にはかやうな個性の尊厳の確保の要求があるのだから根強いのである。この国家間の対立、矛盾乃至協働から生ずる現象が国際情勢の中心をなす。

(3) 国家間の関係には平和よりも争闘的要素の方がより多く支配する。国家はその所属員にたいしては協同社会的に機能するが、他の国家にたいしては利益主義的に対抗する。国際情勢のなかでは協働よりも不和の要因の方の多いのが現実である。人生には力、理知、愛の三原則があつて、個人間でも民族間でも国家間でもこの三原則が均衡的に作用してをれば正しい発展があるのだが、国家間の関係では理知や愛の原則よりも力の原則が強く支配する。国際情勢の観察には力の作用を主として見てとらねばならぬ。国際関係において正義や道理が沈黙し力だけが作用することの多いのは、悲しむべきだが、しかし現実である。国家は権力による組織体であつて、国家が自ら進んで権力を弱めたり放棄したりするならば、それは国家といつても実質は国家でなくなり、他国の奴隷となることを意味す

る。権力を否定して成立する政治などはありえない。平和主義は個人道徳の目的としては至極結構であるが、国家としては自殺行為である。純粋理念は政治の埒外の問題である。

(5) 経済や技術の発達によつて世界の統一化の物質的条件ができてゐる。それを作りだした西欧文明には精神的にも政治的にも行きつまりを生じてゐる。世界は何らかの変革を迫られてゐる。（それを解決するのは社会主義のほかにない。）この統一と変革も国家間の協働よりも競争を通じようとしてゐるのが現実である。国際情勢が内面にもつてゐるこの根本課題についてヘゲモニーを握らうと争うてゐるのが米ソである。国際情勢にはいろいろの具体的な部分的問題を含むにしても根本は米ソの対立で、これが時代にたいする鍵であり集中点であつて、これにくらべると他の小さい問題はどうでもよいほどである。この二大国の対立には力の意義がいよいよ露骨となり、自由、平等、条約の神聖、国際法などは時代錯誤のお題目と化しつつあり、十九世紀のバランス・オブ・パワー（勢力均衡）の原則は紙屑となつて之に代つてモノポリー・オブ・パワー（勢力独占）の現実政策が両大国の競争課題である。すべての国民の平等を叫んだところで厳然たる事実として存在する諸国民の間の不平等をどうすることもできない。国際連合や対日講和で拒否権を廃止するといふ形式論はどう解決されるにしたところで、米ソ両国が実質において拒否権を有してゐる事実は否定しやうがない。米ソ両国の力の一弛一張によつて残余の国々は右にも左にも揺れる。しかしこれらの国々は決して心から米ソのいづれかを主人として仰いでゐるのでなく、両国の力の増減によつて動かされるものにすぎない。国際

関係の領域における人間の真の進歩はまだそんなに多いものでない。

(6) 過去数百年の世界政治の立役者だつたのは西欧勢力である。ソ連は反西欧的であるが、同じ西洋人種であり、その政治と文化とはひろい意味の西欧勢力の一変種である。それらに対立してアジアが世界政治の一要因として登場しはじめたことが現国際情勢に一つの複雑を加へてゐる。アジアはまだ政治的にも経済的にも完全に独立してゐないが、その無限の潜在エネルギーは民族主義を精神的動力として今後の世界政治の能動的要因となつてゆく必然にある。それは本質的に西洋勢力と対立する。

(7) かやうに国際情勢には矛盾が多いのであるが、客観的にはその動向が進歩をめざしてゐるといふ信仰を我々は捨てるべきでないだらう。原子兵器の無思慮の使用は物質的にも精神的にも人間の大破壊をもたらすかもしれない。一つの文明が終焉すれば、数百年の暗黒時代がつゞき、それを経て他の新しい文明が生れるといふコースを世界史はいくどとなく経験してゐる。近代文明はゆきつまつてゐるが、新しい暗黒時代に入らずして、他のヨリ高い文明に到達しうるや否やが現代の人類に課せられた大命題である。その解決は国際関係の動きと大きくむすばれてゐる。

アジアの一国たる日本は米ソ対立の一焦点として世界政治の重要個所となつてゐる。敗戦後の無力感情や甘い感傷主義や身勝手なユトピア的平和主義で今日の国際情勢の荒波をきりぬけてゆくことはできない。理知も愛も大切な要素であるが、諸国の力と力との間における求心的乃至遠心的作用を現

実のまゝに観察して自己の生存をいかにして確保するかを発見せねばならない。現代では世界政治の動向は国内政治よりも重要性をもつ。力の考察をぬきにした感傷的平和主義は国家の自殺を意味する。日本国家の自由と独立なしに我々の生活はありえない。冷酷なる事実観察、力の評価、それから生ずる打算と積極的な行動、これが空想によつて身をほろぼさず、けはしい国際情勢のなかに我々の生存を保つゆゑんである。

二、現在の国際情勢における主要モーメント

現在の国際情勢における主要モーメントは大体次の如くである。

1 米ソの対立（二つの帝国主義）

世界の統一化と西欧文明の変革、この時代の大要請に解答できる国家は世界に二つしかない。いふまでもなくアメリカとソ連である。ソ連が世界共産主義の旗印によつて断乎たる決意をもち、すべての力を挙げ、すべての資源を動員してその目標に突きすすんでゐるに反し、旧来の西欧文明の代表者たるフランス、英国、イタリー、ドイツ等は何をなすべきかに迷ひ、神頼みのやうな不安な心理のなかで暗中模索をつゞけ、よろめいてをり、他力本願的にアメリカにすがり、最も大切な自主的な主観

力が衰へてゐる。西欧文明の代表者として立ちあがることを余儀なくされてゐるのがアメリカである。アメリカには自国だけに立てこもるといふ孤立主義の空気が今も底力をもつてゐるが、世界政治の現実はたゞちにアメリカの国内問題たる意味をもつことが愈々明かになつたので、孤立派、反孤立派、国際派などの色々のひしめきがありながらも、その上下をあげて強い反ソ気分をもち、一戦もやむをえずとする決意がほぼ一般化した。現在の国際政治の基本線は米ソの対立で、どの国もその影響をうけ去就の決定を迫られざるをえない。

米ソ両国は互に帝国主義だと罵り合ひ帝国主義といふ言葉を一種下劣な印象をともなふものとして使用してゐる。理論的にみれば米ソ両国はそれぞれ異つた意味をもつところの帝国主義国家と規定できぬことはない。政治経済的に帝国主義の特徴は何であらうか。マルクス主義経済学は帝国主義を金融資本の政策なりといふ単純な規定をする。しかしそれだけでない。単なる経済以上のもの、本質において政治的なものである。強国の弱国抑圧、勢力圏や領土の拡張、自由よりも権力手段、軍事手段の忌憚なき作用などがその特色である。米ソ両国とも濃淡の差異や性格の差異はあつてもかやうな特色をそなへてゐる。

(1) アメリカには資本主義史上に未曾有の巨大な資本の蓄積と高度の生産力の発展があり、中心的資本形態は独占資本、金融資本である。それはいはば輸出的な帝国主義といふべきもので、商品、資本、技術を海外に輸出して世界市場を制覇することがその生存理由である。それは全地球を経済的に

支配する衝動にかられる。ブレトン・ウッヅ機構による世界経済のアメリカ的編成もアメリカの能力と希望にくらべると狭すぎることが分つたので、マーシャル計画による西欧経済援助を通じて西欧をアメリカ経済圏にくみ入れ、又いはゆるポイント・フォア政策すなはち後進国開発計画によつて東南アジアの原料地域に投資して戦略物資の獲得をこころざしてゐる。

アメリカの経済的実力にくらべてその外交政策が拙劣で多くの失敗を演じてきたことは争ひえない。一九三九年頃ルーズベルトは日独の打倒こそアメリカの目的であると叫び、一九四五年にその目的は完全に達成されたが、それは共産主義の勢力を絶大ならしめることとなり、かつてのドイツ及び日本の支配地域を悉くソ連に与へる結果となつた。ユーゴ問題では民主々義者ミハイロヴイッチを追ひ出して共産主義者チトーを支持し、トリエステをイタリーに与へず、ヤルタ会談で千島、南樺太、旅順、大連をソ連に与へ、中国では国共連立政権の工作をして当然失敗して全中国を共産主義の支配下におかしめ、東欧諸国の衛星国を次々に承認してそれらがソ連の勢力圏に入ることを手をつかねて見送つた。鉄のカーテンのできたことはアメリカの外交が優柔不断だつたことにも原因する。かやうな誤謬の根柢には、共産主義にたいする全然謬つた評価があつたのである。ソ連も日独打倒後にはアメリカと協調して一つの世界の建設をやるだらうとか、ソ連だつて約束は守るだらうとか、更にすすんで気むつかしいソ連の機嫌をとつて協調してゆくにはどんな譲歩をすればよいかといふやうな甘い考へ方をしてゐた結果、ソ連は一挙にして勢力圏を拡大してしまつたのである。それは単なる技術的

な間違ひでなくて対ソ認識が根本的にまちがつてゐたことから生じたのである。その後、ソ連の周辺をしめつける所謂封じ込め政策を考へついたけれども既に手遅れになつたのである。軍事態勢もソ連にいちじるしく立ちおくれた。原子力の独占で安心し切つてゐたのにソ連もつひに原爆を所有することが判明するに至つた。

一九五〇年六月からの朝鮮戦争はアメリカ人の眠りを醒まさせるに至つた。その後の軍拡計画はじつに大規模である。一九五〇年度の軍事予算は四五〇億ドルに達し第二次大戦中の一年軍事費の半ば以上に達した。米ソの対立はいちじるしく軍事的性格をおびるやうになり、アメリカ人は第三次大戦の不可避を信ずる気分が強くなり、先制的な予防戦争を唱へる一派さへ現れてゐるが、トルーマン大統領が国務省を支持するにたいして、国務省こそ対ソ宥和政策の張本人だとしてこれを攻撃する気分は世上にも強く、又西欧派兵問題をめぐつて共和党指導者フーバー等の論難があり、言論自由の国なりとはいひながら国論はまだ真の統一点に達してゐない。アメリカが他民族内政不干渉のドクトリンを捨て、外交の目的を平和から戦争の勝利におき、公然世界の指導者として自任するに至るやうになる日はそんなに遠くないだらう。

(2) ソ連はスターリン時代になつてレーニンの社会主義革命の遺産を軍国的なものに作り変へた。生産手段の国有といふ社会主義的形態は形式だけのものになつて、政府は人民によつてでなく共産党官僚によつて所有されてゐる。その帝国主義は輸入的なものともよぶべきもので、土地、労働力、資

本を貪慾に自国内にとりいれようとする。絶えず労働力の新しい源泉をさがし求め、日独捕虜の酷使のごときことまで敢へておこなひ、生産財たると消費財たるとを問はず外国の富を掠奪的に自国内に持ち込まうとする。特にはげしいのは領土慾で、これこそまさに旧ロシア的伝統の復活である。これは粗放経営で次から次に新しい土地を耕やすロシアの農民の伝統心理に根ざしたものだといふ説明もある。独ソ戦争以前にはスターリンはヒットラーと組んでポーランドを割取し、フィンランドに侵入し、大戦中及び戦後にはアメリカのお人好しに乗じてバルカン諸国を衛星国化するに成功し、大戦後、ソ連の支配する勢力地域は七、五〇〇、〇〇〇平方哩、人口約五億人に及ぶに至つた。ソ連はその支配のもとに入つた諸民族の自主性を解体する。その最終の目標は自国のみを高度の工業国たらしめ他国をすべて農業国たらしむるにある。

この無制限にして粗野きはまる帝国主義的欲望を実行する根本手段は軍力である。ソ連は戦後にも戦時体制を解かず、ヒットラーの理念に輪をかけた総力戦的国家を作りあげ、その大軍拡の費用はアメリカの軍事費の三倍に及ぶと想像せられてゐる。共産主義はいまはソ連の拡張政策の手段にすぎなくなり、各国共産党は自主性を失うてソ連の政策ことにその第三次大戦戦略に従属する機関となつてゐる。少しでもこのコースにはづれて自民族の利益にこだはる者は忽ち苛酷な粛清に逢ふ。チトー的要素の抑圧のためにはあらゆる残酷な裁判をもつて数十年来の忠実な共産主義者をも惜しげもなく殺してしまふ。近代的扮装をしたジンギス汗の国、コーランの代りに共産主義を左手に、剣を右手にた

づさへた同教的な帝国主義の国のやうな感じをうける。その脅威に直接におびえてゐるのが学問と芸術のかほり高い西欧の国々である。しかし学問や芸術だけで暴力をうちやぶることはできない。

2　第三次世界戦争の危機

戦争にうつたへても自己の世界支配権を確立しようとする意志はソ連の方が強い。ソ連は経済的にも政治的にも軍事的にも精神的にも全く戦時体制にある。東欧の衛星国は事実上ソ連の戦争機構の一環にすぎない。米ソ間の冷戦期はすでに終つて暖戦期に入つてゐる。ソ連は自ら戦はず、赤軍を温存し、朝鮮戦争において中共を出動せしめてゐることにみられるやうに、その指導下の共産主義国の軍力を表面に立てることをやつてゐる。朝鮮戦争は実質において小型の米ソ戦争である。朝鮮の民衆は実に悲惨な状態にある。朝鮮戦争は長期戦となるであらう。しかしこの朝鮮戦争型のものは台湾、インドシナ、イラン、ドイツ、ユーゴ等においていつ爆発するかもわからない。一九五一年三月十五日イラン国民議会は満場一致でイラン石油工業の国有化を可決し、議会外にゐた数千名の群衆は一せいに拍手を送り、イラン全土は歓喜につつまれたといふが、イランの石油産額は全世界の四分の一を占め、アングロ・イラン石油会社によつて英海軍の燃料をまかなつてきた英国は大に狼狽してをり「もしイランがあくまでも石油の国有化計画を実行すれば西欧はソ連との冷い戦争に大敗北をこうむることになるだらう」と観測する者がある。イランと境を接するソ連にとつてその油田は垂涎の的である。

る。イランは第二の朝鮮となる可能性がある。かやうな暖戦がつみ重ねられてゆけば第三次戦争の熱戦への転化が必然となる。今日ソ連と中共の朝鮮における失敗やアメリカの軍拡や西欧の再軍備の進捗などのために国際共産主義勢力はやや守勢的地位に追ひこまれてゐるが、それは第三次大戦の危機を本質的に緩和するものではない。中共軍の南鮮撤退も戦略的なものにすぎない。第三次大戦はいつ始まるかといふ予言を試みる人が多い。しかし国際情勢の予言はたいてい当らぬものである。とはいへ、全体としての国際情勢が世界戦争の危機のなかにあることは何人も拒めない。

3　国際共産主義の軍事的な動き

今日の国際共産主義運動がソ連を中心とすることは第三インターナショナル時代どころでない。第三インターナショナル時代には各国共産党はなほ一定の自主性をもち、それらが民主的に結合して世界的中央集権組織を作りだすといふ構成であつたが、今日の国際共産主義運動の指揮系統は表面上コミンフォルムを通ずるが、事実上、その上にソ連の厳重な統制がある。アメリカを倒して全地球の指導権をにぎらんとするソ連の軍事的見地が国際共産主義運動の一切を決定する。それはレーニン的な世界革命のためではなくて、ソ連帝国主義の優勝のためである。各国共産主義運動の一切の戦術はソ連の第三次大戦々略構想に従属する。一切の勝負は武力で決定されるといふ信仰が支配し、一切の希望を軍事力にかけてゐる。だから今や世界の共産主義運動は軍事的な段階に入つたのである。

国際共産主義運動の世界戦略をみると、ヨーロッパでは既に東欧及び東独をにぎつてをり、更にスカンジナビヤ半島の精密工業と西欧のルール・ライン地帯への進出をこころざし、西欧を短時日の間に占領した後にはナポレオンもヒットラーもどうすることもできなかつたドーヴアー海峡を突破して英国を占領し、英連邦を解体させ、それを通じてアフリカ及び近東地方を完全に手に入れようと欲する。アジアにおいてはソ連は中共を一時的な指導者たらしめて中共に満足感を与へてゐる。しかし中共を道具にしてアジアにソ連の指導権を確立しようとするものに外ならない。中共はアジアの中心は北京にありと豪語してゐる。その指向するところは日本及び東南アジアであるが、更に中国の無盡蔵の人口から兵隊を作つてそれをインド及びイランに向けることをも考へてゐる。各国の共産党は実質上ソ連赤軍の指導下にある。しかしソ連の従僕となつてゐるかれらの間にも、ソ連の強圧にたへ切れなくなつて反逆心をいだく者がどうしてもでてくる。それにたいしてソ連は遠慮会釈ない苛酷な粛清を断行する。モスコーに反逆したチトーの影響は東欧のみならず西欧の共産党にも影響し、イタリーにおける如く分裂をよび起し、又はフランスにおける如く党員の大減少となつてゐる。しかし国際共産主義運動が全体としてソ連の指導の下に軍事的態勢をとり着々第三次世界戦争にそなへてゐることは明白である。

4　西欧諸国の弱体化

十六世紀以来かがやかしい近代文明を作り出した西欧諸国はほとんど精力を出しつくした形で、その文明は今や末期的現象を呈し、政治上の弱体化にそれがあらはれてゐる。この弱体化の第一の原因は資本主義のゆきつまりである。第二の原因はソ連のうす気味わるい底力をもつた威嚇である。第三はその植民地であつたアジア諸国が独立して西欧工業の市場と原料地が大減少したことである。西欧諸国には敗北主義気分が霧のやうにたちこめてゐる。ソ連の侵入に徹底的に抗戦しようと考へてゐるのは英国とスペイン位のものであらう。フランスではソ連が侵入してきたならばすぐ手をあげると今から考へてゐる弱気のインテリが多い。これにたいしてアメリカが躍起になつて補強工作に着手し、現在十二師団しかない西欧の軍力を四〇師団にまで増強して西欧統一軍を作り出さうとしてゐるが、西欧の他力本願主義はしばしばアメリカ人の失望と憤怒を買うてゐる。

5　革命を欲するアジア

アジアは西欧と共に世界史の二大形成者であつた。アフリカの黒人やアメリカ原住のインデアン等は世界史の形成に参加しなかつた。十六世紀以来は西欧がアジアに優越し、後者は前者の植民地もしくは半植民地に転落した。しかしそれによつてアジアは世界史形成者たる資格を失つたわけでなかつた。資本主義の行きづまりも米ソの対立も西洋的原因から起つた西洋的現象で、アジアはそれについて本質的な責任はないのであるが、しかしアジアはそれらの影響から独立するわけにゆかないし、又

その矛盾の解決について人類としての共同責任をもつてゐる。

第二次大戦後においてインド、ビルマ、インドネシア等が従来の植民地的地位を脱却し、中国も半植民地でなくなり、インドシナでは現に激烈な反植民地闘争が行はれてをり、アジアの情勢は第二次大戦を境としてほとんど一変した。これは世界政治経済における永続的な構造的変化の第一歩である。西欧の植民政策は一応終結し、アジア諸国では政治的独立と同時に国民経済形成の運動がさかんになつてゐる。しかし西欧の植民政策ののこした禍根はなほ深くのこつてゐる。西欧諸国はアジアの工業化を意識的に妨げてきた。(植民地の工業化に熱心であつたのは日本だけである。)アジアの主要産業たる農業も又ゆがめられ、資本主義的な大規模な栽培農業と伝統的な零細経営とが併立する二重経済が存在したのみならず、茶、ゴム、麻、米等の単作農業がアジアの各地域に強制され、これらの生産物が資本主義商品たらしめられる結果、世界市場における価格の動揺は直ちに原始的な経済をいとなむアジアの農民に深刻な影響を与へてゐた。この状態はまだ改善されてゐない。その結果おそるべき貧困がいまも支配してゐる。一九四六年では国民一人当りの所得はセイロン九一ドル、フィリッピン八八ドル、インド四三ドル、インドシナ三五ドル、中国二三ドル、日本一〇〇ドルであるにたいし、アメリカの一人当り所得は一二六九ドル、英国六六〇ドルであつた。中国人の生活水準はアメリカの約五五分の一であるわけである。同時にアジア社会特有の保守的なもの即ち封建的土地所有、高率地代、高利貸及び商業資本、孤立した村落、大家族制、婦人の低い地位等が進歩の歯止めをなして

ゐる。

アジアの広大な人口を構成してゐるのは農民であるが、かれらは革命を本能的に欲求してをり、それが外国支配の排除とともに国内社会構造の民主的改造でなければならぬことを直觀的に理解してゐる。広大な農民は革命に向つて用意せられてゐるのである。西欧のブルジョア革命は数百年を要したけれども、アジアにおいてはかやうに長い年月の必要がなく、又その余裕もない。アジア人を動かしてゐる基本的な精神的動力は民族主義であつて、資本主義や階級主義や共産主義ではない。現在日本で、アジア諸民族との結合の必要が左翼的な人たちによつてすら唱へられてゐるが、しかしかれらはアジア諸民族の心理を理解せずに勝手に自分の階級主義的立場から発言してゐる。これでは他のアジア人の同感をうることはできない。民族主義の基礎上においてのみ日本は他のアジア民族と結合することができるのである。この民族主義を基盤とした社会革命の解決しなければならない課題は、工業化、農業革命、保守的社会構造の民主的改造、独立国家の獲得等であり、それはアジア特有の新しい社会主義態勢を作りだす必然にある。

アジアの自然的富や労働力や潜在的な購買力などは搾取者にとつて誘惑の種となる。西欧は工業の復活と共に、アジアの原料及び市場に再び着目せざるをえない。その結果かれらが新しい搾取経済を構想するにいたる可能がある。トルーマン大統領のポイント・フォワー即ち後進国開発計画は旧植民政策の復活でない事はもちろんであるけれども、それが土地制度の改革や零細経営を打破した新生産

方法の創造等の如き根本的な面にふれることが少く、種子の改良、肥料、農村衛生等を主とするところにまだアジアの真の要求を理解してゐない欠点がみられる。英連邦は四〇億ドルをもつて英連邦内の経済開発を行ふいはゆるコロンボ・プランなるものを立ててゐるが、これには英国の伝統的なアジア搾取政策の復活の危険が多少ともなふ。ソ連は共産主義によつてアジア人を解放すると号してゐるが、ソ連に欠乏する熱帯物資の獲得やアジアの労働力の利用が眼目であり、したがつてそれはソ連本位の帝国主義に外ならない。アジアの革命はアジア人自身の自主的努力によつてなされる外はない。現在のアジアの不安は外部の原因の作用によるよりもむしろ内部からの生みの苦しみである。東洋と西洋との均衡は世界史の進歩の根本原因であるが、それは与へられるものでなくしてアジア人自身の努力によつて獲得すべきものである。

6　社会主義への世界史的動き

資本主義はゆきつまつてゐるが、その瓦解を大団円的な恐慌に求めるマルクス的学説は希望的意見が多い。経済的にいへば、資本主義はそれ自身の発達がその生命をちぢめるといふ、いはば積極的な効果をもつたところの自壊作用によつてその幕を閉ぢるであらう。資本主義の下において経済は集産化へ向ふ。経済の計画化が必然となる。それは資本主義の魂である企業家の自由な利潤獲得活動を制約する。経済が自動化的傾向を帯びる。企業経営が管理（アドミニストレーション）に転化するやうになる。ここで社会主義

への条件が資本主義自身によつて提供される。この過程は第二次大戦後の各国経済にかなりいちじるしくあらはれてゐる。この動向を最も顕著に代表してゐるのが英国労働党政府であるが、この風潮は英国以外の国でも大なり小なりあらはれてゐる。アジア諸国ではその窮乏を解決するために資本主義方式を超えて直ちに社会主義方式をとることをもつとも有利とする。もちろん社会主義は一の社会タイプから他の社会タイプへの転換であるから、政治的な過程即ち革命を必要とする。その革命のあり方は各国における社会的発展の程度如何による。いづれにせよ社会主義が歴史の根本的動向として現実化しつつあるのが第二次大戦後における最も進歩的な動因である。

7　日独の講和問題

日独は東西における二つの有為な民族である。終戦後六年近いのにまだ講和が成立せず、これによつて世界政治に真空状態を生じてゐることは世界の均衡を阻害する。この問題には米ソの対立がからみあつてゐる。アメリカが講和に積極的であるに反し、ソ連及び中共はこれを馳け引きの舞台に使ふ危険が多い。講和の問題は更に再武装の問題ともからみあつてゐる。自主性のない講和や再武装は日独両国とも断じて希望しないところである。日独の講和問題が合理的に解決されれば戦争の危機を緩和することとなるが、さうでなければかへつて戦争の危険を増大するであらう。

以上のやうに今日の国際情勢には矛盾の方が多い。しかし矛盾はかならずしも悲しむべきものでない。矛盾はより高い調和を生み出す導きの糸である。矛盾は解決されねばならぬ。人間の叡智がそれに加はればそこから生れる調和は過去数百年の近代文明の成果を含む高度のものであらう。今日の矛盾から出口を求めるならば、(1)西欧の社会主義化、(2)アメリカの社会化経済（ニューディールの思想と経験をより豊富にしたところの）(3)ソ連の独裁政治の緩和、(4)アジアの社会主義化、(5)民主的な世界共同体の形成等であらう。これは単なる主観的希望であるだけでない。これらを現実化するための客観的条件はすでに大なり小なり存在してゐる。国際情勢における現在の矛盾に驚愕したり落胆する必要はない。

三、日本をとりまく諸情勢

1　ソ連と日本

ソ連は第二次大戦中及び戦後を通じて日本にたいして数々の不信行為をした。日本に原爆の投下された直後において日ソ中立条約をじゆうりんして満洲及び朝鮮に進出して日本に打撃を加へたことがその一つ、ヤルタ協定によつて日本より千島、南樺太を奪取したことがその二つ、数十万の同胞をシベリア及びソ連本国において自国の経済建設のために奴隷的に酷使したことがその三つ、その抑留同

胞に政治教育なるものをほどこして日本攪乱の要素として送りこんだことがその四つ、対日講和問題について拒否権の行使を主張してその実現を妨害してきてゐることがその五つ、日共を内面から秘密指導してゐることがその六つである。国際共産主義の世界戦略にしたがへば、日本はそのアジア戦略のキイ・ポイントである。日本の工業力、生産設備、技術、熟練労働の奪取、対米戦略基地の占領等がその目標である。

中ソ同盟は実質上日本を仮想敵とする。日本の復讐をおそれる心理、競争者としての日本の復活をおさへやうとする心理等が入りまじつてゐる。今日ソ連も中共も声を大にして日本再武装反対を叫んでゐる。ドイツの再武装を恐るると同様に日本のそれをおそれるのは日独の民族的独立に何らの同情をもたず、ただ力主義的な対抗意識をもつだけであるからである。対日講和問題について本年三月初めソ連の国連代表マリク氏はダレス顧問と会見の必要なしとの声明を発表したが、これはソ連が対日講和について誠意をもたず、これを単に米ソ両国の政治的カケ引きの問題としてのみとりあつかふものであることを示してゐる。社会党は一方に全面講和をさけびながら、他方にヤルタ協定の廃棄と千島、南樺太の返還を要求してゐるが、ソ連は明白に北海道の一部であるハボマイ諸島も返還しないくらゐであるから、たうてい千島列島や南樺太を日本にかへすはずがない。（この意味で社会党は明白に矛盾した要求をしてゐるのである。）

英国の有名な軍事評論家ハートは、「朝鮮動乱の論理的帰結はソ連の日本への空からの侵略である。

それこそスタートリンのトルーマンへの当意即妙のシッペイ返しで、いやしくも戦略専門家にとつてやめられぬやうな魅力ある誘惑である」といつた。元来朝鮮の戦乱そのものが国際共産主義の計画的な軍事的侵略であり、朝鮮戦争はいはばテストにすぎず、朝鮮をとつてみたところで彼らにとつて大した利益はなく、この戦争を通じてかれらの終局の目的とするところは、日本の奪取にある。かりにアメリカが何かの都合で日本を引揚げたならば、ソ連はたちまち侵入を開始するであらう。日本がソ連勢力圏内に入ることはなかなかおこりさうにないが、仮にさうなつた場合の光景を東欧衛星国や東独の例、近くは北鮮又日本人が終戦直後に満洲で体験した例などを綜合して想像してみよう。

まづ以てソ連の兵隊が極度の乱暴を働くだらうといふことである。掠奪、殺人、強姦はかれらの三原則で、満洲の日本人がつぶさに体験したが、ドイツにおいても人の面前で婦女子を強姦し、ドイツ婦人の多くが悪質の性病を伝染させられたといふ現地報告が少くない。かやうな乱暴は実は故意にやらせるのだと推測できる。即ちソ連の力は絶対的で、反抗は絶対不可能だといふ印象を植ゑつけるためである。十三世紀に蒙古人がロシアを占領しそれから三百年の統治中に蛮族特有の残酷さを以て一切の自由を奪ひ「死か奴隷かいづれかをえらべ」といふ態度であつたことが史書に記されてゐるが、これがやがてロシア人の政治心理にも民族心理にもなつた。近代文明世界にだつて力さへあればこんな野蛮なことでも政治の手段に用ひられないことはないと信じ且つそれを実践してゐるのがソ連である。これは西欧の文明人ドイツ人の度胆を抜いたところであり、又最も繊細な文明人フランス人が前

以てその光景を想像して今から恐怖してゐるところである。

さてソ連が日本を占領したら如何なる政策をとるだらうか。

第一にさしあたり徳田あたりに政府を組織させて最も極端な恐怖政策をやらせる。純粋にソ連の利益を第一位におく。

第二に次のものがただちに処刑される。公然反ソ的反共的態度をとつてゐたインテリ及び労働組合指導者、大資本家、自由党その他の保守政党幹部、指導的な警察官や裁判官。（ただし三鷹事件第一審の裁判官などは大いに抜擢寵用される。）次いで粛清は社会党幹部、民同派組合幹部等に及ぶ。アメリカの例に輪をかけた大規模の追放が行はれる。

第三に天皇制は廃止され、天皇は戦犯として裁判され処分される。

第四に大企業、大財産の没収が行はれ、漸次中規模のものに及び、官僚的集産主義が行はれる。土地も没収され農民は集団農場の労働者にされる。

第五に在来の共産党員は安泰かといふにさうではない。シベリア帰りその他のソ連に絶対忠誠を誓ふ者に指導部がおき代へられる。旧幹部はアメリカのスパイその他の名目をつけられて粛清される。

第六に日本青年の再武装が直ちに実行され反米戦争にかり出される。それは背後に督戦隊のついた奴隷軍である。満洲にゐた同胞はすでにそれを体験したし、朝鮮で現に行はれてゐるところである。今日の平和論者がどんなに泣面をしても追付かない。

第七にソ連本国で公然行はれ且つ衛星国にも持ちこまれてゐるところの強制労働制が行はれる。集会の自由も罷業権も団体協約権も忽然として消滅する。一部の日本人はシベリアにつれて行かれる。これはシベリア建設のためであるのみならず反ソ気分の多い日本人にたいする懲罰的意味をもつ。

第八に日ソ間に協定が作られ、アメリカその他の西欧諸国との連絡が遮断され、ルーブル借款が附与されても、結局ソ連に数倍の利益のある方法（たとへば生産物徴収）で回収される。ポーランド、チェッコ、東独からは生産物を、中国や北鮮からは原料や農産物を、ソ連はその手をやつて自国に運んでゐる。民族的搾取の新しい形式である。

右の状態が現れたとき多くの日本人はアメリカの方がまだよかつたと嘆息することだらう。想像は右のことだけで終らない。ソ連型独裁政治に堪へ切れなくなつた日本人が地下運動で抵抗（レジスタンス）をおこすだらうが、それよりもアメリカが日本をとり返すために出撃してくることが必至である。日本がソ連の手中に入つたならばアメリカ本土が第一線になることになる。ちやうど南鮮今日のやうな事態が日本でおこりうる。結局アメリカは日本をとり返すであらうが、そのときには日本は戦争のために国土が荒廃し有能な人間は殺されたり死んだりしてゐるであらう。

以上の想像は空想でない。東欧その他ソ連衛星国の事例や米ソ対立における諸要因からみて、可能的な将来の現実の姿である。日本はインドやインドネシアのやうに米ソ関係の波紋が比較的ゆるくひろがつてゐる国と違ひ、ドイツやイランやインドシナの如く両勢力が緊張して対峙してゐる国なので

ある。

現在日本人はなによりも独立を渇望し講和の成立に満心の期待をよせ且つ自衛のための再武装が緊切な課題となつてゐる。この日本にたいしてソ連がどのやうな態度でゐるかは日本の深い関心をよぶ。次のことが特徴的である。

(1) これまで四大国の拒否権行使といふ講和方式を主張して事実上対日講和の成立を妨げてきたのはソ連である。今後もアメリカと同調して講和を成立せしめる意志ありとはおもはれない。ソ連の対日講和についての条件には天皇裁判、南樺太千島領有、日共の自由活動、経済制限、再軍備不承認等が含まれ、たうていアメリカと協調できない。

(2) ソ連は何よりもアメリカ軍の日本撤退を主張し且つ再武装に徹底反対する。日本を真空状態におき侵入の機会を待つことがその真意である。

(3) 日本と西欧陣営の講和をできるだけ妨げ共産党及び社会党をして全面講和を叫ばしめ少〻ともその成立を遅らせるのに努力するであらう。

(4) もし単独又は多数講和の成立後にはなほ日本との間に戦争継続関係ありと称してソ連兵の駐在を実行するかもしれない。その際は二つの日本ができあがり、ドイツの悲劇がちがつた形で日本にも発生しうる。

(5) ソ連はヤルタ協定の有効を主張し南樺太千島の領有を固守するであらう。領土について特別の

食慾をもつソ連がこれを手放すことはありえない。

(6) 日本再軍備は中ソの最も恐るるところで、これに水を差し、もしアメリカが短見にも日本兵をその士官の指導下におかうとするならばそれはソ連に絶好の宣伝チャンスを供することとなる。アメリカの傭兵といふ觀念を誇大に宣伝して日本人の間に反米気分をまきちらすであらう。

(7) 敗北的逃避的気分を日本の大衆及びインテリの間に注ぎこむこともソ連の重要な宣伝プログラムである。日共はあらゆる機会においてその工作に専念してゐる。

2 中共と日本

中共もソ連に劣らず貪慾の目をかがやかして日本を狙ふ。同じアジア人でありながら中共は日本にたいして決して好意的でない。中共は一九五〇年十月朝鮮に大兵力を投入し、最初はその人海戦術によつて国連軍の胆を奪うたが、その後アメリカの近代兵器のために莫大の死傷者を出し、アメリカ側の発表では殺傷三十万に及ぶといはれ、これによつて中共の外征と内政との矛盾が増大し、軍事的にも政治的にも大きな失敗となつてゐる。

中共は朝鮮だけを目標としたのでない。朝鮮全土を占領しても中国にとつて大してプラスにならない。真の狙ひは朝鮮海峡を越えて日本に侵入することである。中共もソ連と同じく日本の物質的富や技術や労働力に大きな誘惑を感ずる。もし日本の生産力を支配することができるならば、第一に中国

農民の負担を日本人民に転嫁することができる。工業力の殆んどない中国ではその莫大な軍事費を農民から搾取せざるをえず、兵一人について農民三十人がその費用を負担するといはれ、農民の苦痛は朝鮮戦争の失敗と共にますます増大してゐる。中国農民は平生は風の音にも驚く温厚な民衆であるが、政府の搾取が忍耐の限界を超えるにいたれば猛然として反抗運動をはじめることが数千年来の伝統である。今日農民ゲリラは中国全土で百六十万にも及ぶといふ。中共が日本の富を掠奪できるならば農民の不平を大に緩和することができる。第二に工業化は他のアジア諸民族と同様に中国民族の根本要請であり、これを満たしえなければ中共も沒落せざるをえないのだが、日本を支配するならば中国の工業化は大に促進できる。かやうな意味から中共は生存のためにも日本をねらはざるをえない立場にある。

加ふるに日本が再興したならば中国に復讐するであらうといふ脅迫観念があり、できるかぎり日本の弱化を希望する心理が中共にある。日本再武装反対は中ソ両国の共通スローガンである。中ソ同盟は日本を両国ではさみ討ちする誓約書である。中共がソ連と同じく多数の日本人を抑留して奴隷的に駆使し、遠く甘粛の鉄道建設にまでかり出し、又日本人部隊約十万を編成して満洲で訓練し日本侵入の先頭部隊たらしめる計画であると伝へられる。中国民であつても反共的であれば容易に大量銃殺され、殺されない者はソ連の労働キャンプに当る集中営に投げ込まれて強制労働に服し、シベリア或は綏遠の荒蕪地域に労務者として送られる者もあるといふのであつてみれば、抑留日本人をかやうに非

人道的にとりあつかふことはかれらにとつて何でもないであらう。われわれは生命保存のために心ならずも中共に服従してゐる多数の抑留同胞のために涙なきをえない。

ソ連及び中共の二大共産主義国の日本におよぼす圧力は大きい。中共は今日ほとんどソ連と一体になつて活動してをり、もしくはその指令のもとに動いてゐる。中ソは果して一体なのか。アメリカ一部の人の希望するやうに毛沢東はチトー化することがありうるか。日本は数千年来の隣人であり今日も不可分の政治経済関係をもつところの中国の実態を知つてをく必要がある。

今日中共はソ連とほとんど一体で、両者の間にヒビの入ることは十年くらゐの間はなささうである。一九五〇年二月の中ソ同盟成立後、中共は直線的に向ソ一辺倒の道をすすんでゐる。中共とソ連とは唯物的世界観、力主義、大国主義、小民族抑圧主義等において一致する。世界共産主義運動の戦略において中共は極東部分を担当する。東南アジア（ビルマ、インドシナ、タイ、マライ、インドネシア）及び日本を制覇することがその直接の狙ひである。反米闘争や反西欧闘争において完全にソ連の指令にしたがふ。西欧諸国の勇気喪失や意見の不一致がそのつけ目である。英国人の商売根性やその労働党一部の親中国意識は政府をうごかして中共の逸早い承認などによつてほとんど媚態に近い政策をとらしめてゐるが、それはアメリカの不満を買ひ英米間の政策に不一致を発生する。中共の外交方針は完全にソ連の指揮にしたがひ、英国を素気なく取りあつかひ、国連に加入せしめよと脅迫的言辞を弄し、自らはチベットや朝鮮に出動しながら台湾海峡に立ちふさがるアメリカ艦隊を侵略者と呼

んで非難する。内政においてはソ連型独裁政治と計画経済を採用し、粛清や強制労働についてもソ連の模写をやつてゐる。従来毛沢東は国民党との闘争において人海戦術の如き非人道的な方法をとらず、できるだけ兵士の生命を大切にしたのださうだが、朝鮮戦争ではスターリングラードの故智を学んで広野に人垣を作つてアメリカ科学兵器の餌食とする凶暴なことをやつてゐる。かれの軍隊にはもはや東洋的精神はみられず、ソ連の半ば蛮族的な戦闘方法をとるほどにソ連化されてゐる。ソ連は衛星国に反ソ気分の発生することを熟知してをり、したがつてそれをいかにして抑へるかは経験的にも理論的にも研究ずみで、今日中共政府機関の要所々々に親ソ派を配置し、毛沢東は浮きあがつた存在となりつつありといはれるが、このうはさには事実の断片が含まれてゐるであらう。

中共中国が陸国体勢をとりつつあることもソ連の影響であらう。広東上海等の海港はしだいに意義を失ひ、奥地の開発に力点がおかれ、たとへば甘粛よりソ連領中央アジアに通ずる鉄道建設が急がれつつある。中国は大陸国であり、ソ連と地続きであるが、新しい文明を吸収してきたのは常に遠く漢唐の頃よりして海岸からであつた。この歴史的な教訓を犠牲にしてまでソ連と結ばうとするのが中共の政策である。これには中共を英米勢力から遮断しようとするソ連の指導者の深謀遠慮がある。

中共に新しい軍国主義の成長しつつあることはわれわれアジア人の遺憾とするところである。中共は武装暴動を通じて政権を獲得したのであり、他のアジア諸国の共産党もこれを模範とすべきだといふ自信をもち、半ば強制的にこの方針をとることを要求してゐる。中国の政権交替は武装叛乱を通ず

るのが歴史的慣例であるから、中国限りにおいてそのやうな法則化もできるであらうが、アジア諸国に向つてすべてこの方針をとれといふのは、中国自身の未開的社会状態を忘れた潜越な思ひ上りである。更に中共の武装暴動主義は大軍力を養成しソ連と相携へてアジア諸国に威圧を加へやうとする新軍国主義に発展しつつある。中国には周辺のアジア諸民族を朝貢国たらしめて之に君臨した中華帝国主義の悪伝統がある。ちやうどソ連に旧帝政ロシアの領土拡張主義の復活したやうに中共中国に万邦朝貢の旧夢の復活がある。一九五〇年九月の中共政府二週年紀念日に周恩来は大空軍大海軍をも建設せねばならないと演説した。しかし中国には近代戦を可能ならしむるだけの工業がないから、粗野な力原則によつて他国の富を暴力的に奪うてその物質的条件とすることが必要であり、その冒険主義の恰好の対象が近代工業をもつ日本だといふことになる。実際上、中共は第三次大戦の遠からざることを覚悟して朝鮮戦争をその前哨戦として始めたのである。但し中国の農民大衆も第三次大戦を待ちのぞんでゐるといはれるが、それはさやうな機会でなければ中共の強圧から脱しえないといふ意味からである。第三次大戦となれば中共の日本来攻は必至であるが、同時に戦争長びけば中共は農民ゲリラによつて崩壊する可能性が大にある。

中共幹部の官僚化が伝へられてゐるが、共産党のやうな独裁主義に立脚する党にあつてはそれはまぬかれぬことである。しかし中共にはソ連指導者とは異りまだ革命性を保持してゐる人材が少くない。中国社会の封建的伝統をかなり打破したのは中共の功績である。とはいへ中国自身を犠牲として

向ソ一辺倒の道を進んでゐること、国内建設よりも外征によつてその精力を浪費してゐること、農民の搾取の増大によつてその不満を深刻ならしめてゐること、中国社会の伝統的なウエルフェアを破壊してこれに代はるものを未だ建設できぬ結果として飢餓や貧困の増大せること、対外的冒険主義によつてアジアの人心を失ひつつあること、これらによつて中共は中国の近代化コースにみづからブレーキをかけてゐる。中国は中共のもとにあつて本質的には依然としてまだ非近代的な中国である。

中共の土地革命、郷村よりの郷紳層の追放、計画経済による工業化の着手、都市と農村の結合への努力などはたしかに革命的事業である。しかしそれは第一歩を踏み出したばかりのところで、ソ連を主人に仰ぎ、無謀の外征に熱中したために、早くも矛盾に逢着してゐる。中国史の例をみると、中国統一の大事業をなしとげた秦始皇帝の治世は短期に終り、漢高祖がその成果を収めて前漢後漢四百年の盛期が現れ、隋煬帝も亦大事業をなしとげたのに短期に終り、唐太宗これをうけ継いで盛唐の文化の基をひらいた。中共は将来の中国の社会主義のありかたに一つの重要な原型をつくつた。しかし有終の美をなすものは中共ではないだらう。中国人は個性強く、民族的自信があり、外国と通謀する者を最後に決定的に葬り去ることは史上に例少からず、近くは汪兆銘の運命にそれを見る。恐らく中共もしくはその軍隊の内部から中国農民の心理と希望をつかむ要素が現れてソ連的中共をくつがへし、中国的社会主義の型を創造し、工業化と農業革命を完成して中国社会を近代的基盤において再編制し、更にアジア諸民族と提携してアジア復興の事業を共にするに至るであらうし又それが最も望まし

い。しかしかうした将来の予想をすることはこゝでの課題でない。

日本と中国とは政治経済的にも文化的にも切つても切れぬ関係がある。日本、中国、インドはアジアの三大民族で、アジアの復興はその協働にまたねばならない。今日、中共が過去の日本と同じ軍国的なあやまりを犯しつつあるのは悲しむべきである。しかしさればとて中国自体になんら悪感情をもつべきでない。中共と中国とは区別されねばならぬ。我々は長い目で中国の将来を見守つてゐたい。同時に中ソ共謀の日本侵入計画にたいしては警戒をゆるめず、それが実際となるやうな場合にはあくまで抵抗せねばならない。それは日本の生存の必要からである。

3　アメリカと日本

アメリカは日本にたいする実質上唯一の戦勝国、日本占領の遂行者、戦後の日本の政治、経済、財政、教育等の一切の指導者であり、戦後の日本経済の回復はいちじるしくその援助に負ふ。今日では対日講和、軍事基地、日本再武装、経済自立、太平洋集団保障問題等において日本と最も関係がふかい。

終戦後のアメリカの対日政策は三段階にわかつことができる。第一期は戦争直後の対日憎悪感の烈しかつた期間で、ポーレー賠償案の示唆したごとく日本の工業をほとんど絶滅し日本を農業国たらしむる意志のみえたほどに深刻なものであつた。第二期は日本のインフレ期の窮乏を食料衣料をもつて

救済した期間で軽工業だけは許すといふ態度に変つた。第三期はアメリカの対ソ政策において日本の占める地位やアジア経済における日本の工業力の重要性を再認識し、ドッヂ案の実行、対日講和の促進、軍事基地の強化、重工業の一定の復活などが課題となり、それらが朝鮮戦争によつて一そう推進された。

現段階におけるアメリカの対日政策の重点は一九五一年一月二十五日より二月十一日まで日本に滞在したトルーマン大統領の特使ダレス氏一行によつて示された。それは第二次大戦後におけるアメリカのアジア政策や対日政策の集約とも結論とも頂点とも見なしうる。それは次の如くである。

(1)　対日講和問題

ダレス氏は来日第一日の声明のなかで「我々の目的は日本が間もなく主権の完全なる行使を回復し世界の自由国民と友好関係をもつ新時代を再び開く道を見出すにある」と言つた。一九五〇年十一月二十四日に、アメリカ政府は対日講和七原則を発表した。その一、締約国は対日交戦国の全部とする(即ち原則として全面講和論である、たゞしソ連が拒否権行使を固守するときは除外する)、その二、日本の国連加入、その三、領土は琉球、小笠原諸島をアメリカの信託統治に、台湾、膨湖島、南樺太、千島は米英ソ華が将来決定し講和一年以内に決定せざるときは国連総会で決定する、その四、安全保障は日本とアメリカ其他の国の責任分担を当分継続する、その五、通商的とりきめ、その六、賠償放棄、その七、紛争は特別中立裁判所で解決する、といふのである。ダレス氏が東京で示した講和

関係の意同もこの線を出てゐない。アメリカは対日講和を遅くとも本年中に完了する予定だとしばしば言明した。しかし中ソの意向を大して問題としないと称しつつ実はこれまでその風向の観測に敏感であつたアメリカのことである。日本人は講和の実現を何よりも切望してゐるが果して予期通りのタイムテーブルで実現するかどうかはわからない。グレス氏も実は講和問題よりも次の諸項目を現実問題として重視したとおもはれる。

(2) 日米共同防衛協定、アメリカ軍の駐屯と軍事基地の問題

ダレス氏は共産主義の直接侵略又は間接侵略（内乱）の脅威を力説し、日本はアメリカによつて安全を保障される道をとるか、ただし又共産主義の侵入を待つか、孰れかの道をえらべといふ選択問題を日本に課した。アメリカは日本駐兵及び軍事基地保有をその戦略上から必要とする。これを法的に日米共同防衛協定の形で獲得しようとする。アメリカが世界の各地に基地を作つてゐるのは周知の如くだが、基地所在地が英佛の如き国である場合にはその使用は純粋軍事目的に限局せられるが、フィリッピンの如き国では租借九十九年といふ風に軍事目的上に政治的影響力をもつに至る。リビヤやサウジアラビアなどの基地に至つては政治的影響力はフィリッピン以上であらう。日本におけるアメリカ軍の基地や駐兵は英佛よりもフィリッピン型であるか、もしくはその中間になりさうである。日本の安全保障について日米防衛協定や基地や駐兵を必要とするけれどもそれは厳に軍事的目的に限らるべきで、内政干渉の要因となるがごときことは絶対にあつてならない。アメリカはギリシアとトルコ

にたいしていはゆるトルーマン・ドクトリンによつて早くから軍事援助を行ひ、これをソ連勢力封じ込み政策の前進基地としたが、日本再武装の際にはアメリカ士官による訓練などの行はれるであらうことは警察予備隊の経験からでも想像できる。軍事顧問団をもつてする政治的侵略はソ連が最も露骨に行うてをり、ポーランドやブルガリアやチェッコや中国でそれが顕著である。これと似た弊害が日米間にあつてならない。

(3) 日本再武装問題

日本再武装はアメリカのアジア政策から生れる一つの結論で、現下のその強い関心の対象である。それについてアメリカでは、もつとも費用のかかる空軍海軍はアメリカが分担し、日本人は陸軍だけを分担すればよいといふ意見が圧倒的である如くである。しかし現代において海空軍を有しない地上兵力は全然弱い。したがつて陸軍だけを持つ国は、海空軍を持つた国によつて支配せられることになる。日本は自衛のため再武装せねばならず、且つアメリカの軍力の援助を必要とするが、陸軍だけでなく一定程度の海空軍をもち且つ独立の参謀本部をもたねばならぬことは第七章に詳論する。

(4) 地域的集団保障としての太平洋同盟の問題

ダレス特使は日本よりの帰途、フィリッピン、濠洲、ニウジーランドを訪問したが、ここでアメリカの提唱のもとで米、濠、ニウジーランド三国をもつてまづ太平洋同盟をむすぶ工作が始められた。アチソン国務長官もただちにこれを支持するむねを発表したのをみれば、太平洋の地域的集団保障と

しての太平洋同盟の構想をすでにアメリカが抱いてゐたことがほぼ明かで、それはアメリカの利益と一致する。この同盟にはフィリッピンをも参加させ、更に日本をも加へる予想であるらしい。日本がただちにこれに参加することは考へ物だといはねばならない。インド、ビルマ、パキスタン、インドネシア、タイ等のアジアの有力な国々の参加しないかかる同盟はアメリカ本位又は西欧本位のものとなりやすい。むしろ我々はインド、インドネシア、ビルマ等と共にアジア平和同盟をアジア人の自主性において結成する志向をもつべきで、その方が世界平和の利益と合致する。もしもアメリカの計画する太平洋同盟が韓国の李承晩、台湾の蔣介石、越南のバオダイ、フィリッピンのキリノなどをアジアの指導的人物と考へて太平洋同盟の有力な構成者とするやうなことがあれば、それはアジア人を失望せしめるであらう。

(5) 領土問題

ダレス氏は日本に四つの島とその附近の小島以外の領土は全部断念すべしといふかなり断乎たる態度を示した。しかし国際民主々義のもとでの領土原則は、住民の意志又はその土地の歴史的関係によつて帰属を決定するといふにある。これは大西洋憲章も明かにしてゐるかがやかしい原則である。小笠原群島、琉球諸島、千島列島、南樺太が日本の歴史的領土であることは史実に明かなところで、南樺太を除いた地域で住民投票を行へば大部分が日本帰属を希望するであらう。ポツダム宣言の日本領土にかんする規定は対日憎悪感から生れた感情的な結論で、国際民主々義の領土原則とは必ずしも合

致しないのであるから、我々はその再検討を要求せざるをえない。ダレス特使は帰米後にハボマイ島が日本領土であることを言明して、それを占領してゐるソ連に大衝動を与へ、対日講和へのその不参加を事実上言明したとひとしい国連ソ連代表マリク氏の「ダレス氏と会談せず」の声明となつた。ハボマイ島は根室より海上僅か一里を隔て、千島樺太交換条約にも千島に算入されてゐないもので、これをもソ連が占領するのは強奪にひとしく、その日本帰属は当然のことである。我々はダレス氏がソ連の反感を覚悟してハボマイ島の日本帰属を声明した労を多とするが、これだけで満足しうるものでない。われわれの関心は南樺太にまで及ぶ。

(6) 日米経済協力問題

ダレス氏は日本経済への援助の続行についてアメリカにその意志あることを表明した。それはのぞましいことである。しかし駐兵、基地、共同防衛、太平洋集団保障などの提唱と経済援助の提唱との間にはアンバランスがある。前者の比重の方がずつと大きい。日米経済協力問題はワシントンでも放送され、一万田日銀総裁の帰国報告にも見えてゐるが、日本の経済力をアメリカ軍拡経済の一環たらしめるだけであるならば、日本の資本家の利潤の増大に役立つかもしれないが、日本経済の自立とか日本人の生産物をもつて日本国民の生活水準を引上げるとかいふことにはプラスにならぬであらう。我々は日本の自由と独立との回復を何よりも念願するがその本質的な前提は経済の自立である。日米経済協力問題も我々側としては日本経済の自立といふ基本テーマを中心として一切を思考すべきである。

第五章　日本人の中心的価値観念の崩壊とその再建

一、日本人の精神までの武裝解除

日本は敗戰によつて完全に武裝解除された。それは日本人自身の意志に基いたもののやうに説明されてゐる。しかし事実はさうでない。嫌応なしに武裝解除させられたのである。憲法第九条の戰争放棄規定は日本人の創意によつてできたものでなく、アメリカ占領軍当局が英文で起草したものを終戰直後の自主的気魄を失つて茫然自失してゐた議員どもが鵜呑みにしたものである。鈴木茂三郎氏はダレス顧問にあたへた要請書に熱情こめてこの規定が自由且つ正当に選挙された国会において日本人が自主的に創案したものだと書いてゐる。外交辞令または外交カケ引きかもしれないがこれは明白な嘘だ。この規定自身は理想主義的香りの高いよい規定である。しかし国家があれば一定程度の武裝力があるのは古来さうであつたし、今でもさうである。善悪の批判をこえて軍力は国家の一つの属性である。自衛的武裝力のない国は国家生活を解体したのと等しい。我々の真摯な反省は憲法の戰争放棄規定の制作事情をありのままに反省することから始まる。敗戰後の日本の国内治安と外敵防衛はアメリ

カであらうがどこであらうが、とにかく軍力が日本を防衛したのである。朝鮮の戰乱を目の前にして日本の大衆はいつ外敵に侵入され国土を荒されるかもしれないといふ不安にかられてゐる。世界の人類と苦しみを分ち合はないで日本だけ無風地帯にゐたいといふ虫のよいニセの平和主義のまぼろしがシャボン玉のやうに消えうせつつある。

この現実の武裝解除よりもつと恐ろしいことは精神上の武裝解除状態である。敗戰によつてわれわれ日本人は中心的価値観念を喪失した。明治以来の天皇制は古代的な神秘主義で装飾された封建的権威主義の制度だつたが、日本社会の細胞たる家族制度における家長主義や、日本人の国家にたいする熱情や忠誠を媒介としてできあがつてゐたが故に、一つの中心的観念としても機能してゐたのである。戰後の憲法において天皇は象徴的存在となり、非合理的な神秘性がなくなり、また戰後の天皇の現実の動静はかなり国民の幻滅をひき起した。われわれも必要とする合理主義精神すらみて、もはや天皇制は国民の意志を集中する制度としての魅力を失つた。しかしそれと同時に日本人はいい意味における国家主義にたいする熱情をも失ひ、少くともそれに懐疑的になつた。世界とか人類とかも大切なことだが、国家は色々の欠陥を伴ふにしろ今日の世界においてなほ人類の最も能率的な組織形式である。国家に対する熱情を失つた民族は亡びる。民族が亡びるとは死に絶えてしまふことではない。他国の奴隷となることである。

読売の時事川柳に「大体日本人は、とこれも日本人」といふのがあつたが、これは日本人が中心的

価値観念を失つて、その悲惨に堪へず、互に批判しあふ浅ましい有様を皮肉つたものである。自分も日本人に外ならぬから、日本人を非難することは自分を非難し、自分に絶望することである。我々は早くこんな泥沼から脱したいものだ。

戦後におけるわが民族の精神的武装解除、すなはち中心的価値観念の喪失のすがたを反省してみよう。

自己信頼や主体性を失つた民族や個人に特徴的にあらはれることだが、今日わが国では日本の過去の精神的伝統やモーラルにたいする懐疑や無批判の否定や嘲笑が行はれてゐる。民族といふ言葉をきくと怖毛をふるふ者がある。これまでの道徳をふみにじることが何かえらいことをするもののやうに感ずる者がある。懐疑とか絶望とかいつてもニヒリズムのやうな哲学に成長しうるほどに深いものでなく、世俗的な自暴自棄や絶望心理にすぎない。

人生にとつて本能が健かであることや、それに根ざした勇気や意志や行動力の方が単なる理知より百倍も大切なのだが、敗戦後の日本人には勇気が否定され、本能が弱化又は退化し、退歩的な幸福主義が文化的だと考へられ、玩物喪志的な知識主義が流行してゐる。重点は自己にあらずして対象にある。知識人のなかでは日本は亡びても世界平和ができればよいなどといふ暴論をのべる者がある。日本が亡ぶことは世界から一つの自由が亡ぶことだ。平和の本質は自由にある。日本の自由を亡ぼして何で世界平和に貢献することがありえよう。観念の世界と政治の世界とはいくらか次元を異にしてゐ

る。非現実の観念が直ちに現実の政治の準則となるがごとき幻想の横行するのはこれも日本人の途方にくれた精神生活の一断面である。

幻想によるあはれむべきごまかしがある。武装解除されたのに自ら武器を放棄したかの如き幻影を描き、臆病で利己的な厭戦感情が平和主義を詐称する。理想と現実を分割し幻想と自己偽瞞のいりまじつた痛ましい滑稽な姿が今の日本にある。平和国家だの文化国家だのといふ美しい言葉が氾濫してゐて、もうすぐそれが実現できるかの如き幻想がある。外国の軍力で保護されてやつと国内治安が維持されてゐる実情をありのままに観察するのをこはがつてゐる。官能的な享楽主義や酔生夢死的なエゴイズムが氾濫するが、それは生の豊饒を意味するものでなくかへつて生の貧困を表現する。自信を失つた絶望的人間が簡単に走つてゆくのは感覚的享楽である。日本の生産力にくらべてみて享楽的な施設があまりにも多すぎる。アメリカのやうな感覚文化の国でさへストリップショウのやうなものは場末にだけあるのだが、日本では東京の都心に堂々と行はれて怪しまれない。いはゆる戦後派青年男女の無鉄砲な恋愛や犯罪は人間の常識では測定できないもののやうだ。自分の国家や社会に絶望した人間は当然個人主義に陥る。全体とのかね合ひで個性を発揮する健全な個人主義ではない。他人を犠牲とする我欲で、孤独地獄のやうな荒涼たる心境である。

劣等感や植民地根性も繁茂してゐる。敗戦は日本人に劣等感をうゑつけた。自国を信頼しえなくなつた多くの人間は或は一部資本家の如くアメリカ資本に隷属することに生き道を発見しようとし、或

は共産党員の如くソ連を主人と仰ぎ日本をそれに売り渡さうとする。日本はフィリッピンのやうな歴史のない国ではない。又アジア諸国は今や植民地的地位を脱して独立しつつある。しかるに逆に日本人はだいぶ心理的に植民地根性になつてゐる。

政治規律の崩壊も我々に暗い思ひをさせる。十年くらゐ前までの官吏は賄賂をとつたり国民の税金を宴会に乱費するやうなことをしなかつた。そんなことがあれば厳重に処罰された。今は官吏の間にそんな規律がなくなつてゐる。政党は国民にたいする責任よりも党利本位で行動する。健全な国家的感覚が急に衰へた。

昔あれほど国家や民族を愛した日本人がそれを失つて精神的に大きい空虚を生じてゐることに、われわれは自ら傷まざるをえない。政治屋はあつても政治家はない。戦後の民主主義的改革にして不幸な戯画に終つてゐるものの少くないのは、民主主義の出発点たる個性の強さが以上の如く精神的空白に陥つてゐる民族の間に成立の仕様がないからである。これでは世界史の動向に慧眼であつたり、人類にたいする高い義務観念が生れたりすることもありえない。戦後日本に渡来した外国ジャーナリストが書いた日本人にたいする多くの嘲弄文は、その浅薄な識見に拘らず、しばしばわれわれの痛いところを衝いてゐる。浅薄なかれらからも容易に嘲笑されるほどに我々は精神薄弱症に落ちてゐる。

朝鮮戦争の進展いかんによつて或は将来中共の空軍の来襲がないとはかぎらない。日本にはアメリカの軍事基地があり、また日本で所謂特需として軍事資材の生産が行はれてゐるのだから、中共軍が

アメリカ軍力を牽制するための日本空襲はありうることである。在日のアメリカ軍の大部分は朝鮮に出動したさうだし、日本自身は無武装であるから、日本空襲は軍事的に大きな効果があるのみならず、また精神的無武装である国民を動揺させる心理的効果は非常に大きいであらう。今日のやうな精神的無中心状態にある国民にたいして外部から強打が加へられるならば効果は百パーセントである。侵略者にとつてこんなあつらへ向きの餌食はない。

日本の対外政策は親露、親米、親アジアの三つのカテゴリーしかない。今日では親米コースが圧倒的である。今日親露コースをとる者は明治の政治家があくまで日本を中心としたやうな毅然としたところはなく、共産党のやうにソ連の奴隷となるつもりのものや、社会党の一部のもののやうに恐露病にとりつかれてゐるものもある。だから朝鮮戦争の長期化するのにつれて一部日本人の心理はますます混乱しどつちつかずの態度をとつてゐるのが一番利巧だと考へる臆病な自己保身主義的な首鼠両端派がかなり殖えた。親アジア政策のコースは未だ弱い。かやうな国民の精神的混乱のなかにおいては何よりも再び中心的な価値観念をもつことが要請される。日に国家の独立を唱へる者は多いが、自尊心と自発性をもたなくて国家の独立を希望してみたところでできるはずがない。精神的な拠りどころのない国民が軍事的に再武装したところで傭兵にも劣つたものにしかなれないだらう。われわれは何よりもまづ精神的再武装を必要とする。アジア諸民族が言語に絶した苦しみに耐へ抜いて、今日形式的であつても独立をかちとりえたのはその自主性の故である。日本が親アジア政策をとらうとしても

自主性のない民族をアジア人が友人だとおもふわけにはいかない。

右のやうに戰後他愛なくといへるほどにあまりに容易にわが民族の中心的價値觀念が崩壞したのはなぜだらうか。実は私はそれが徹底的に崩壞してしまつたとは思つてゐない。崩壞は上ッつらなのだと思つてゐる。もし中心觀念が徹底的に崩壞したとすれば民族の自殺であるが、決してまだ自殺してしまつてはゐない。日本人のシンはまだ大丈夫なのだ。しかし上ッつらにせよ、上記のやうに中心的價値觀念の崩壞はずゐぶんひどい。その理由を反省してみよう。

第一は元来日本人の個性が強くないことである。国家にたより切つて生活してゐた日本人は中国人のやうに個性が強くない。敗戰といふ大きな暴風雨がくると圧倒されて右往左往せざるを得なかつた。

第二は戰時中の非人間的な軍国主義に対する反動である。上から強力で人間を機械的に統一する全体主義は健全な自己反省の能力をほろぼした。この全体主義に対する反動が在来の價値觀念の否定としてあらはれたと共に、又戰時中からの批判力の喪失がひきつづいて無鉄砲な放縱を生み出したのである。

第三は敗戰による経済的窮乏と生活不安である。潜在失業者が都会や農村に満ち、生活水準は戰前の八〇%くらゐしか回復してゐない。種々の美しい民主々義改革も経済的うらづけがないから実効が

あがつてゐない。これも人を懐疑や自棄自暴にみちびいた。

第四は世界政治における米ソの絶望的な対立の影響である。日本は米ソの衝突する世界的地点の一つである。ソ連は日本におけるアメリカ勢力をくつがへし日本の生産力や人口資源を手にいれたいと熱望し共産党を手先に使つてゐるが、アメリカはもちろん日本をソ連に渡すつもりはない。日本の国力は衰頽してをり、二大強国の圧力をはね返すだけの力はない。第三次世界戰争になれば日本は忽ち戰場となるだらう。かうした危機感や絶望感からして或は刹那的な享楽主義に走つたり或は二大強国のいづれかに隷属しようとする心理になつたりする。この自主性の喪失があるかぎり植民地的心理の生れるのはさけ難いところである。

第五は戰後に上から急速に機械的に導入された民主主義改革が個性の尊重や強化をもたらさずして却つて混乱を大きくしてゐることも数へねばならない。戰後我国の民主化は敗戰によつてもたらされたもので、いはば敗戰民主々義である。敗戰民主々義の特色は、国民の固有の組織性が必要以上に解体させられたことや、経済的基礎や風土的差異や民族の特殊性を無視して、戰勝国の意志によつて上から大量生産的に導入されることや、敗戰によつて貧小化した経済がそれに応じ切れないことなどにある。日本が近代化を徹底するためにはどうしても民主々義が必要で、進歩的な人たちはこれにだれも異論はないのだが、敗戰民主々義は形式倒れになつてゐることが少くない。自由と放縱とをとりちがへてゐる現象がいたるところにある。ちかごろ世を驚かした共産党系学生の指導下の暴動に近い学

生運動は、朝鮮戰爭に際してアメリカ勢力を牽制しようとする國際的背景をもつた深刻な運動だが、こんな運動の可能であるのは、非民主的な運動も自由にやらせるのが民主々義だといふ不合理な考へがあるからである。大学生は教授をお前呼ばはりにしたり、小学生は叱る先生を非民主的だと呼んだりする。教育基本法や教育委員会などの燦然たる民主的な教育制度ができても実情では上記のやうな無茶なことがある。あへて教育にかぎらず、地方自治でも警察制度でも裁判の実際においても敗戰民主主義の矛盾がいたるところにある。民主々義は強い個性を基礎とし又それを培養せねばならぬものである。しかるに現在は制度は立派だが植民地的劣等感が基礎になつてゐる。民主化を真の姿に作り直すことが何より急務だ。

二、戰前までの日本人の生活精神

われわれはここでわれわれの生活精神が本質的にかくももろいものであつたかどうかを反省してみよう。

元来、個人でも民族でもおのづから定まつた目標をもつて生活するものである。決してゆきあたりばつたりに毎日々々を暮してゐるものでない。人間は短い一生をできるだけ強く美しく生き貫いて自己の生命を外部に発揮しようとする燃えるやうな生の衝動をもつものである。人間にとつてまづ大切

なのはこの衝動と勇気である。この本能の弱い又はその退化した個人や民族は敗北者となる。しかし勇気は大切だがそれだけでは足りない。人間は自分をとりまいてゐる自然や自分の住む社会環境にたいして一定の解釈をもち、どうすればこれを善美且つ有用ならしめるかといふ理想をもち、これを実行基準とするものである。この理想、実行基準となる觀念を中心的価値觀念といふ。

民族は長い歴史の間にでき上つた人間の共同生活団体である。先祖代々の業蹟が積りつもつて民族の生活を作り出す。民族はそれぞれ特有の中心的価値觀念をもつてゐる。何が善で何が悪であるか、何が正義で何が不正か、何が真理で何が不眞理か、何が貴く何が賤しいか、何が美しくて何が汚いか、何が礼儀で何が無礼か、かうしたことにたいする判断がおのづから決定し、それが民族の生活の基準となり、更にひいてそれが民族内の各個人の生活の基準ともなるのである。

わが日本民族が国家を作つて歴史生活に入つたのはたぶん西暦三世紀か四世紀であらう。本州や九州や四国が一つになつて統一的な社会生活がはじまつた。奈良朝時代になつてから中央集權国家ができ、それより後に京都文化を中心とした平安朝や鎌倉時代の封建主義や、国際的空気の強かつた戰国時代や、徳川時代の反動的封建主義などを経て、我々の祖父くらゐの人たちの手で明治維新の革命が行はれ、日本は近代的な社会構造や近代国家に入つた。我々の先祖の悲喜こもごも至る生活闘争がつみかさねられて日本民族ができあがつた。日本社会の発展はわりあひに順調で、この間に民族の世界觀や社会觀がおのづから養成され、自然にたいする愛、国家への忠誠、勤勉と労働の愛好、巧細な技

術感覚、活動心、勇気の尊重、報恩感謝、義理人情、礼儀などの生活基準ができあがり、この伝統のなかでわれわれはこれまで安んじて生活し、われわれの自主性を失ふことなしに外国のもろもろの進歩的な制度や思想を研究したりとり入れたりしてきてゐたのである。

しかるに日本は大正時代に入つてから帝国主義の邪路にふみこんだ。元来、日本民族は、不法な侵略にたいしては毅然として自己を守り、自衛のためには戦争を辞せざる勇気をもつてゐたが、侵略的民族でなく、平和を愛好する性格をもつてゐる。それが大正時代から排外的利己主義や貪慾心にとらはれて西洋帝国主義の尻馬に乗りアジアの同胞的な民族を侵略する愚かなことをやつた。日本の伝統的な中心的価値観念はそろそろ大正時代から崩れはじめてゐたのである。満洲事変から第二次世界戦争に至る過程において軍国主義一本で国民の精神及び生活を統一する非人間的なことが行はれ、それが未曾有の敗戦の衝撃をうけるにいたつて、ここにわが民族の中心的価値観念の大規模な瓦解がおこつたのである。だから突然敗戦だけによつてそれが生じたのでない。

三、新しい中心的価値観念の再建のために

しかし世の中に絶対に悪いことだけがあるものではない。今日、日本人が中心的価値観念を失つて精神的無政府状態にあることは、考へやうによれば、新しい価値観念をさがし求めてゐることを意味

し又そのための試煉でもある。今日の苦悶は明日の新しい信念を生み出すための過程でもある。絶望する必要は少しもない。今日の屈辱きはまりない精神的空白は一つの試煉であるからこれを憎ます、これに絶望せず、一時も早くこれを脱却して、新しい中心価値観念、新しい生活精神を創造したいとおもふ。これはわれわれ自身のためであるのみならず、又世界の進歩のためにもなることだ。日本人のやうな相当すぐれたところのある民族が今日のやうにだらしない精神状態にあることは世界にとつて不幸なことであり、世界の進歩のためにもわれわれの健康な精神をとり戻す義務がある。

新しい中心的価値観念の創造、それにもとづく新しい日本の再建、これは実にわれわれを奮ひ起させずにおかない課題である。日本人がみな一緒になつて考へ且つ努力せねばならぬことである。私も日本人の一人としてこれに関する意見を提出する。

1　わが民族の精神的伝統を再検討し継承発展すること

一民族には自然や人生や社会に関する固有の精神的な考へ方がある。それはその民族が長い生活闘争のなかで獲得し蓄積した伝統で、民族内の個人の精神生活は大なり小なりその基準にしたがふのである。

わが民族の精神的伝統のなかにはずゐぶんマイナス的なものもある。いいことでも悪いことでも上部の命令に盲目的に服従するといふ悪権威主義がある。よい命令に服従することは社会生活の秩序を

正しく発展させるのに必要なことだが、悪い命令でも服従するのでは個性の尊厳はありえず、正しい社会的発展もありえない。又日本人には附和雷同の社会心理があつて、悪煽動家に容易にあやつられたり、集団となれば常識で判断しえない暴行をしたりする。戦地の軍隊のうそのやうな暴虐な行為は残念ながら事実であつたし、労働争議において生産設備破壊のやうな無茶なことも時に発生する。昂奮しやすく又さめやすい。学問や技術についてみると模倣は巧みだが独創が少いといふ大きな欠点もある。

以上のやうなことは我々が自覚的に克服せねばならぬところである。しかし欠点は数へてゆけばどの民族にもある。我々日本人の悪いところだけを数へて自己卑下に陥るのでなく、その克服に力めるとともに、わが民族が千数百年の生活闘争のなかで積みあげてきたよい精神的伝統はこれを保存し且つ発展させねばならない。自己反省は必要だが自己に絶望してしまつては自殺するにひとしくなる。

わが民族が歴史生活のなかで作り出してきた哲学、道徳、政治上の才能、芸術、宗教、風俗習慣などが劣等なものだとは考へられない。このよいものには東洋人としての特色が十分出てゐるし、又日本だけで独創されたものもある。それを単に回顧するだけでは足りない。われわれの心のなかに潜んでゐるそれらのものを再びほり出すべきだ。私は日本の精神的伝統のなかで再発掘に値すると信ずるものを次に数へてみる。

第一に日本人の世界観は西洋の観念論や唯物論のやうでなく、宇宙に偉大な生命が充ちてゐて、人

間も自然もこの根源から出で、これを表現するものだといふ汎神論である。東洋人の世界観はたいてい汎神論が基本となつてをり、日本人のそれも十分東洋的である。日本人の自然に対する深い愛はそこに人間と同じ生命の流れを感ずるからである。草木昆虫も人間と同じ生命に根源する。万物は生き且つ美である。西郷隆盛や夏目漱石などのまるで方角ちがひの人が同じやうに則天去私といふやうな言葉を人生の標語としたが、かうした人生観は汎神論的世界観から出るのである。そして日本人の汎神論は生成主義的であることが特色で、生命の本質は生成発展であり、一切は流動するだけでなく限りなく生長するとなすところに日本人の特色がある。インド人の物心一如とか中国の天人合一とかいふ世界観は同じ東洋流の汎神論であるが、日本人のそれほど生成主義的でない。日本人にとつて「成る」ことは同時に「成す」ことである。これは次にのべる日本人の生の肯定といふ人生観と関係がある。

第二に日本人は生を肯定し、現世を愛し、現世で活動し、業蹟を作り出さうとする活動的な人生観の持主である。人間世界を苦と観じて彼岸世界の瞑想をたのしむ悲観主義的人生観も一つの立場ではあるが、日本人にさうしたことは向かない。彼岸よりも此岸に人間的事業を建設しようとする現世主義、行動主義は、思想的深さを欠くかもしれないが、朗かで、積極性がある。学問も実行のための道具であり、芸術の基調をなすものも万物の生成してゆくよろこびである。

第三に、現世的活動を愛する民族の特色として、日本人は組織的能力が相当すぐれてゐて、それが

民族の統一性や国家生活の秩序性に現れてゐる。民族がいつも一つの組織として行動することは個性の発達を妨げる作用をしたけれども、社会は一つの組織であり、組織性が強くなればそれだけ社会も発達するのだから、日本人の組織性は一つのすぐれた長所である。日本人は愛国心が強い。それが排外主義に悪用されたことがあるとはいへ、本来、愛国心は組織を愛する心なのであるから、それ自身はよいことなので、決して卑下する必要はない。近代世界では国家が社会生活を引きしめたり綜合的に発達させたりする機能がますます増大してゐて、エンゲルスが空想的にのべてゐるやうに国家が死滅するやうな段階は中々現はれさうにない。現代の計画経済や完全雇傭や社会保障のやうな制度は国家が主体とならねば実現できない。日本人の国家生活の訓練や愛国心は今後新しい形で活用できるものである。

第四に、日本人の義理人情とか報恩感謝とか自己犠牲とか礼儀とか勇気の尊重とかのやうなモーラルは千年以上の訓練のなかで作り出されたもので、これは決して保守的なものでない。それらの根柢に西欧のやうな個性の尊重や自由の欠けてゐるのが大きな欠点だが、それはこれから大に修正すればよい。しかし西欧的な個人主義や利益主義の害は既に明かであるから、それまでまねる必要はない。西欧と東洋との土壌は異つてゐるのだから、西欧でできた立派な人類的事業といへども、東洋ないし日本の自主性においてそれを十分かみくだいて移植せねばならない。戦後の民主的改革が日本のモーラルに無理解で、形式主義的に又無作法にそれをじゆうりんしてゐるところのあるのは、戦勝国にと

つてもプラスにならぬことであらう。

第五に日本人の労働への愛やそこから発達した技術的感覚は、過去からのよい伝統である。西欧では産業革命以前の手工業時代の技能主義は既に廃れ、大量生産や科学的労働管理が之に代つて能率をあげてをり、日本もそれから多くを学ばねばならぬが、近代工業における極端な分業や機械化は労働から人間性を奪つた。遅れて資本主義方法を学んだ日本は幸にまだそれほどの極端にまで至つてゐない。封建的な名人芸ではいけないが、労働と人間性を遊離させず、対象のなかに人格を表現する能力はまだ日本人に残つてをり、これは遠からず日本の経済が資本主義から社会主義に転入する際に役立つであらう。

日本の民族性や精神的伝統にいろいろのマイナス面のあることは前にのべた如くで、それを自覚的に克服せねばならぬが、以上にのべた汎神論的世界観、生の肯定、現世主義、組織性、愛国心、義理人情その他のモーラル、労働の愛好、技術的感覚などは長い修練を経てできあがつたもので、決して劣つたものでなく、これを継承発展して近代化し、新しい日本社会を築く精神的動力とすることができるし又せねばならないのだ。古いことを顧みるのは、そのなかに流れてゐる新鮮な生命——それは己れ自身の内部のことである——を再発見し、現在及び将来のヨリ高い発達に備へるためだ。時勢や外力に迎合して自己固有のものまで否定するといふのは憐むべき奴隷心理である。われわれはわが民族の世界観やモーラルや習俗の価値ある本質的部分を再把握しその生命を継承したい。

2　新しい民族主義

もとより世界は刻々と新しくなり、東洋と西洋がよいものを出し合うて世界の統一的進歩を形づくることも撓むことなく行はれてゐる。日本の精神的伝統を保持しつつも新しい環境のもとで新しい生活精神を創造してゆかねばならない。その原理となりうる第一のものは民族主義である。

戰時中に民族といふ言葉が日本の大衆を昂奮させた。この言葉や概念を悪用したのは軍国主義者だつたが、しかしそれから離れても民族は大衆を昂奮させるだけの或物をふくんでゐるのである。戰争がすんでから民族といふ言葉をさへ嫌がる者が出てきてゐる。敗戰のもたらした観念的ゆがみの一つである。民族は近代に大きな役割を演じた進歩的な要因の一つである。それは単に意識とか感情とかにとどまらず、現実の政治経済上の単位である。ヨーロッパの近代国家はすべて民族国家として成立した。アジア諸国では民族主義が最大の精神的動力となつて植民地半植民地の屈辱的地位を脱することができた。近代世界では民族は階級と並ぶ二大現実条件で、両者の統一が世界史の現在及び今後の根本課題なのだが、両者の比重は時と所とによつて異つてゐる。

国家の独立のない今日の日本では民族の方が階級よりもはるかに高い比重をもつてゐる。国家をもたない民族は近代世界で劣等な地位しか与へられない。今日の日本の精神的混乱は日本人が本来そんなに精神的に薄弱であるからでなく、明治維新以来誇りを以て築きあげられた国家生活の土台が一ぺ

んに崩れたからだ。

民族主義の第一要求は独立国の形成である。外部の力によつて内政を干渉されず、自らのことを自ら決定し、特に外交権及び自衛力について独自性をもつところの国家がなければ、民族の自主性は確保せられない。近代国家の主権概念は唯一、最高、不可分、絶対などの属性をもち、それだけ各国家内部の緊密な発達を助けたが、各国の主権相互が恰も中世封建社会のやうに排他的に対抗し合ふ状態は、ますます世界化しつつある経済の動向と相対的に逆行するもので、将来は各民族や各国家を構成要素とする世界共同体が成立するであらう。現在の国連や世界連邦運動は完全な世界共同体の実現のための過渡的な諸要素である。しかし世界共同体においても各民族が独自性をもつてゆくことがなほ必要であらう。世界とか人類とかいふ概念はまだ具体的なものでない。それは民族といふ現実要素を媒介としてできあがる一般概念である。自らの独立的存在を放棄するやうな民族は忽ち強国の餌食となりその奴隷となる。十九世紀の英国帝国主義の一代表者は、天国において奴隷たるよりも地獄において主人たることを選ぶと豪語したといふ。この言葉には他民族抑圧を肯定する惨虐な精神が躍動してゐるけれども、奴隷生活をする被圧迫民族の悲惨をも語りえてゐる。民族主義の第一要求は自主性であり、その具体化は独立国家の獲得であり、したがつて民族主義は国家主義とつながる。

しかしわれわれは帝国主義の過誤をかしその結果敗戰の苦悩を喫するといふ貴重な経験をしたのであるから、われわれの民族主義には次のやうな新しさがなければならぬ。それは他民族との協働の

精神である。各民族の民族性は種々異つてゐるけれども、それらの基礎に一般的な人間性即ちヒューマニチーが在ること、又なければならぬことは明かである。個人や階級の自主性が無制限に許されたならば社会の調和的発展がありえないと同様に、民族の自主性も無制限でありえない。相互の自主性を尊重し合ひながら調和的な発展が計画されるところに世界協同体の基礎があり、それによつて世界の全体的調和が見出される。われわれの民族主義はかやうな目的を忘れないであらう。

一般的に社会主義は民族の生活要求として先づ現れ、その具体化のために国家を要するのである。しかるにヨーロッパの民族主義や社会構造は東洋のそれとかなり差異があるから、それは両者の社会主義にも異つた特色を生み出すであらう。

ヨーロッパ社会とアジア社会との重大な差異は前者が利益主義的で後者が協同主義的であることである。利益主義は排他性をもたざるをえぬ。ヨーロッパ社会の作り出した資本主義にも、社会主義（ソ連や英国）にも一貫して排他的な民族主義の特徴がある。東洋の社会主義は強烈な自主性を要求する国家主義をもつにしても、排他的な民族主義によつてでなく、少くともアジア諸国相互間においては、協同的な民族主義によつて結ばれるであらう。

ヨーロッパの民族主義はヨーロッパ諸国相互間においてすら排他性が強い。今日の西欧諸国はソ連の脅威に戦慄しつつも、相互の利害関係に拘泥して完全な共同防衛体制すらまだ十分できず、明かに必要な西独再武装にすら躊躇し、諸国間の通貨、投資、運輸、関税等の障壁さへ除去しえずにゐる。

すべて利益主義的な社会構造原理からもたらされたものである。アジアの民族主義は西欧資本主義の圧迫に反抗することによつて促進されたが故に多少とも復讐的な心情にかられてをり、その運動形態は一揆的要素を含んでゐるが、アジア諸民族は運命共同体的共感性をもつからだけでなく、その社会構造の協同主義的原理からして、アジア諸国間の国際的結合（たとへばアジア連合といふ言葉で表現しうるごとき）を比較的容易に作り出すだらう。

日本はヨーロッパ的生産方法や政治制度や思想を輸入したために、その民族主義にはかなりヨーロッパ的なものがつきまとうてゐた。もとよりヨーロッパ文化のよいところは吸収せねばならないが、東洋人たる日本人の民族主義は今後その本性に返つて、協同主義的な特色を基本的なものとせねばならない。過去の体験はわれわれの民族主義を謙虚な、心ひろき、国際的で、協同主義的なものたらしめるであらう。われわれは自覚的にこの道を選ぶべきで新しい民族主義のありかたを世界に示すことが日本の今後の生き方である。

3　東洋的な社会主義

対外的独立だけでは十分でない。国内改革と相伴はねばやはり民族主義は排外主義的なものに終る。国内改革も民主々義だけでは十分でない。世界史の大勢たる社会主義が日本再建の中心観念とならねばならない。

又日本の社会主義は西欧の英国型社会主義やドイツ型社会民主主義やソ連型の共産主義のモノ真似であるべきでない。社会主義は一民族がその社会的進歩のために必死必生に敢行する生活必要事で、社会主義のために社会主義を実演するといふやうなのん気なものではない。日本の社会主義は日本の社会構造の特徴、生産力の発展程度、人口、天然資源、世界経済における地位、アジア諸国との関係、精神的伝統、国民の気質等の諸条件に適合したものであることを要する。

日本社会主義がいかにあるべきかは大きな問題だから別に論ずべきことで、ここでは二三の重要点を指摘するだけにとどめる。

社会主義は単なる実際政策でなく、社会の根本改造を目的とするのだから、それを基礎づけるだけの思想がゐる。思想に大切なことは世界観的基礎すなはち自然、人性、神、善悪、美醜、真理不真理等の根本問題にたいする統一的知見の具つてゐることである。たとへばマルクス主義には唯物史観といふ世界観的基礎があつて、その土台の上に全理論構造ができあがつてゐる。日本や東洋の社会主義はその精神からみて唯物論を借用することはできない。自然や人間が同一生命根源から出てゐるとみる東洋本来の汎神論的世界観が基礎にならねばならぬであらう。

西洋社会主義の経済学や社会学はその歴史的な社会関係からして功利主義や欲望主義や闘争主義が中心となつてゐるが、日本人や東洋人は協同社会的な構造のもとに生活してきてゐるから、利害衝突や闘争の契機よりも協同主義が経済や社会組織の基礎となる理論ができねばならぬだらう。

日本にはさうたうに生産力が発達してゐるから、社会主義的な計画経済や重要産業の国有や完全雇傭や社会保障を実行する素地があるが、他方において中小企業が多く、それは生産にも国民所得にも大きな関係があり、又農業では家族労働を基礎とした経済形態が支配的だから、公式的な国有制度はそのまま実行せられない。又計画経済の母体たるべき国家の官吏にはアジア官僚的な保守性が強い。広汎な民主々義の精神及び制度が日本の社会主義の基礎とならねばならない。

これまでの諸外国の社会主義の実験はまだ十分でない。社会主義時代はむしろこれから始まるのであるから、各国とも自己の事情に応じて独創的な特徴を作り出すべきである。普通の経済学者のなかでもランゲの自由主義的社会主義やバローネやディキンソンの競争的社会主義やミードの自由制社会主義やハンセンのミックスド・エコノミー（混成経済）の如く、資本主義の修正や、自由主義をとりいれた社会主義のありかたを説く者が現れた。これらはこれまでの社会主義思想に改善や修正を加へる余地のあることを示唆するものであると共に、資本主義を生き抜いてきた国に現れざるをえなくて現れたものである。日本の社会にはまだ非近代的部分が残つてゐるのみならず、西欧的社会とは構造原理が違ふのだから、これらの説もただちに日本で規範となりうるものでない。すべて西欧的なものに飛びつく前に我々はまづ自らの特質を知る必要がある。

どの国も孤立して生存することはできない。天然資源の乏しい日本に生れた我々は特に国際人として生きてゆくべきだ。世界にはなほ多くの矛盾や不平等がある。均衡なきところに調和的発展はあり

えない。今日でも東洋はなほ西洋の抑圧下にある。東洋と西洋とが均衡を回復することが世界の進歩のために欠くことができない。日本はアジアの一国で、その社会も歴史も文化も東洋的範疇に属してゐる。今日アジアの国々は工業化と農業革命を本能的に要求してをり、それは資本主義方式では間に合はず、特種の社会主義方式がなければならぬ。東洋的社会主義といふことは悠遠な課題の如くにして実は具体的必要に迫られた問題である。それは西洋的社会主義と異つた多くの特色をもつだらう。その実現にはアジア諸国の協力が必要且つ可能である。日本の社会主義者は西欧やソ連の社会主義の模造品を作るのに多忙であるべきでなく、アジアの諸民族と共に東洋的社会主義としての特色を出すことに心を砕くべきである。

社会主義は実は政治経済上の革命だけでなく、精神革命、ひいては人間性の革命にまで及ぶものである。従つて世界観が根本問題となる。西洋の社会主義の世界観的基礎をみると、マルクス主義のそれは唯物論的歴史観であり、ドイツ社会民主主義のそれは緩和されたマルクス主義理念であり、英国社会主義のそれは経験論と功利主義倫理であり、ソ連共産主義のそれは原始マルクス主義にロシア的神秘主義の加はつたものである。われわれは洋服を着るやうに西洋社会主義の世界観までを踏襲することはできない。人間、社会、自然を統一的なものとして理解する世界観的要求は純粋知的なものよりもむしろ生活の意味をつかむための実践的要求であり、単なる客体の分析でなくて、主観的な価値発見である。自然、人性、神、善悪、美醜、真理不真理等の問題から社会、国家、民族、階級などに

及ぶ世界観の体系は東洋と西洋の社会環境や人種的特殊性によつて、自づから大きな差異ができてゐる。東洋の世界観の根本的特徴は物心を一如とみる汎神論である。（それが堕落すると人間と自然との直接的統一、即ち人間を自然の中に沒入させ、社会的活動を停滞的ならしめることがある。）しかし西洋唯物論のやうに自然を死せるものと理解することは到底東洋人にはできない。唯物論は東洋や日本の社会主義の世界観的基盤でありえない。アジア人は万物を生き且つ美なるものと観じ、それに生命を感じ、矛盾よりも均齊を貴ぶ。かやうに異つた世界観から出発する東洋の社会主義は現実の社会構造の設想においても西洋の社会主義における利益主義や余りに窮屈な合理主義から解放されたものとなる。

四、敗戦民主々義の再整理

日本人現下の精神的混乱を整理する一つの手段は戦後の民主主義改革を再検討することにある。もはやその時期がきてゐる。

現代においてはイデオロギーや制度さへ工場生産の如く大規模に機械的に且つ規格を統一してスピードアップして生産することができる。政府機関、民間団体、新聞雑誌ラジオなどの協力によつて、大衆の意志を統一できる。大衆の自発性の生長はやや長い期間を要するものなのだが上記の場合では

しぜん自発性が、作りあげられる観念や制度に後れる。（この手段を最も露骨に用ひたのが「ファシズム」で、現在では共産主義がそれをやつてゐる。民衆の批判心の余地なからしめて大急ぎで上から一定の観念や制度を強要する。）

日本の社会が真に近代化するためには封建的残物を除去し急速に近代民主主義の完成された観念及び制度を植ゑつけねばならなかつた。戦後の諸改革はこの目的のために上記の大量生産方式を採つた。先づ型を与へ、それを通じて内容を充実しようとする方法がとられた。形式の充実が内容の充実であるかの如き錯覚もおこつたが、とにかくこの方法は一定の成功を収めた。政治における天皇制の象徴存在化、議会の最高優位、婦人参政権、政党活動の自由、リコール制にまで及ぶ地方自治体の強化、自治体警察、現役人の試験実施、経済における財閥解体、集排法、反トラスト法、農地改革、農業協同組合、税制改革、自由経済の再確認、社会における労働組合、言論の自由、八時間労働、罷業及び示威運動の自由、家族制度改革、新刑事訴訟法、文化における六三制、各県大学、宗教法人等々、実に日本の政治経済、文化の構造はこの六年間にはほとんど一変した観がある。この改革が日本社会の近代化のために大きな貢献をしたことは疑ひない。個性の自覚は少しは根強くおこり封建的盲従癖が少しは減つた。民衆は多数決主義の妙味を悟りはじめ、意見の発表に興味をもちはじめた。封建的機構の破滅は進歩的機構への糸口となつた。

しかし他方において形ばかりに終つてゐるものも少くない。マッカーサー元帥の常に力説した如

く、民主主義は個性の自由を基礎とするもので自尊心と共に社会的責任を自覚するところの強い個人のないところに真の民主主義は発展しえない。これは日本では一朝一夕になかなかできぬことである。まだ封建的権威主義に服従する心理が強く残つてゐる。むしろ権威に服従する封建主義によつて民主的制度の形成が促進された面がある。しかし今日真に民主主義が日本に十分根を下ろしてゐない理由はあまりに大急ぎに大量生産的になされたことや、日本人に封建的権威主義がなほ強く残つてゐることだけにつきるのでない。そのほかに次のやうな理由を数へることができる。

第一に民族に自主性が与へられてゐない場合に個人の自主性だけが強く発達しうるわけがない。民族的独立のあることが民主主義の発達の真の条件である。周知の如く日本ではこの真条件がまだ与へられてゐない。

第二に日本に輸入された高度の民主主義形式はそれを支へる社会的地盤殊に生産力の発達が必要なのだが、日本ではかかる地盤が薄弱であるのみならず生産力を培養することはむしろあとまはしになつた。

第三に日本国家の中央集権制は害悪を生んだけれども、日本の如き小国ではこれを通じて民主主義を確立する方がむしろ能率的である。しかるに一途に中央集権制の破壊が急がれた。

第四に日本の家族制度は保守的要素を含むけれども国民の組織性の中核であり、国民のモーラルの保存所であつたのだが、それを一挙に西欧的な個人主義的家族に変じようとした。一国民のモーラル

にたいしてはもつと慎重であるべきだつた。

第五に日本に輸入された民主主義は、最高度に完成されたものであるが、それはいはゆるブルジョア民主主義としての最高形態であつて、当来の民主主義が多少とも社会主義的モーメントを含まねばならぬことが閑却せられた。

以上のことのために国民の組織性が過度に解体されたり、伝統道徳が破壊され自由と放恣が混同されたり、生産力の発展が却つて阻害されたり、労資間に必要以上の紛争がおこつたり、ソ連第五列的共産主義者をして傍若無人に活動せしめたりする効果を生んだ。プラトンはその「国家篇」のなかで民主主義の強い酒にあまりに酔ひすぎると、生徒が先生を監督したり、家畜が人間以上に自由になつたりすると書いてある。男が女のやうになり、女が男のやうになる倒逆現象は穿きちがへの民主主義の象徴物だがそんなポンチ画が日本のいたるところでおこつてゐる。われわれは戦後の民主的改革の肯定的要素をいかに保存しその否定的要素をいかに整理すべきであらうか。原則的には次のことが考へられる。

(1) 民族の独立を回復することが個性の自覚と強化の真の条件である。

(2) 形式主義はもうたくさんである。その形式も日本の実情に適応したものに改むべきである。

(3) すでにいくらか民主的に生長してゐる日本人に対して上から余りに細かい指導をする時期はすでにすぎた。少くともつと自由に討論せしむべきである。

(4) 生産力のうらづけがこれまで閑却せられた。政治的な自立と経済的な生産力の発展が日本の民主主義を生長せしめる二大条件である。それには自由経済、しかも十九世紀的な小規模企業の自由競争に限局するごとき経済は今後の民主主義にふさはしいものでない。社会化経済的意味をもつた計画経済が必要である。

(5) 国家の中央集権をある程度復活し、これを民主々義の促進力とすることが日本においては必要である。（この政治の集中性と同様に経済における集中性も本質的に独裁に生長するものでない。）国家主義を反民主的とみることをやめねばならない。

(6) すべて日本人の組織性の解体をみちびき出す如き改革は民主々義の名においてなされても真の民主々義からは遠い。国民の組織性を通じ、又それを強化する方法において改革がなさるべきである。

(7) 資本と労働は一応対等的立場となるべきで、犬ころの喧嘩のやうにいつもどちらかが上になつたり、下になつたりするのは困る。

(8) 教育の精神や制度は、国民の伝統や創意をもつと尊重すべきである。

(9) 機械的な三権分立主義、殊に世間知らずの司法官の裁判を絶対化する如き擬制はもはや民主々義の型としてすでに古いのである。国民が司法官を裁判する機構はもつと拡大されてよい。

(10) 非宗教的なもの、シャーマニズム的なものをも、宗教として活動せしめる如き悲惨な宗教法人

制は改革さるべきである。

日本の民主化はアメリカのアジア政策の一環として行はれてゐる。もし日本で民主化が成功しなければ他の場所で成功することはほとんど絶望であらう。故にジェファーソン的精神に徹底し且つアジア社会を熟知した人が指導に当ることが望ましい。蔣介石や李承晩の如き其国の民衆の心を失つた人物や政団を対象とすることは危険である。フィリッピンもアジアの民主々義の模型とはなりえない。インド、ビルマ、インドネシア、インドシナ等の民主々義の処女地は、民族の独立、封建的社会構造の改革、工業化への強い本能的要求をもつてをり、それを資本主義形式でなく、社会主義的方法を以て実現したい衝動をもつ故に、ソ連計画経済に魅力を感ずる理由もあるのだがソ連型独裁政治は決してアジア人の上記の希望を実施することはできない。ここでも民主々義の基盤のうへに社会主義が成長せねばならぬ。しかしそこに民主々義を植ゑつけるに際して西欧の完成品的制度を形式的に直輸入するならば、日本の民主的改革の体験したものより以上の無用の混乱が生ずるだらう。

すべての改革は自発的であるものが貴く、力強くあり効果もあがる。民主々義は日本社会の進歩のために欠くことができない。日本の社会主義は独裁主義によつてでなく、近代的な民主々義の基礎の上に築かれねばならぬ。しかしわれわれの欲するのは形式よりも実質であり、またブルジョア的な民主々義よりも社会主義の種子をすでに含んだ社会的民主々義である。又日本人の組織性を解体するのでなく、その能力を活用し、経済的生産力を高め、その伝統や創意性を生かすが如き民主々義が欲し

いのである。そして日本が自主性を回復することが日本で民主々義を発達せしめる真条件である。われわれは早く民主々義を身につけた近代人になりたいものである。そのためには第一には独立国家をもち、第二には日本の実情に適合した方式を考案し、第三に民主々義を社会主義と結びつけることが必要だ。戦後民主化の再整理は新しい中心的価値観念の創造のために欠きえないことである。

第六章　社會主義と軍備問題

一、軍備についての社会党と共産党

日本再軍備問題は一九五〇年六月の朝鮮戦争勃発以来国民の関心を刺戟してきてゐたが、ダレス顧問の来日以後に問題が具体性をおびるに至つた。再軍備問題は日本の当面する最大の課題である。

かやうな情勢に対して、社会党と共産党とはハツキリ反対意志を表明してゐる。しかし社会党と共産党とはもちろん同一の論拠に立つてゐるのではない。社会党の反対論は、(1)戦争は悲惨であるが故に反対する、(2)再軍備は軍国主義の復活となる、(3)再軍備はソ連及び中共を刺戟しかへつて日本を戦争にまきこむ危険がある、(4)目下のところ日本に侵入する国は想像できない、(5)もし中ソが日本に侵入することありとすれば、そのときはもう、うつ手がない、(6)新憲法は軍備を禁止してゐる、(7)日本はネールの平和主義に参加すべきである、等の論拠に立つてゐる。かかる論拠の根柢を流れてゐるものは、第一は抽象的な平和主義と婦女子的な厭戦感情、第二は国際情勢に対する鈍感と、その自分に都合のよい解釈、第三に敗北主義、第四にはソ連にたいする恐怖心もしくはそれにたいする媚態である。日常的平和と漸進的改良を原理とする社会民主々義はどの国でも大なり小なり国際問題について無原則的な事勿れ主義になりがちであるが、日本社会党はすこしひどすぎる。社会主義よりもブルジョア平和主義のにほひの方が濃厚である。

共産党の再軍備反対論は、社会党の反対論がいはば国内製であるに反し、これは本質的に外国製である。ソ連は国連総会、極東委員会、対日理事会等において、徹底的に日本再軍備に反対し、これをアメリカ帝国主義の野心の産物だとして攻撃してゐる。今日徹底的にソ連の意を体して行動してゐる中共も同様で、去る二月十四日の中ソ同盟一週年記念日に、周恩来外相は徹底的に日本再軍備に反対する意見を表明した。朝鮮戦争以来中共はその全国の機関紙を動員して抗米援朝のスローガンの下に、全面的なアメリカ攻撃の宣伝をやつたが、今や日本再武装反対のスローガンが、これに代る勢ひを示してをり、中国人民の心を外部に転ずるために、このスローガンを集中的題目にしてゐる。中ソがかくも激烈に反対の意志表示をする理由は、第一には日本を完全無武装にしておけば、彼等のアジア戦略の一つの集中的目標たる日本占領に好都合だからであり、第二は過去の日本軍隊の力を回想してその復活に恐怖心をもつからである。軍力万能主義者たる中ソ両国は、現在日本の内部事情が変化して、人民が戦争でなく平和に今後の生き方を見出さうとしてゐることなどを理解しようとしない。実際に、もし日本の再軍備が具体化されるやうになれば、中ソは「先んずれば人を制す」といふやうな思ひちがひをして日本に対する積極的手段を考へるやうになるかもしれないし、さうではなくとも

彼等がこの問題を対日政策上の緊急問題としてとり上げるであらうことは明らかだ。

日本共産党の再軍備反対論は全く右の中ソ両国の意志を代表するものであつて、日本自身の事情から出発したものではない。国際共産主義勢力が、平和を愛するものでなく、軍力すなはち戦争手段を国際政治の根本的な解決方法と考へてゐることは、かれらが第二次大戦後世界の人々が軍備を縮小し、軍需工業を平和工業に転換し、国民の平和的な生活水準をたかめようとしてゐたスキに乘じて、一日もたゆむことなく、大規模な軍備拡張をやつて来た事実が何よりも証拠である。元来共産主義は戦争を否定するものでない。したがつて軍備にも反対するものでない。これは源泉にさかのぼれば、階級闘争を原理とするマルクス主義にでてをり、更に、ロシア的、スラヴ的な征服衝動が加味されてゐるのである。

二、中立を否定する共産党

社会党のいはゆる平和三原則（全面講和、中立、軍事基地反対）のうち、理窟になるのは中立だけであつて、あとの二つは全く非現実である。しかしとにかく社会党は米ソの対立において、日本の中立を堅持する方針にたつてゐる。しかるに共産党はさうでない。戦後いはゆる野坂コースによつて議会主義的革命を夢みてゐた時代には、かれらの共産主義者としての所信の不徹底と、大衆の平和欲求

に媚態を呈するために、しばしば平和とか中立とかいふことばを弄してをつたが、昨年一月のコミンフォルム批判は、これらの思想をふき飛ばし、純粋ソ連従属的暴力主義的な共産党本来の道にかへり、これにつれて、中立を否定する立場が次第に鮮明となつて来た。社会党が中立を主張するに対し共産党がこれを否定するに至つたこと、これは両党の非常に重要な相異点である。

共産党のいはゆる一九五〇年テーゼには第一次草案と第二次草案とがあり、前者は、主流派たる徳田の執筆したものであり、これに志賀、宮本らの国際派の批判したものを参照乃至反駁して再び徳田が第二次草案をつくつた。この間の理論闘争の過程をみると主流派、国際派の意見の相違がかなり明らかになるが、多くの根本問題において両者の意見が背馳してゐるにもかかはらず、中立を否定することにおいては両者はほとんど完全に一致してゐる。これは不思議なことでもなく、又両派の単なる妥協を意味するものでもなく、中立を否定することは、共産主義者の代表的傾向であることを示すものに外ならない。第一次草案においても、中立主義はあり得ないといふ文句があるが日本の現実条件次第で大衆の中立要求を一応支持するといふ立場をとつてゐるに反し、第二次草案には大衆に中立の不可能なことを納得させ、事実において中立をけとばして、国際人民勢力（すなはち中ソ勢力）との緊密な提携にまで、ひきあげてゆかなければならない、と書いてゐる。即ち米ソの対立において日本は決定的にソ連側に立つてアメリカに反対すべしといふのである。反米闘争を最大の方針としてゐる彼等にとつて、中立主義のありえないことは論理及び事実の必然である。またかれらが中立に反対す

るのは、中立の概念の含んでゐる平和主義に対するかれらの嫌悪を表現するものでもある。

この問題に関する共産党および社会党の態度の差異は労働組合にも反映してゐる。総評系統の労働組合が大体社会党の平和三原則のコースに沿うてゐるのに反し、共産党の指導下にある、もしくは共産勢力の残存する旧全労連系の諸組合は、全面講和、軍事基地反対、再軍備反対等のスローガンをかかげてゐるが完全に中立のスローガンを削除してゐる。

三、戦争に関する共産党の見解および戦術

十九世紀来の社会運動史において、平和問題よりもむしろ戦争問題の方がより多く、且つより熱心に論議されてきてゐる。マルクスは決して戦争を否定する態度をとらなかつた。彼は戦争には進歩的なものと反動的なものがあり進歩的な戦争には進んでこれに参加せよといふ態度をとり、ヨーロッパの民主々義をおびやかす反動的ロシアを打倒する戦争を組織せよと唱へたほどである。かれは普佛戦争に際して、この戦争はヨーロッパの反動政治の支柱たるナポレオン三世を倒し、且つ分裂せるドイツの民族的統一を実現するものだとして、その生国ドイツの戦争を支持した。元来、非平和的な階級闘争主義に立つマルクス主義は自然、戦争手段を肯定するものでもあつた。更にレーニンは第一次大戦の勃発するや、「帝国主義戦争を内乱へ」、「自国政府を敗北せしめよ」等のスローガンをかかげ、或

程度これをロシア革命において実現したのである。共産主義者の戦争観は一般的にはマルクス、具体的にはレーニンの思想を継承するものである。第三インターナショナルは一九一九年にレーニンこれを創設し、一九四三年、スターリンがこれを解散する迄約二十三年間継続したのであるが、この間における七回の世界大会及び十数回の執行委員拡大総会等においてつねに戦争問題が議題となり、とくに一九二七年五月の第八回執行委員拡大総会、一九二八年八月第六回世界大会、一九三四年七月第七回世界大会等においては、精密なる戦争問題テーゼができてゐる。これらによつて共産主義者の戦争に関する見解および戦術を綜合すれば次の如くである。

(1)　帝国主義戦争は、帝国主義的政治経済の必然の産物である。帝国主義そのものを解除せずして、戦争を防止しうるが如き幻想をふりまく、ブルジョア平和主義の欺瞞を粉砕して、プロレタリアートは階級闘争の延長として、戦時において自国政府の敗北をみちびき、内乱を通じて政権を奪取せよ。(即ち各国の労働者に叛逆をすすめるものである。)

(2)　戦争は資本主義の一般的危機を最も明瞭に表現するものである。戦争の阻止はブルジョア制度の覆滅によつてのみ可能である。

(3)　共産主義者は一切の戦争に反対するのではない。中心スローガンは平和ではなくてプロレタリア革命である。現代における戦争には三つのタイプがある。第一は帝国主義者間の戦争、第二は植民地民族の革命的解放戦争、第三はプロレタリア国家と資本主義国家との戦争である。労働者は帝国主

義戰爭を内乱にみちびき民族解放戰爭を助けプロレタリア国家（つまりソ連）を擁護すべきである。資本主義国の労働者は自国政府の敗北をみちびくと共に、ソヴィエト政府の勝利のために積極的に努力すべきである。（ソ連は社会主義祖国であるから労働者がソ連を守ることは、自分自身を守ることであるといふ論理である。）

(4) ソ連邦擁護はあらゆる戰爭において中心スローガンでなければならない。（コミンテルン以後今日までソ連はますます強引且つ厚顔にこのスローガンを各国共産党員におしつけてゐる。）

(5) 軍備撤廢のスローガンは実現不能のことを要求するものにほかならず、それは革命的行為どころでなく、プロレタリアの武裝解除のいみをもち、内乱を否定し、社会主義を否定することになる。この種の傾向は容赦なく糾弾されなければならない。

(6) 軍隊内部に入り兵士を共産党の側に獲得すべきである。

(7) ゼネストによつて戰爭の勃発を止めうると考へるが如きは妄想である。ゼネストは、武裝蜂起の前提としてのみ意義がある。

(8) ブルジョアの武裝に対して、プロレタリアの武裝のスローガンをかかげよ。但しこのスローガンはプロレタリア大衆に向けるよびかけであり、ブルジョア政府に対する要求ではない。

(9) 社会民主々義者の平和主義、階級協調主義、母国防衛主義と戰ふべきである。

(10) 兵役忌避、動員ボイコット、軍需工業サボの如きは、アナルコ・サンジカリズム的方法であつ

て、かかる闘争方法は、プロレタリアートに害を及ぼすだけで実効はない。これはブルジョアに対する内乱に大衆を引き入れるときに障害となる。

(11) 軍事費反対、植民地及び委任統治地における軍隊の駐屯反対、青年、婦人、失業者の軍国主義化反対、戰争準備のためブルジョア民主々義的自由を制限する非常立法に反対、軍需工業労働者の権利制限に反対、軍需工業に対する補助金に反対、武器輸送に対する反対等は、反戰闘争の手段として採用すべきである。

右の如き根本方針をみれば、共産主義者が平和主義者にあらずして戰争主義者であること、そのいはゆる革命のために、むしろ帝国主義戰争の機会をも歓迎し、民族解放戰争を支持するのみならず、またそのいはゆる共産主義の勝利のための戰争を積極的に実行するものであることが判明する。

今日国際共産主義のアジア戰略の直接責任者は中共であるが、中共はアジア諸国の共産党に向つて革命の根本方式は中共の武裝蜂起より学べといふことをしばしば指示してゐる。武裝蜂起すなはち内乱が共産主義者の政権獲得の根本手段で、特にアジア諸国にはこの方式をとるべきだとするのである。

四、社会主義諸流派の軍備問題観

1　伝統理論としての民兵主義

わが国ではマルクス主義だけが社会主義で、ひいてその継承者と称するソ連共産主義が最も正統的な社会主義であるかのごとき錯覚をいだいてゐる者がある。これは次の二つの点でまちがつてゐる。第一に今日では社会主義とは一の綜合名詞であつて、共産主義のほかにドイツ型社会民主々義、英国型社会主義の二大体系があり、キリスト教社会主義、サンヂカリズム、アナーキズムの諸派もひろい意味で社会主義に属する。第二にソ連共産主義はマルクス主義の西欧色を失つたロシア的な社会主義であり、且つ社会主義が目的でなくて領土拡張的帝国主義の手段化してゐるのはこれまでいくどものべてきた通りである。

社会主義はヨーロッパにおいて少くとも百五十年の歴史をもつてをり、理論及び運動の伝統が真摯な人々の手によつて相当多量に蓄積されてゐる。新たに勃興するアジアの社会主義もその成果を社会主義一般の共同財産として尊重し且つ参照せねばならない。十九世紀以来社会主義者は軍備問題をいかに取り扱つてきたであらうか。

社会主義が軍国主義に反対するものであることは原則上当然のことで、軍国主義の道具としての軍

備にたいして否定的態度をとつてきたこともまた当然である。

しかし社会主義は断じて軍備そのものを頭から否定するものでない。軍力は物理的暴力だからそれ自身ネガチーヴなものだが、その使ひ方によつて道徳的なものに転化する場合のあることを社会主義者は知る。社会主義は国家を否定するものでない。軍力はよかれ悪しかれ国家の属性をなしてきてゐる。観念だけでこの現実を抹殺することはできない。社会主義者は軍備問題を歴史的に考察する。近代の民族国家の軍備の歴史的性格とその発展方向を知ることこそ大切である。

社会主義の軍備にかんする伝統的理論は常備軍に代ふるに民兵を以てせよとの思想である。軍備そのものは決して否定せられない。常備軍制度は中世の封建的武士軍隊にくらべるとはるかに民主的な制度である。しかし一般的兵役義務だけではいけない。これを民兵組織に転化せよと主張する。この思想は一八四八年のマルクスの共産党宣言のなかにも漠然であるが出てゐる。一八九一年のドイツ社会民主党のエルフルト綱領は、

「一般兵役義務をもつてする訓練を行ふ。常備軍にかへるに人民軍隊を以てする。宣戦講和は人民の代表者を以て決定する。あらゆる国際的紛擾は仲裁制度によつて解決する。」

と要求してゐる。一八七九年のフランス社会党の綱領にも「常備軍の廃止と人民の一般的武装」の一句がある。この佛独の二つの社会主義政党の綱領はマルクスの思想的影響のもとに作られたものであるが、これはヨーロッパのほとんどすべての社会主義政党を組織した第二インターナショナルにおい